

特22
793



子遺稿

前田園子寄贈本





本吉武之履歷摘要

明治元年二月十七日

常陸國新治郡常名村字新郭に生る幼名房太郎と稱す
後年に至り雅號を凸凹外史或は滅々子と稱す父は土
浦藩士武雄母は政子武之は其長子にして妹四人あり

同 八年

土浦師範學校に入る

同 十五年

東京某法學塾に入り法學及佛語を學ぶ

同 十七年三月

司法省官費法學生の募集に應じ試験に及第すと雖も

同 十八年六月

體格検査を受け不合格となる

同 十九年七月

第一高等中學校に入る

同 二十三年七月

第一高等中學校卒業

同 年九月

帝國大學法科大學に入る

同 二十六年三月

小石川掃除町に假寓中肺結核を發す

- 同 二十六年秋 白金養生園へ入院
- 同 二十七年秋 傳染病研究所病院へ入院
- 同 二十九年六月 世界の日本編輯員となる
- 同 三十年十月 小石川指ヶ谷町に居を定む
- 同 三十年十一月 任大藏屬
- 同 三十年十二月五日 東京府士族前田邦輔長女園子を娶る
- 同 三十一年一月 六合雜誌編輯員となる
- 同 三十一年八月三十日 男兒を擧ぐ日之介と稱す
- 同 三十一年九月 小石川柳町に轉ず
- 同 三十一年十月 非職被命
- 同 三十二年八月二十二日 男日之介腦膜炎にて死す此頃より病勢重きを加ふ
- 同 三十二年十月十五日 遂に永眠す
- 同 三十二年十月十七日 基督教式を以て葬儀執行染井墓地に葬る

本吉武之君の遺稿に題す

人生遭逢の奇固とに測るべからず。明治二十一年の頃なりしと覺ゆ。日本郷金助町の會堂に於て余に宗教上の質疑を試みし青年あり。軀體清瘦、哲面秀眉、誠實の氣外に溢る。顔容髣髴として今に忘ぜず。これ實に余が本吉君を識りし始めなり。

君時に帝國大學佛蘭西法律を修めんが爲め高等中學にありしが、後幾許もなく進で大學の門に入りぬ。而も君か嗜好は當時既に文學の方面に傾きて、法學の乾燥無趣味なるを厭ふの情漸く強く、餘暇あれば即ち古今の文學に涉獵して以て、藻思を練り、傍ら英獨の語學を習得して、西歐の名什亦概ね通せざるなきに至れり。不幸にして病魔頻りに臻り、君が身を襲ひ、研鑽益深からんとして、醫療の急を告ぐる。こゝと愈々切なり。知友交々之を諫むるも、君笑つて聽かず。大學卒業前三ヶ月に至り、不幸遂に書籍を擲つて病床の人となりぬ。後ち病稍々愈るに及び文學の嗜好益々深く、屢次筆を執て其造詣を披瀝し之を世に問へり。又二三の大問題を論究して、其全力を傾注する意ありしも、精勵度に過ぎて復たび起臥の自由を失ひ、三十二年十月

に及び、小楠海舟の樂みし所を尋ねるに當り、君は知らず、陽明の學問人物如何を窺はんとするに至りぬ。本吉君は陽明を讀み余は後素を讀み彼此相對して論じたる事もありしが、陽明後素共に一種の哲學的見ありて、思索上より強て説を構ふる事あり、本吉君も余も斯る構説に關しては多く興味を感ずる能はず、我等が愛抱措く能はざりしは、寧ろ兩者の言動の思量を待たずして、雨雪風雷自然に發動したるものにありしなり。陽明が自然界を有情視し、其詩的眼中に非情の天然無かりしは、本吉君の深く同情を表したる所にして、學究の餘暇郊外に春花秋月を賞し、或は暑假相州の海濱に涼を求め、上毛の平原に田家作苦の趣を尋ね、苟も心に樂しむ所ある毎に本吉君即ち陽明の言句を誦せざる能はざりき。本吉君性寡欲、我執の念淡く、纏纏一心を身外に物化するの趣あり、蓋君が心中天然と人間との區別甚大ならざりしなり。君が漸くに萬葉の古調を尋ね、景樹の淡きを樂しむに至りしは、恐らく自己の心の反映を認めしが爲ならん。

余の始めて本吉君を知れる頃は、君の手にせる洋書は佛書にして、佛蘭西文學者の筆往々人間を赤裸々にして描く所深刻なるものあるを語る事數々なりしが、其

頃よりして君は英書を學ぶに至りぬ。文典を一讀するや否か直にマリーソン、カライルを讀み始め、而かも英書を讀むに純然たる佛語的發音を以てしぬ。其進行の突飛なる余は一驚を喫せざるを得ざりき。然れと本吉君由來突飛の進行をなすに於て妙あり、陽明を讀み、宋儒を讀み、萬葉を讀み、古今集を讀むが如き、太抵其初めは余の勧めたる所なりしが、本吉君の讀書法は極めて迅速にして、忽にして余は本吉君の教を乞ひ、其説を聞くの頗る興味あるを覺ゆるに至りぬ。英語の如きも僅か二年を経ざるに君は既にホルンス、ウォルズ、ウォルズの幽雅の詩想を弄し、普通讀者の企て及ぶ能はざるものありき。君の突飛的進行はなほ止む所を知らず、更に道を轉して獨逸語を學び始めたり。余は君が獨逸文典を一讀したるや否やを知らず、只冒頭よりフイヒテの『告獨逸國民』及カントの『純理批評』を讀まんとして大學の圖書館に頻りに字彙を繰りつゝ、君の刻苦するを見たり。君一夕大學圖書館より歸るの途次余に語て曰く、フイヒテを讀みては心氣六合に飛揚して下界の人間の瑣事に齟齬する有様如何にも惘然に感せらるゝものありと。君は又ゲーテを熱心に繙き、初よりファウストを讀まんとしてファウストの述懐を誦誦して、嗚呼余又神學を

も學びぬ」と嘆せし所意味頗る深遠なりとし、更に可憐のグレッツェンに至ては君同情の念禁する能はざりし、ゲーテの歌謠中君の極めて愛玩したるはデルゼンゲルの一篇なりき。

四

余と來往せる頃の本吉君は純然たる學生時代の本吉君にして全く世外の人なりき、嘗に世外の人なりしのみならず身外の人なりき、本吉君に一家一身の艱難系累なかりしに非ず、然れど一身一家の事の如きは本吉君曾て人に談らず、塵想を以て他人の心を煩はさざるのみならず、亦自己の心をも深く煩はさざりしが如し、病の故を以て大學を去り、或は病院に或は海邊に療養したる時に當ても曾て一言病苦を人に訴ふる事あらざりき、余一日北里氏研究所の病室に君を訪ひしに始より終に至るまで談和歌の事に涉りて一言病の事に及ばず、去らんとするに及び余強て君の病狀如何を問ひしに、君答へて曰く、發病の初より肺菌の研究に身を委ねて今日に至りしならんには、余も名高き肺菌學者になりたらんと、思ふところに及ばざりしは惜しき事なりきと、明治二十九年夏余の海外に出遊せんとする頃に於ては本吉君病狀頗る佳良にして、偶々余の七里ヶ濱極樂寺の海邊に避暑するや、君突然

東京より來りて余を訪ひ、白砂青松を眺めて閑談時を移し、夕陽漸く波に浴するに及んで君飄然として去りぬ、本吉君と余と靜に對話したるは實に之を以て終としたり、君が雜誌記者となり、大藏省に職を奉し、前田氏を聚り、一家團樂、一子を擧げて、人の夫となり、父となり、社會の波浪のうちには漂ひたる頃は、余も亦海外諸州に行雲流水を逐ふて漂泊するの身となりぬ、爾來本吉君と余と音信を通する事極めて稀なりしが、苟も海外風物の新なるに逢ふ毎に余は本吉君を思ひ出ださざるを得ざりき、殊に霞立ち罩むる英蘇山水の間に、ホルンス、ウルズ、ウオルスの昔を尋ね、イエーナ、ワイマールの霧深き處、フイヒテ、ゲーテの舊を探り、或は巴黎の都に英雄文豪の跡を訪ふに及んては、愈本吉君と對談したるの日を想はざるを得ざりき、或は太平洋の孤月に嘯き、大西洋の怒濤を楽しみ、或はロッキリーの紅葉を賞し、アルペンの白雪を蹈むの際亦本吉君を思ひ出たさざるを得ざりき、幽邃なる端西湖邊の風色寂寥たるボンペイ舊趾の眺望余は故國に歸りて必ず本吉君に語るのあらん事を期しぬ、然るに天は君に年を假さず、余の歸朝に先づ一年君は遂に不歸の客となりぬ。

五

余は海外巡遊中、倫敦にウエストミンスター、アベールあり、巴黍羅馬にバンテオンありて、其聖殿に入る者をして髣髴として過去の偉人名士の姿に接するの思あらしむるを見たり。蓋吾人の肥臆も亦一小バンテオンの如きか。吾人が一生遭逢する人間事物中殊に吾人肥臆の殿堂中に印象を留めて磨し去らんと欲して磨し去る能はざるものあり。本吉武之君の如きは即ち此種の人にして、君の清明なる俤は、希臘彫像の高貴なる風采以太利繪畫の古雅なる容貌と共に髣髴余が胸臆に存し、常に余が忘るゝ能はざる所たり。本吉君が余が胸裏に刻みたる淡泊無我の爲人を余は君の紀念として永へに余が心の飾となさんと欲す。

明治三十八年十月十五日

松本亦太郎誌

滅々子遺稿目録

論説及批評

香川景樹の歌論

桂園派の歌論を論じ併て淺瀬の波第二篇を評す

記事及小説

つんぼ庵日記

雲水漫録

月かけ

隨筆類

杓子定規○美麗しき足○新春○葡萄畑○かき馴る燈心の記○名譽

を解す○彼の月○彼の文學の大家を抗にせんか

詩歌類

折にふれての歌

新體詩

書翰類

滅亡の遺稿

歌論及批評

香川景樹の歌論

(一) 緒論

徳川の時代に幸ひて日本は始めて外國にも誇り得べき大なる一の學者らしき學者を得たりき

契沖が古今集の序に註せしを見れば貫之が花になく鶯水にすむかはづの聲を聞けば生きとしけるものいづれか歌をよまざりけると書き置きしに就き鶯蛙のよみし歌實際萬葉にありとの説もその頃ありし契沖はこれに對し大なる偽りとて一言これを辯ぜざるを得ざりき僅に一言なりと雖これを辯ずるの必要ありしを思ふ時はその頃一般智識の笑ふべきほどをさなかりしさまも想像し得べく況や此頃論語われに傳はりて後既に千四百餘年を経て漢文學には仁齋徂徠の如き

ありと雖も秩序あり系統ある組織的研究の萌芽は未だ殆ど如何なる領域に向つても試みられざりき去れば學事は此頃を以て殆ど創業の有様とも見るべく此前後に出てし學者が大學者と稱するも猶をさなき所あるは其時代の文化のづから止むべからずされど大なる頭腦は大なる頭腦としておのづから際るゝを得ず

されど契沖は大學者といふべからず水戸黃門の囑托止み難く萬葉代匠記を作り白金千兩絹三十疋を贈られしを貧民にわかち残れるを以て寺院の修造に充て心に萬累を排してたゞ讀書著述に餘念なかりしは學者らしき珍らしき一生なりしと雖も彼が考想の跡は組織の見るべきなく系統の尋ねべきなし源氏物語湖月抄枕草紙春曙抄を始め八代集土佐日記徒然草其他の細註をも成就したる北村季吟も以て大學者とは云ひ難し彼は註釋家のみ

賀茂真淵は大學者としてまた古學派開祖の大歌人として當時に仰がれたり木下幸文の如きも縣居翁は世にたくまじき方にて學びのかた歌文の上よろづあかぬ所なくといへりされど彼が老後に著し、新學を見よ彼は非常の熱心を以て當時

の歌論を排し六十餘年の間に於て古學研究の結果として其胸中に醗酵せる新所見を排出せり故に新學一書は當時の歌論を排して後人の警醒を目的としたる真淵が歌學上所見なり然るに其歌論中に於て令律の學ぶべきを説き宣命の能く味ふべきを説くは何ぞやこれ當時國語の研究甚幼稚なりしたため萬葉の言語を研究すべき上の注意としておのづから其餘筆のこゝに走りしにもあるべけれどこれ其思想の根本に於ては大なる混雜あるを示せり嚴格を以て其全部とせる學術はこの混雜を嫌ふ真淵は大學者を以て許すべからず

歌の上に於ては古學派開祖の榮譽を負へるのみならず彼が歌の調べ高さものに至りては人丸の壘をも摩すべく今に於ても感歎すべきもの尠からず日本の歌には雄々しき所即ち謂ゆる雄壯の調べ欠けたりとの説は萬葉に於て隨喜し真淵の歌もこれが爲め幾段の高さに置かれたりされどこれ果して正當の見解なるか今試に真淵が歌の中にも最も雄壯なりとて人々の云ひ囁すものに就て論ずべし即ち

信濃なるすかのあら野を飛ぶ鶯の

翔もたわに吹くあらしかな

雄壯といふは只外面の姿のみすかのあら野といへば雄壯らしくそこを嵐吹くといへば一層雄壯らしくそこへ鷲が飛ぶといへば更に雄壯らしく換言すれば雄壯らしきものをみだりに集め来りて一歌をなせるに過ぎずこれ例へば髪立てる鐘馗の顔力餘れる仁王の腕毛の逆立ちたる鬼の足を混交して一個雄壯の丈夫漢を書き出さんとするに同じあら野といふこれ只一の宛名にあらずやあら野といへばとて深く考察する時は何の雄壯の感念もあるべきにあらずそは猶ほ貫之が望月の駒の歌に於けるが如く望月といふことたゞ單に所の名に過ぎざる時は水に影見せてとあるもたゞ言語上の戯れなると同じ雄壯なるもの鷲にも限らざるべしされど眞淵に取りてはすかのあら野といひ嵐といひ翔たわむといへばこれ鐘馗の顔なりしならん仁王の腕なりしならん鬼の足なりしならん更に左の歌を見よ

にはほどりのかつしかわせの新しぼり

くみつゝをれば月傾きぬ

かつしかわせといふこと笑ふべきなり江戸濱町なりし眞淵が縣居の家にはかつ

しかわせのもとより蓄へられしにあらねば葛飾わけの新酒といふもの當時別にありしにもあらずこれたゞ萬葉中より借來れる例の虚名にしてにほどりの葛飾わけをにへなすともなどあるを思ひ合さずば何のをかしみもなし春日野山の題に見渡せば天のかぐ山うねび山争ひ立てる春霞かなと直に天香具山畝火山を引出し來るも同じ天香具山畝火山がいつるほどをかしかるべき萬葉の研究者なる彼は萬葉中の地名物名まで漫りに興あるものにして其歌によりみ入れたり彼が歌はよしと言はるゝものと雖も總じて萬葉の肥臆を離れず金槐集にも見えず萬葉にも見えず眞淵の眞淵らしき歌はいづこにありや彼は所に觸れ物に觸れ情に觸れ換言すれば宇宙に對して感哀禁じ難く限なく溢るゝ如き思を瀝き出すといふにあらず萬葉の肥臆を離れて彼が歌はなきなり門弟なる千蔭春海などより彼が歌才の幾層の上にあるべきはもとよりなりと雖も彼が口を極めて稱賛せし鎌倉右大臣の金槐集中よしと言はるゝ歌と眞淵が集中よしと言はるゝものと相比較したらんには眞淵の歌が別に一新呼吸を傳へしといふ所は見えず若し單に詠歌の上のみより論ずれば古學派開祖の榮譽はこれを鎌倉右大臣に譲らざるべから

ず請ふ真淵を大なる歌人として稱賛するを止めよ彼は天才の歌人にあらず
真淵は既に大なる歌人にあらず大なる學者にもあらずわが取るべき結論は云は
く真淵は歌學者としてその最も尊敬すべきを見ると彼が効績は歌其物の上にあ
らずして彼が歌論の上にある彼が一世を風靡し得たるは全く彼が歌論にあり
されど彼が著述は大なる勢力を以て同好の間に傳へられたり伊勢松坂なる本居
彝庵も小兒科醫業の傍彼が著述を見て寶曆十四年正月に遂に彼が門に入るに至
れり時に彼は既に七十近き老翁にして彝庵はまだ三十五歳の才氣盛なりき彼は
知人の書に答へて云はく松坂彝庵へも御面談の由才子に御座候へども未學業不
弘候何とぞ宜しくなれかしと存候事也と宜しくなれかしと彼が願へる彝庵は彼
が見しより恐くは此頃既に大なる冀望を有しき彝庵は畢生の事業として古代史
の研究に取り懸りぬ三十五歳の時始めて稿を起し其後三十四年の刻苦と忍耐と
は遂に古事記傳なる絶世の大著述を成就せしめぬ暗黒なりし祖先の歴史は之が
爲め一大光明を放ちぬ古事記を緋けば浩蕩として廣き廣き學の海に誘ひ出さる
るが如く時に閃々として射り來る智識の光は如何に彝庵が眼光の鋭さかを思ふ

べく論ずる所混雜ならず日本の學者には有り勝ちなる旨と研究すべき所を忘れ
て枝葉の解釋に精しきが如くならず研究すべき所は根より根を尋ねて其所縁を
探り拾集し得たる材料は其混雜の中より統一のある所を看取せり換言すれば彼
が研究は今日の學術に於けるが如く系統的にして又組織的なり明治に至ると雖
も栗田寛が氏族考神社考戸籍考等の諸著述は唯材料の拾集にして一の異見らし
きものを出し得ず小中村清矩の陽春蘆雜考の如き餘りに平凡なり若し此等の散
漫なる諸著述より讀みて古事記傳に移る時は誰か其偉大なるに驚異の感なかる
べき今日より見れば彼が所論には素より笑ふべきもあり神道の如き無益の論辯
に耽りしは取るべきにあらざるもわれは彝庵を以て日本に於ては兎に角學者ら
しき大なる學者なりと言はんとす古事記傳のためなる三十四年の勤勉も實に學
者らしきならん

彝庵が學術は素より伊勢松坂なる田舎に葬らるべきにあらざりき真淵の頃に比
すれば時代が一步を進みたれば彝庵が所説の傳はるべき領域も廣く真淵の育成
せる古學の聲は到る所に聞ゆるに至れり而して其聲のある所は總て彝庵が世界

なりき江戸に於ても村田春海の如き歌の上に於ては異論ありしも葬庵が學術に至りては一言の譏辭なかりき葬庵既に老ひ七十二歳の高齡を以て人々の請にまかせて京都に上りし時は葬庵が榮譽の絶頂にして此時四條烏丸の寓居には諸國より聞き傳へて尋ね來るもあり中山大納言等京都の貴紳は争ひ葬庵を招きて延喜式又は萬葉集の講説を聞きたり

此時香川景樹も葬庵が圓山の遊び先きに尋ね行きて彼も葬庵が著述の愛讀者なるを告げ著し給へる御書ども早う見たてまつりてみかげを蒙ぶること鮮からずと云へり去れどこれ學術の上なり當時葬庵は如何に景樹を見しや傳ふる所なきも此大著述あり榮譽ありまことに學者らしき葬庵も後にはこれを見ること一片の木葉よりも軽く古今貫之の長歌など一向不解本居などさんく罵り玉勝間に書出候事不屈の事に御座候と喝破し芭蕉にても蕪村にても若し世にあらば一棒喰はさんとしたるはこれ香川景樹が歌の上に於ける抱負なりき

(二) 貫之の歌論

景樹の云はく歌の誤は千年近き誤に侍ればと此言に據れば貫之以後世々の謂ゆ

る歌人といふ者出てしは多けれど一人として歌の歌たる所以を解し得るものなく景樹獨り群盲の間に立ちて千年の誤を看破せしと信ずるものにして其門弟なる兒山紀成が言を藉り來れば景樹は千載不傳の説を始めて唱へ上げたるものなり千年に近き誤といひ千載不傳の説といひ俄に之を聞く時は非常なる創見の間存すべき如くなれどそれ果して然るべきか今これを檢せんには先づ景樹以前の歌論に溯りて景樹以前には果して如何なる歌論が行はれしかを究めざるべからず

日本の歌論は古今集序を以て其淵源となすべし此序以前には凡そ歌論と稱し得べき文書の存するものあることなし小澤蘆庵も其著述なる布留の中道に於ていにしへ歌のよみかたの書なし古今序其はじめなりと記せり故に歌論の沿革を序せんと欲せば古今序に説く所歌論の要旨を擧げざるべからず去れど古今序は議論といへば議論なれど素とこれ古今和歌集の成りしを天皇に奉らんとして貫之が書き添へたる一の華文なれば今は逐一これを解釋するの要なし只歌論の淵源として歌の定義らしきものを擧ぐれば足る歌の定義らしきものとは古今序の冒

頭第一に書き出したる所にして其全文を擧ぐれば左の如し
やまとうたはひとつこゝろをたねとしてよろつこの葉とそなれりけるよ
の中にある人ことわさしけきものなれば心に思ふ事を見るものさく物につけ
ていひいたせるなり花になく鶯水にすむかはつこのあをさけばいさとしいけ
るものいづれかうたをよまさりける

これ後世歌人が歌の何物たるを説明せんとして引用する所歌の何者たるやに對
する貫之が解釋なり華文なれば言甚長しと雖も縮めてこれを言ふ時は貫之が本
旨はたゞ左の如くに歸すべし云はく

やまと歌は心に思ふことを見るもの聞く物につけていひ出せるなり
これ別に説明するまでもなく貫之が本旨は極めて明瞭なり歌の定義として餘り
に單純にして歌と談話との區別さへ能くは見えず喜憂共に心に餘る時は見聞す
る所に従ひ談話に訴ふること同じく世の常なればなりよろづの言の葉といふも
歌に限りしことにはあらずたゞ花になく鶯の例ありて前に謂ゆるいひ出せるな
りといふ中には談話の含まぬものなること想像して始めて知るべきなり且これ

にては歌の因て起る所を示したるまでにて換言すれば歌とは何ぞやの間に答へ
得たるものにあらず

されど今これをやまと歌の因て起る所を示したるものとせばやまと歌發達の歴
史にも合ひこれよりまことなることはなし古事記のはじめに見えたる歌の如き
いづれも鶯の花に鳴くが如くにして成りしものにて大國主神が妻を求むとて思
を歌に述べ素盞雄尊が八重垣作るの歌といひ皆これなり殊に神武天皇が大和國
へ討入りて兄師木弟師木を擊靡せんとせし時軍中糧盡きて天皇みづからたゝな
めていなさのやまのこのまよもいゆきまもらひたゝかへばわれはやゑぬしまつ
とりうかひがともいますけにこねと歌へる如き極めて天真なるものなり

これ他國の歴史には多く求むべからず我古代史に殆ど特有なる優美の一事實な
りされば貫之の古今序は此事實と相顧みて一の大なる歌論上の誤謬を生じぬ
この誤謬は今日まで驚くばかりの勢力を以て歌論上に繰返さるゝ所のものにし
て即ち歌は心に思ふことを見るもの聞くものにつけ言ひ出るものなれば情迫り
し時は何人も歌をよみ得べく山樵漁人も皆歌人となり得べしといふことこれな

り然るに意外にもまた古今序の所言より發達して動すべからざる一の歌論あり
歌はたゞ思を述ぶるものなれば歌に師なしといふことこれなり

(三) 貫之以後の歌論

貫之が勅に依り古今集を奉りし延喜六年より荷田在滿が國歌八論を草したる寛
保二年に至るまで八百五十六年謂ゆる八代集は此間に於て編纂せられ他の私撰
の歌集も世に出て殊に後鳥羽土御門須德三院の時代は戰亂暗黒の時代と稱せら
るゝにも係らず歌道は最も盛にして前には俊賴基俊の二大家あり其後賴政西行
定家の諸歌人踵を接して出てたりされば歌論に關するものも諸宗匠の口より出
て、門弟に筆記せられ或はみづから筆も取りて後進を戒めたるものも多くは此
時代に出てたり故に歌論は此時代に於て一大發達を成したらんと思はるべけれ
ど冷かに之を視る時は別に目新らしき變化に接することを待ず戸田茂暉は今こ
ゝに劃せる時代の末期に於て此時代が最も好尙せる歌論を破碎せんとしたりさ
れどこれ其説く所は中世に於ても既に唱へられしものなり

されど歌風の上よりすれば此八百余年の間に於て其變化の極めて觀察すべきも

のあり既に人丸あり赤人あり伎巧といひ專業的傾向といひこゝに始めていふべ
きにあらねど上古の最も單純なる歌は此時代には既に見るべからずして古今集
によりて既に顯はれたる伎巧的傾向は次第に發達し新古今に於ては華麗の頂上
に達しぬされば三代集以下の撰集は後世の宗匠目あるものは後進のこれに手を
觸るゝを禁するまでに至れりこれと同時に後鳥羽土御門順德三院の頃に於ては
歌は殆ど専門業の如くになり謂ゆる俊賴派といひ基俊派といひ昆沙門堂家と稱
する如き歌風の上に於て幾多の流派といふを生ずるに至れり

伎巧を以て互に相争へる歌の名家はかくて互に其門戸を張るに至りたれば其歌
論上の所見は極めて秘密に書き寫されてたゞ子孫より子孫に傳はるの風を生じ
たり要するに此歌の最も盛なる時代に於て伎巧といふこと歌風上に於ては殆ど
一世の好尙を形つくりたればこれら歌の大家が口授せし所の歌論が又其影響を
受けしは勿論なり

故に此時代殊に歌の全盛なりし間は伎巧といふことの必要より重に詞の上に注
目するに至れり躬恒の名を以て傳はれる秘藏抄といふものあり其眞偽を知らず

と雖も其中卷に於てはたゞ五十五種の物名を挙げたゞこれを説き明したるものなりこれたゞ普通の歌人が心得ぬ物名の説明なれば別に咎むる所なきも後に於てはある書に出て若くは名匠の使用したる物名ならては使用せざるの窮屈を告ぐるに至れり但歌の詞の上に於ける諸名匠の歌論は果して如何なるものなりしか悉しくは後に述べんとす

次に詞の歌論と相聯絡して發達せるは風體若くは姿と稱するものこれなり而して風體若くは姿といふものゝ意義は別に嚴密なる解釋を要せずして此時代には通用したるものゝ以て畢竟するに風體と姿とは全く同意義なりき故に今はたゞ姿の字を用ひこれに關する歌論を窺ふ可し

古今序には貫之が前代諸家の歌を評せる中に僧正遍昭は其さま至れどもといひ大伴の黒主は其さまいやしといへる其さまは姿のことにして姿に就ての解釋は公任卿獨りこれを試みしを見る而して公任卿の解説は更に下りて基俊の悦目抄にも再び引用せられ頼阿の井蛙抄にもこれを引きぬ故に姿に關して公任卿の解説動かすべからざるものと見られじものなるべく即ち公任卿の説によればすが

たといふは打きゝゆゑありて歌ときこえもしはめづらしくそへなどしたるなりこの公任卿の解説は猶甚單純なりと雖も打聞ゆゑありなどいふ所殆ど歌の本質にも觸れたらん如く後世の言語を以てすれば調といふことも充分こゝに含まるべし後鳥羽の御代より二百餘年も前の解説としては大に進みたるものならん此解説に對しては前記の如く一の反對もなく姿といふものゝ解説としては一の威權の如くに引き用ひられたり故に姿といふことに就きては公任卿の解釋以上に考ふる所なくして姿の意義よく相通じたりしものなるべしされど歌風上の實際問題としては如何なる姿が好み誦むべきかの問題あり諸派の歌人は各その門弟に向つて歌の姿のよろしき所を教ゆるに忙しかりき諸家の歌論の書といふもの又多くはこれらの解釋を以て充ちぬ

故に後鳥羽土御門順徳三院の頃姿のよきものとして世にもてはやされしと見ゆる歌一つ二つを擧げて當時の好尚を示し置く可し而してわがとれる後鳥羽のよしと云はれたる所による即ち後鳥羽院御口傳に従へば定家卿が庶幾する姿とは

うかりける人をはつせの山ねろし

はげしかれとはいのらぬもの
にして

うづらなくまの、入江のはま風に

尾花なみよる秋のゆふぐれ

の歌は後鳥羽院もみづからうるはしき姿なりとてこれをいはれ釋阿はこれほど容易くは出て來難しと申しきとあり而して後鳥羽院が定家の歌を評して定家は生得の上手にてこそ心なにとなければどもうつくしくはいひつゞけたれば殊勝のものにこそはあれとて

秋とたにふきあへぬ風にいろかはる

いくたの森のつゆの下くさ

この歌をたへられたりまた俊頼の子なる俊惠法師は最も好ましき歌の姿を評して五尺の菖蒲に水かけたらんが如くなるべしといへりさ
詞に關しては二様の反對なる歌論の傾向を生ぜり一は或る細張り内ものものに限りて拾ひ摘むを容さんとし一は詞にはもと制限なきを主張せり

歌詞制限に關しては種々の別あり或は主ある詞と稱し或は一向に不可用詞と稱し或は庶幾すべからざる詞と稱し其目は種々あれど要するに當時に於ては歌會といふもの流行するに至れり其會の宗匠たる歌人の判にはいつもある詞に限りこれを斥け例へば嘉應二年十月住吉の歌合にゆかしきといふ詞を俊成卿が誠に歌の詞にあらずと判じ治承二年右大將家の歌合にゆかしきといふ詞兒女の畧せる詞なりとの判ありて遂に庶幾すべからざる詞となれる類なり其他庶幾すべからざる若しくは庶幾すべき詞といふもの歌合の判より多くは來りしといふも不可なし近來風體抄にも制詞の事を説きて近代多く禁制の詞ありといへどもいまだ其出所不分明或は定家卿爲家卿の一向可止の由申されたるもあるべし或は其歌にとりてわるしと申されたるもあるべし或は又あまりによき詞にて有間人毎にこれを用るゆへにやめられたるもあるにやといへりこれによりて見れば或る歌合に於て宗匠のよき判を得んと欲せば其宗匠の庶幾し若しくは庶幾せざる詞に懸念するの要止むべからずして禁制の詞といふもの生じたるなり故に禁制の詞といへば甚窮屈なる如くなれど全くはさにあらず其歌論の根底に於ては猶自由

の傾向流れたり定家卿も詞は三代集を出されと説きしに過ぎず自由の傾向とは詞にはよきもなければあしきもなくたゞつゞけがらによりて歌ともなり歌ともならぬなりこれ最も進歩せる歌説にして鴨長明などは此意見にして無名抄の始にこれを記し二言集によれば定家卿さへ又この説には異論なきを見る即ち所詮たゞ詞世俗詞といふ中聞よくてまかも我よまんずる歌の心に可相叶を世俗の言なりとも詠へきなり古歌の言葉なれども萬葉集の中に耳とをか詞をよむ事不可然とぞ定家ひとへにいましめ給ふめるとあり

此序論減々子死去の一ヶ月半許り前より自ら口授して園子に筆記せしめたるものなれど未だ終を告ぐるに至らずして止み此序論了るを待つて歌論全體の完結をも爲す事なりしが遂に其意を果す能はざりき

香川景樹の歌論

景樹はいたゞ當時の歌風を排し、こはやがて千年に近き誤に侍ればといひ、其病みて秋風たちし鴨河一月樓に在るや、十三夜の月もいまはあらざらん後のものと思ひ定めし時、彼歌道を思ふの念にこゑ堪ぬて、床の上ながら筆執りて我所見をばかき

殘さんとはしたりき、その景樹がみづからはかくまで信じて疑はざりしその歌論は如何なるものなりしか、また千年に近き誤とは何ぞ、隆高かりし桂の花いまはこのんの香もよばぬ里ありとも覺えず、景樹が歌論は歌學史上大に心とむべきものならむ、余はこゝにこれを論ぜんとす

わが見る所にては、景樹が歌論には、彼が性情の關係する所殊に著し、景樹はその初師とたのみて遂にはその養子となれる香川景樹と道の上の意見合はずして離縁せし由傳ふれど、其景樹と道の上の意見合はざりしはすなはち景樹の性情が養父のと相容れざりしが故にはあらざるか、村田春海は景樹がいたゞ縣居の翁を罵るをばまけじ魂と評せしが、このまけじ魂は景樹の殊にあさへかねしものにはあらざるか、當時のすね者なる小澤蘆庵が景樹にそこの才は走り過ぎたるが弊なりといはれし如く、景樹はその才のおそろしきまで非凡なりしより見るも又事實に就きて推すもまけじたましひの極めて強き方なりしは更に疑ふべからず、まけじたましひ強からていかで彼が如く歌ずきの稽古ざきたることを得べかりしぞ、二方より見て世の中に向ひて一派を打たてん志ありしも一には又全くこれがためな

りきといはざるべからず、されどまけじ魂とのみいひては我非をかざらん心もあるべし、されど景樹の眞淵を罵りしは別に謂あり、まけじ魂といひては當れりとも覺えず、余は思へらく景樹が物に屈せぬ氣性の大方ならざりしは更にもいはず、景樹はその好む所に一すぢに思ひかたよるの傾向ありて又激し易かりき、ざるからに兎もすれば偏僻なる方に走らんとしたりき、例へば景樹は眞淵を罵りてそゝるに根無事を吐くといひけるが、眞淵は果して一時の勢を好みて根無事を吐きたるか、景樹は眞淵を誤解したるもの也、金槐集を罵りて志ある人たえて見るべきにあらずと新學異見にある如きは余はただ景樹が病床に在りての激昂のさまを見るのみ、江戸の氣風の如きも京都の片田舎に住めりし景樹には終に得て解されざりき、されどここはその頃の歌人若くは歌學者の間には珍らしき事とも覺えず、例へば橘守部のふい所に由れば本君宜長の詞の玉の緒を出だし、頃は京都にては小澤蘆庵伴蒿溪江戸にては橘千蔭村田春海など何れもざる方にはうとくものせしか、ともすれば本居翁をそしるくせありきとあれば、宜長は何故そしられしかを思へ、そも千蔭春海如き江戸の眞中に大人々々とよばれながら、彼遠き西の都に後進な

る一の景樹がたとひいかなる歌をうめき出でしとて、さもことごとしげに二人まで聲を合せて誹謗すとば何事ぞ、更に眞淵を見よ、にひ學びなる一書は其初古説と題せしにあらざや、わが考定めたる所をば殊更に古説と題して世を驚かさんとしたるは何故ならむ、又古今集を誹して専ら手翳女のすがた也といひて、ひと向きにこれに衝き當りたるその勢恰も暴風雨が山の木立を抜き動かさんばかりのさま見ゆるは、景樹がその著書に創見又は異見など題し、鎌倉右府の歌をいたく排斥したると何ばかりの異なる所かあらむ、宜長がどろかさばやと玉箆を著し、をも併せ思へ、その頃の人々のさまほゞ推知し得らるゝなり、何ぞは獨り景樹に咎めむ、されど余は思へらく景樹は非凡の天才として好悪の感情殊に甚しく、又その情激すれば見ると見る物聞くと聞く者皆痛罵若くは嘲弄の料たらざるはなかりき、但打つけにそのよみ歌の上を見れば、景樹はそれとはまたく正反對の人と思はるゝ、さて極めて平靜の所も見ゆるは、これはた景樹が特質の一として見失ふべからぬ所なり、又聞く所に由れば、景樹は一生養生にて持ちし人といふ事も忘るべからざる所なるが、今は始く其激し易かりし方に就きていはんに、木下幸文がその先輩に

しかられながら景樹のもとへかよひをめし頃香川先日も申如く才氣は絶倫なれども其才のたゝること甚敷論といふ論大方世に反する事のみいひ香川はまことに御推察の如く大天狗にてこちらの腹がよくなくては附合にくき人物といひたるに思へ又景樹が江戸の歌人をば散々罵りて斐雄にいひ送りたる言の中にみづから末章の大口は是又例の出傍題屈心を伸たる戯言也とあるにも又師常に天仁遠波はいらぬものといはれたるは一時の激語なりと内山真弓がいひしを併せ思ふも景樹が激し易かりしはいかばかりなりしとするぞはた景樹は其師にまで櫻のみわが敷島の花と人にや見せん大和なてしこなど世にはすねたるが見ゆるは何故なちむ更に新學異見の字々風霜を挿むを思へさて又景樹が大方ならぬ心血をそゝぎしと見ゆる古今集正義の總論に紀氏の宿憤をのぶるに似たりとあるに見れば景樹の性情もいちじるしきにあらずやそもこの傾向は思ひひがめたる攻撃の矢の如くその歌の上に集り春海の門下なる秋山光彪にまでおのれ世にある事をしらてよまれれば理なりかし一たび對向などしたらんにはかばかりうけはりたる事はあらじとこそ思はるれなど馬鹿にされ或は歌風邪路とて勸勤蒙らん

の恐なとありしにつけてもいよ盛ならざるを得ざりしならむよみて蘆庵に送りける歌に身はつかる道はた遠しいかにして山のあなたの花は折るべきなどあるに見れば景樹は断じて藤原基俊一類の人に非ず按ずるに景樹四十一歳の時獨逸にてはたとひおぼつかなかりしとするもゲエテが一書を著はしてニウトンの色説の誤を正さんとしけるがそれより二十四年の後に景樹は其畢生の著述なる古今集正義の總論に我大御國大八島の本號を豊葦原の水穂の國として稱へつるは八百萬の國に優れて其水穂強く堅く清く甘ければ也といひさて其強く堅き事は其土の強く堅きが故也其清く甘き事は其水清く甘ければ也といひ萬の外國其聲音の濁濁不正なるものは其水土の濁濁不潔なるより生れば也といひ他邦は人民弱土弱水の中に生出て其性情より出らん聲音と雖も清潔なる事能はずさは人のみならず禽獸の聲までも更に皇國の禽獸の如きにはあらずなほ金石絲竹の無情の音に至りても其濁韻をまぬかれざるは水土自然の理にしてかの理なきに似たるの深理なるをやなどいふやうなる論をなして頗る得意の色見えしもあらずされど當時はよろづ物學びのいとをさなくて本居宣長が服部中庸といふ

人の天地初發説を卓説とほめたへ、或は歌に字餘りの苦しからぬ理を見いで、可秘可秘などいひたるとほど遠からぬ頃なりければ、當時に高くぬけ出たりし彼景樹も六十五歳の高齡を以てなほをさなき論のまじれりしは止むべからざる所ならむ、されど景樹がその弟子に教へて、あの太虚を星を見ずや其小に見ゆるものは高遠にして實は大也、大に見ゆるは必低しなどいひたるに見れば、其物に思ひ入るの力まことに驚くべきものあり、苟も一たびよからずと判じ定めたらん歌はたとひ後にてその歌が古人の詠なることを見いてたりとも、景樹はたえて赤面する者にあらず、更に彼が性情を見よ、門弟をつれて春の野に出て里河の流るゝあたり七草など摘みてあされ行きし事などありしより思へば、景樹はあまりにやさしきまでなり、その門弟の一人が父の讎うつとて出でたつ折のこしつる訣別の書を取装ひて常に書齋の壁にがゞげしとあるに見れば、彼がひくやかなる性情はまことに掬すべきものあり、更にその子を喪ひ妾を失ひし時を見れば、彼は男心もなかりき、又彼月を見ては泣きし(こは井上通泰氏より聞き得たる所也)といふより若くはそのよみ歌の天地萬有を心ある物としてこれに萬斛の熱情をそゞしより(例へ

ばこともなき野べをいへ、も見つるかなしぎの鳴くねのあはたゞしさに、春の夜のおぼろ月夜にねざめしてたえず、や雁のちもひたつらむ、さよふけてもゆる螢のかげ見れば、いまはと聲もたてつべきかな見れば、景樹は獨りその才のみならず情もいたく溢れたりと見ゆ、はた景樹が熱情の事は前にいひたる如く其激し易かりしにても知らるべく、或時の書狀に乍去冷泉家日頃の氣質に候へば又々不遠内には何ぞ一舉起り可申候若下拙歌風邪路など被及沙汰候様成事にも相成候へば、幸の事いづくまでも罷出、正路の風を解立候覺悟に御座候たとひ強ひて勅勘蒙候とも、幼年の志に候へば申援候て一步も不引道の爲に死に至候とも不悔所などあるにても明ならむ、さるからに景樹はありのまゝの人たりしは更に疑ふべからず、(景樹が非凡の天才たりし一事實より推すもこは疑ふべからず)余は思へらく、このありのまゝなるは景樹が骨髓なり、ありのまゝなるからに又その熱情の大方ならざりしものから虚偽粉飾に對して非常の不快を覺えんは、ちのづからなるべき所なり、更にいはゞこのありのまゝ、即ちまことは全く彼が好惡の表準となりて、早くよりちのづから一定の歌學上所見を促し、ならむ、そも景樹がみづから少きより古

今集を讀み耽りたる由いへりしはこれ即ちその好尚夙くより定りたるを明言するに異らず、何故これを讀み耽りしか、鶯の氷れる涙いまやとくらむとあるも、なきわたる雁の涙やちつらむとあるも、熱情なる景樹より見ればありのまゝの實情より出たる極めてまことなる言の葉にてはあらざりしか、天性の歌人たる景樹なれば古今集の歌のたくみなる所にいさゝかも心ひかれざりしとは思はれざるも、歌よむ事を技藝とひとしく思ふ人もあなるはあまりにわいためなき事ならずや、など後に云たるを思ふも、景樹が少きより古今集に耽けりしは全くこの點よりせしにあらざる事推測し得べき所なり、古今集が専ら景樹の好尚を促し、はその詞の殊に耳近くして、その所含の心の彼が情に極めて切なるがため、すなはちありのまゝなるがためなりきと斷せざるを得ず、そは後に景樹が一定の所見より古今集をば殊によしと考へ定めたるは全く當初よりの好尚に基けるにても思へ、さて景樹が關東の風俗、一時の勢を好み、篤實家も其舉に被催候て終に大言を吐、誠心を失ふに、至候事何の道にも、しか相見え申候、即眞淵のそゝるに根、無事をとき知らずしらず、名利に被走候事偏に土地の幣に御座候、千蔭春海等の浮華に流候も皆々性質

の隋弱のみにあらず候などいひ、又當地にても季鷹など繁榮なるにて御心得可然候などいひて、弟子にさとし、を見るに、其大言を吐くとひ根無事といひ、誠心を失ふといひ、浮華又は名利若くは一時の勢といひ、これ皆景樹が天性の傾向と全く相容れざるものなるから根本より腹の虫がすかねといふさま見ゆ、當地にても季鷹など繁榮なるにてもとあるは何ぞその嘲弄の骨を刺すや、更にいはゞありのまゝ、即ちまことは景樹が先天的好惡の表準として年をかさぬるに従ひていよく動すべからずなれりしを見る也、余は思へらへ、景樹が大天狗といはれたるは、一面にはまことといふがその性情にてありしから彼が所見は皆これより流れ出でん傾向ある上に、又一面には景樹は熱情の人なりしものから従ひて又激し易かりしものから、世に歌人と云はるゝものが紛々流俗を趁ふてともすれば虚偽に走るを見れば、嘲弄の傾向おさへ難かりしならん、而して是れやがて大天狗とは見えたるならん、いかにするも景樹はみづから信ずる所なくして徒に大言を吐きしとは思はれず、みづから信ぜし所とはたゞ一のまことのみにて、景樹が其四十の齡を超えて有意識とせしを待たざりしもの也、其大天狗といはれしは我歌をほこりしが爲か

將た古人の歌若くは當時の大家をたとしめいひたるがためなりしが考ふべし。されば又論といふ論大方世に反することのみとあるも、余はありのまゝなる景樹がこのまことといふ一點よりいたく浮誇に流れたる時論に激したるものと推測せざるを得ず。若し疑はゞかの狂ルソーのパラドックスを併せ思へ。總てを言はゞ余が見る所にては景樹は熱情にして激し易く、ありのまゝといふがれのづがらその動機なりき、そも景樹當時江戸の歌人に對しては、東海道には出るはかせぎ奉公に下るにて危き事に候、大名の道中に致度にあらずや、道の隈はつぶさからずとも登城の主意はうまくしらずばあるべからず、御一笑々々などともすれば嘲弄の鋒先をあらはしたるは景樹何に激する所かありけむ、當時のさまを考ふるに、眞淵は僧契冲荷田東磨に由りて跡つけられし古の學の道の山口をたどり種々の著述を爲し、景樹が生れし翌年には既に古學派の大立物たる名譽を以て世を去り、景樹が物まなびにとて、いくうさ瀬わたらむ未のあやうさもかけて、おもふけふの河浪などうたひながら京に上りし頃は、江戸にては既に千陰春海等

眞淵の後を受けて盛に門戸を張り、本居宣長また眞淵の門人として景樹が二十三歳の時既に六十一歳の高齡を以て自畫の肖像に、敷島のやまと心を人とはゞの歌をかきつけなどし、京都にては小澤庵庵伴蒿蹊皆その頃古學派の歌人として願白の人なりき、また景樹が生れしより十二年ばかり前には京都室町なる典藥の家に寄宿して、小兒科の醫術をまなび居たる二十七歳の本居宣長が契冲の改觀抄、餘材抄、勢語臆斷を讀みて古學の志を起し、翌年には眞淵の冠辭考を讀みていよくその志を定めしとあれば、その頃古學派の著書が専ら行はれたる大概は知るべく、熊谷直好が淀河より海路をへて周防なる故郷にかへりける折、船しばし下津井の湊にとまりければ、上陸してとある山寺にゆきけるに、その寺に法師の書見るありて何ぞと伺ふに、賀茂翁の新採百首といふものなりけりとあるにて見るも、景樹が始めて都のぼりせしよりは遙に一むかしの後に、猶古學派の著書が廣く行はれ居たるさまは思ひやらる、但新古今の歌風は當時なほ行はれざるにはあらざりしも、景樹が始めて都に上りし前後のさまはまた古學派の全盛とやいふべからむ、そも古學派は近體派といふが盛なりし後に出でたりければ、古學派の旗は勢まづ近

體派に對して立てられざるを得ざりき、但在滿の如きは新古今の頃を以て歌のまさかりとしたりけれど、東磨在滿の如きはたゞ古學者のみ、古學派の歌の開祖は眞淵なり、眞淵も初のほどは東磨在滿の心ばねと同じく中頃の世をむねと學びしとあれど、其一たび萬葉に奪心はるゝや、今體家の如きは物の數にもあらざりし、されば世々の京家の先達が立てをきたる究窟至極なるくさくさの法度掟といひ、若くはまちがひたる定家の假名遣ひなどいふは皆古學派によりて打破られたりき、然るに景樹が和歌に大野心を抱きし頃は既に古學派の時代なりければ、景樹が着眼は勢古學派の弊處に向はざるを得ざりしならむ、但景樹も初めのほどは古學派の説をよしとせしとあれど、其一たび反動するや、古學派は其攻撃の中心なりき、さて古學派の弊を見るにまづみだりに語格を説くとなり、凡そ人の歌を評せん、にその心のいかなるか、は姑くおき、語格の誤を正すを以て歌の第一義とするに至りしこと、是なり、例へば本居宣長の如きも玉の緒まで著しながら、そのよみ歌の上には語格の誤ありといたく罵られ、それを反駁する者は前の評者の評語中にある語格の誤を見て、これを嘲らんとするなど、語格の一事は當時歌人のいたき争なりき、千

蔭がさき草を著しくも又語格の誤を正すに過ぎざりしに、あらずや、守部が右の書どもを頭挿抄玉の緒八千草等といふ撰べりし人々も、中畧、只めづらしきにめうつりして幾多の歌の中より、いとたま／＼なるを、天仁遠波、殊更に引出して、こはめづらし、おもしろしなどいひおけりしより、それを打見る人、われも其めづらしきに習はんなど、かの稀なるまねびして、ものに進みは、やき世の習こそひが／＼しけれ、其甚しくおもひ泥めるに至りては、只尋常のたひらかなるは、さかしからじとや見ゆらん、或は古歌に出る天仁遠波は此ころよむ人すくなし、われそれをよみてんなどほこり、或は二重にかゝれる天仁遠波を、人よみ得じ、おのれこそめづらしくよみたれなどいひて、其歌のよしあしさを思はず、天仁遠波の方より取こしらへてよむを、かそこさわざとさへ、思ひとれるが、開ゆるこそ、をこがましく、かたはらいたきわざなりけれといひたるは、古學開けてよりの歌弊の急所を衝き當てしものならむ、次には今めきたる詞をば、故もなく俗なりとおとしめ、ともすれば耳遠き古語をつらぬること、是なり、熊谷直好がうるま人と語ふ如く、うるま詞さくらん心地すなどいひたるは、是ならむ、次に歌の心をばともすれば、古歌の境にかぎりて、其みやびといふ

がひたすら古に擬せんとするにありし事これ也、例へば眞淵が或日その家にて春日野山といふ題詠に見渡せば天のかぐ山うねび山争ひたてる春霞かなとよみしにても思へいかなれば天のかぐ山うねび山か持いてたかりしぞ、總じていはゞ古學派の弊は景樹が今の世に歌とよみて取あつかふを見るに、月花によれる假初のなさは云もさらにて、悲みのかぎり悦の餘りをいふにも大かたは古き例により雅びたる詞になづみ、其誠のこゝろばせを失へるなん少からずと評したるは是なりけり、更にいはゞひたすら古になづむといふが古學派の弊なりき、さるからに古學派の歌はその趣の異なるにも係らず、ともすれば今體家のごとく全くの作り物とならんとせしがいたき弊なりけるが、而もこれ古學派一般の傾向なりき、すなはち古學派の歌は景樹の熱情には殊に的切ならざりきと見ゆ、更にいはゞ是れ景樹には極めてまことならずと見えたるなり、景樹が性情なるありのまゝといふ先天的好尚とは全く相容れざる即ちからさへづりたる一大病處ありけるもの也、さるを桂園一枝などは天仁遠波もあらずと罵られ、又景樹が歌は詞卑俗なりと嘲られ、たま〜思ふかざりの實情を打出づれば直情徑行などいひて世のよき物笑とさ

れんとす、景樹たる者豈激せざらんや、たとひ大天狗といはれんもありのまゝなる彼景樹はその熱情或は嘲弄となりて例の大口とはならざるを得ざりしならむ、そも又この景樹の性情とこの時病とは全く景樹を驅りてその歌學上所見を組織せしめしにはあらざるか、そはなほ次に細論せん

附けていふ右景樹などの書狀を引きたるは大方は井上通泰氏の桂園叢話に由れり

景樹の歌論を説かんには、まづこゝに景樹が性情に願ふ所なきを得ず抑もその性情に就きて、景樹が特に著しかりしは、その天真の極めて爛熳たる所にあるべし、更に云はゞ景樹はその情いたく溢れたり、たとへば子を失ひては、かうも幼くなり、けりな、こは何處よりか來れる、いやめのかたわなり、景樹にはあらず、ゆめ笑ひ給ふな、杯いへる如く、その情溢れたるが故に、また極めてあらはなりき、去ればその反面に於て虚偽虚飾といふは大方天才の性情と相容れざるが如く、景樹はまたいたくこれと反撥するの傾向を有しき、即ち名望利達若しくは名聞利用などいふを筆毎

に門人の詠草に属り、眞淵を勝りては、大言を好み、知らず識らず名利に流るといひ、熊谷直好を褒めては、直好が獨歩はこのあてけなきが故のみなど云るは、景樹が専らその性情の根底より虚偽虚飾に對して深く憤れる所ありしに由れり、さて景樹はかくて虚偽虚飾に對し反撥的の性情を有せしがこの性情はそのまゝその歌論の上に顯はぬ、これ徹頭徹尾歴史的ならんとせし本居宣長とは區別すべき所ならん

景樹はまたひと向きなりき謂ゆるモノチイゾたとへば人にのみ家の事を打任せ、實をさへ出ださせつゝ、身は思ふ隨意々々、道の操をいさぎよげにいひ立てんことかはなど、人より諫められしまでにて、かれはひたすら歌にのみ耽りぬ、但景樹もみづから弱年より多病にして、人並の事は出来申さず、止むを得ざるの歌三昧などいひたれど、その歌三昧は萬事を抛ち、志ばくの病の床に起きかへりては筆を握り、眼を閉ぢ、耳を塞ぎての歌三昧にして、誰が何と笑はんも顧るべきにあらず、利害榮辱もとより打棄てゝのことなり、たとへ強て勅勘蒙り候とも、幼年の志に候へば、申抜け候て一步も不引道の爲に死に至り候とも不悔處など、その豪放の間に頗る

凝り性の所あるを見る、かの景樹が獨り狂へりといはれけるも實際歌の爲めには狂へるが如き所ありしなり、殊にその晩年に於ては顔ゆがみ、片耳しひ、足はなへ、今年の中はとても凌ぎ難くと思ひし時など、頻りに日暮れて途遠きの歎を發して門人の詠草に對してみづから傍若無人の言を爲すと稱し、門人を勵まして、愚老世にあるうち正道に導き置たきの婆心なりなどあせりしは、其深くみづから信せし所あるに由るべきは勿論なりと雖、また歌の爲めにやゝ狂へるが如き所明に見ゆ、かの江戸の文人村田春海は、短歌を以て、古へより世々に優れたる歌人も多く出て、めづらかなる巧み、おもしろきふしも云ひ盡たりと爲したゞ、長歌は、古今集の頃より、こなたには、こを旨とよめる人もなく、異なるふしいひ出たる人もなく、て、世々に歌數も少なければ、かく下りたる世にして、めづらかに新たなることをひとふしよみ出て、古人にも恥づまじき業を爲し得てんものは、たゞ長歌なりと説き、また春海常に存候は、古語の解釋は、契沖加茂翁を経て先生にて、幸居宣長をいふ、大抵大成致候事なれば、今よりは先生の御説などを定説となして、それより他にあながちに新なる説を求めんは、要なき事と存せられ候、蓋中世より以後の事などには、未だ先

生などの考へ及ぼさるゝに御暇なき筋も猶あるべし、今よりはそれ等の事を勉むべき事なりと存せられ候などいひしが、これは春海の飽まで四方を顧みつゝ、如才なき所にして景樹の最も惡む所なるべく、これ景樹が十三ヶ所の焼きつきありしといふ飯碗を用ひつゝ、利害榮辱の外に立ち直ちに人磨貫之を手に入れんとして、殆どその性慾の一部となれるが如き歌三味は、到底如才なき春海等の解する能はざりし所ならん、さて景樹はかくてひた向きなりしが故に、またその歌論に於て、一度見出たる同じ一の鍵をもて、何處をも開かんとするの傾向なきを得ざりき、景樹はまた反激の情強かりき、但景樹は天狗或は伴天連、切支丹、或は都あたりの歌狐など言はれて、その境遇もとより尋常にあらざりしも、さてこの境遇は、今すこしやわらいて思はぬにも交らば、却りて道も廣がり、友どちのらうかはしさもはぶかれ行きて、家の榮ともなりてんなど、人より諫められ、論といふ論世に反することのみと、木下幸文さへ始は驚きしほどなる景樹のみづから作り出せるものなるを思はざるべからず、いづれ千蔭等の鼠輩など、罵り、また足利弘訓よりその長歌を怠狀に取られしまて契冲真淵を訴りけんも、またこの激情の溢れたるなり、さて景樹はか

く激情強かりしがその歌論に於ても、その論時世に激せられて、反對の極端に、走りしと見ゆるも交じりぬ、

要するに景樹はその性情の根本より虚偽虚飾を嫌ひ、またひと向きにして、激情甚しかりしが、景樹はまた迷信の傾向ありき、例へば桃澤夢宅と攝津の伊丹に物して、狸の住み居ると聞きし或人の別業に宿りて、或夜狸の來りて、景樹が左の手を引きよぢりしといふ如きも、とより景樹も夢中の迷ひなりしとて記し、その果して幻視ありしや否は知り難きも、狸の住み居ると聞きし所に宿りて、夢中狸が來りしといふ事、またそをいとも真面目にその日記に書きつけ置きし事、思ひ合はすれば、景樹が性情の或一側面はこゝにも注目すべきものあらん、さてその幼児が病重かりしほどの事を記して、けふはいよゝ醫師の限り見はなちて、よるかたなきに、思ひせまりて、瀧澤氏に祈をこひ侍りける、さるにたちどころにその驗ありて、(中略)よべより顔の肉など立もどりて、常にかはらず成ぬ、あやしもとあやしう嬉しともうれしうなんなど見え、又その子みまかりては、はかなくなりて、後は、なにのくれのと、み佛ををがみ奉るこゝろ、出さぬるに思へば、(中略)けふしもまさにとその月にさへ當り給へ

ば、いよ／＼過世なくしやはと思ひたまへ侍るもなほかしこしなどあるに由れば、景樹が右の側面はやゝ明にて、更に景樹が土佐日記に貫之の鏡を投じて、海神の怒を和げしとあるに就き解説する所を見れば、景樹は明に鬼神の存在を信ぜしものなり、即ち景樹は貫之がこの時よめりし歌を海神受納ありて、忽ち風波のなきたる事は、世にいみじきわざなればと説き、また蟻通の神前に貫之ありとほしをば思ふべしやはの歌をよみ、馬忽ち進みしと貫之集にある事實を引き、抑かの蟻通の事は家の集にまさしくいひて、世に知らぬ人なくめてたふとひめり此日記なる住江の風波忽ちに和みし事は(中略)しかとも知る人なきは千歳の遺憾ならずやと歎息せり、さて景樹はかくてやゝ迷信の傾向ありて、鬼神の存在を信じぬ、されば景樹がその歌論に於て、歌の感應を説き、鬼神の上に及びし時は、全く比喻以上の意義ありしを思はざるべからず。

以上は景樹が歌論を説かんとするに當り、まづ一考し置くべき景樹が性情の重なる側面なり、請ふこれより景樹が歌論とは果して如何なるものなりやを定め、次にその歌論は古來の先哲が説きし所と果して如何なる相異ありて、また歌學史上果

して如何なる變動を與へしものなりや、更に言は、景樹が歌論は果してそのみづから信せし如く、凡そ千年に近き歌學上の誤りを見破りたるものなりやを考へ、最後にその景樹の歌論に就きわが結論を爲し試むべし

二

まづ景樹が歌論の消極的側面より分け入らんに、景樹は歌より技藝といふを斥けぬ、即ち歌を技藝とひとしなみに思ふはあまりにわいためなき事ならずやと云へり、さてその歌は技藝とひとしなみに思ふべからざる理由は、景樹のいふ所に由れば、技藝は何にまれ、聲をとめ、法を習ひ、或は跡を見、形をうつし、大かたは師の風俗てきよに似するをよしとするものなれど、歌は然らず、似せんとして似るべきものにあらずといふにあり、但し景樹が技藝に就きて學び得べしといふは、重に師の風といふに歸すれど、歌に就きて學びて得るの道ならずといふは、景樹もとより歌に師なしといふを主張するは勿論、景樹は歌に於て師の風を學ばんとすれば、たちまち似せ物となり……と云へり、歌は古歌をもて師とすといふをも斥けんとせしものなり、(古歌によらんとすれば、ふるき師たち……とも云へり)猶景樹のいひし所を分解すれ

は、

第一 技藝は學び得べきものなれど、歌は然らざる事

第二 技藝は他を摸するにより學び得べきも、歌は然らざる事

この二點に歸し得べし、即ち景樹は歌は技藝と同一に論ずべからずといひしも、それは只師傳の一點よりこれを見たるにて、技藝の他の側面には及ばざりしものなるを記憶せざるべからず

この技藝といふ事と殆ど連絡して景樹の排斥したるは歌は遊びものにあらずといふ事これなり、即ち歌は遊びものにあらず、玩ばるゝものなりといひ、歌の盛衰を歎じては歌が世の中の遊びものに等しくなりしより、この道いよく衰へたりといへり

景樹はまた歌よりことわりといふを斥けぬ、即ち歌はことばなるものにあらずといへり、さて其ことわりといふに就ては、景樹は理義、道、理筋、辭義、辭理、理窟、わけ、思慮などの字を用ひたれど、景樹のことわりといふは、これを二類に區別し得べし

第一 その證明が實質的なるべきもの

第二 その證明が形式的なるべきもの

第一の例は單に雪降る、若しくは鶯鳴くといふが如きものにして、その雪降るといひ、若しくは鶯鳴くといふはこれことわりたるものなれど、そのことわりの果して然りや否は、全く實物に顧る所なきを得ざるなり、但これらのことわりは實際に於ては、打開くがまゝ、誰も直にうなづかるべきなれど、また問題となることなきにあらず、景樹の歌にかの山の端にたなびきしづむ、白雲の云々とあるが如き、當時の評者の間に、たなびきしづむといふ事の果していはるべきや否が一の爭論となりしは、その適例ならん

第二の例はたとへば左の歌に於て

鶯鳴梅

内山真弓

梅の花あればぞ來なく鶯を

われを訪ひぬと思ひける哉

鶯が果して花にのみ來るや否は、直接に問ふを要せず、只鶯が花にのみ來りしものと假定する時は、われを訪はんとて來りしにあらずといふ事、形式的にうなづかる

るなり、さて景樹が理屈といひて斥けしは大方これらのことわりに屬すべし、かくて景樹のいひしことわりは、右の如く二類に區別し得べしとせんに、景樹の意は歌より悉くこれらのことわりを斥けんとするにあらず、殊に第一類のことわりに至りては、到底これを斥くるを得ざるべく、景樹が主として反對せんとしたるは第二類のものなり、然もこは全く歌より斥け得べきや、景樹は歌はことわるものにあらずといへど、ことわるものにあらずといふは、ことわるを以て歌の第一義とすべからずといふものにして、即ち景樹は明かにみづから辭理は第二また理は第二義などいへり

景樹はまた歌はうたふものにあらずといへり、こは歌はうたふものなりとの説あるに對していへるとなるが、もと歌はうたふものなりといふは、歴史的事實を根據としたる説なればこれを破せんには、まづ反對の歴史的事實を證明せざるべからず、然るに景樹が歌はうたふものにあらずといふは、まづうたふといふを譜節を附して歌ふの義に解し第一歌といふ名義の根源より推しても、と歌といふはうちうつとも通ひて、うつひろにひなしきの名なりといひ、また只に長息を本なるへきと

いひて譜節して歌ふは歌の名義の根源にあらずと斷じ、第二には歌の起り來れる本源より推して、歌は譜節を待ちて始めて歌といふべきにはあらずといへり、詞に關しては、景樹はまづ雅言俗言の別を排し、また天仁遠波を斥けぬ

景樹もと若うして鷹司家の青侍に住みける時、家令よりさる婦人へ送るべき目錄に筆執れと命ぜられては、いさゝと雅言に書きけるを、家令がは、うさゝと俗言に書き改めさせしとて、景樹は怒りて其家を去りしとも言ひ傳ふれど、景樹は到底雅言の味方にはあざりき、然のみならず後には景樹が痛罵は、一にこの雅言に向て注ぐに至りぬ、その理由とする所は、萬葉時代の詞は萬葉時代の俗言、古今時代の詞は古今時代の俗言にしてこれを雅言といふは後世の言語より區別せるの名のみ、もと雅言俗言の區別はあるべきにあらずといふなり、然れども景樹はまた一面に於て卑詞野調といふを斥けぬ、更にいはゞ雅言を斥けしは、當時の古學者流が好みて耳遠き古言を玩びしに反對せるものにて、其卑詞野調を斥けしは、自己の歌に平語を取り用ひしに就ての辯護とも見るべきものならん、さて景樹はかくて雅言を斥けたりれば、古來の歌には未だ聞慣れざりし詞を用ひるをも避けざりしと雖も、景樹が歌

論の根本主義は、こゝにまた新語といふを斥けざるを得ざりき、即ち詞は天地自然のものなれば、己より作り出でてよからんやと云へり

天仁遠波に關しては景樹は桂園一枝など天仁遠波すら合はずなど嘲られ五十一二歳の頃なほ、こせと働くべき用言を、こしと誤りしとて、古學者流の詭り草となりしが、景樹はこれに極端の反對を爲して、天仁遠波はいらぬものとまで言へり、こは内山眞弓の配せし如く、もとよりかれに當りたる激語なるべきが、さて景樹の説に由れば、もと天仁遠波には、これに違へど、こゝより更に變せざると、然らざるとありて、前者は例へは會もしくは古會といひかけて、流もしくは禮とむすぶの類にして、違ひたりとて事の意を誤つことなし、而もかの古學者流が専ら争ふはこれらの天仁遠波なれど、こは天仁遠波の瑣細なるものにて、後者は然らず、これに違へば、義忽ち亂る、例へば花に折る花を折るのに、をの如く、にと言へば紙などを花の形に折るやうのとに聞え、をといふとはその義雲泥の違ひありと云へり、こゝに注意すべきは、景樹の論、天仁遠波に於ては、こゝとわりといふこと甚だ重きを爲せり、即ち景樹が一を瑣細の天仁遠波とて古學者を罵り、一を大段の天仁遠波と殊更にいへる

は、専らこゝとわりを旨として云へるものなり、然らば瑣細の天仁遠波は歌に於て顧みるを要せざるべきか、景樹は歌よみの聞わづらひ歌よまずのうべなう天仁遠波とて、例へはかの霞みつゝゝ、と思ひしの歌に於けるゝ、及び數ふるばかりちる櫻かなの歌に於けるか、そ、ふるといふ語の變化を説明して、か、そ、ふるゝ、なと言はんを、は、かりと受けと受る時は、かぞふばかりゝるといふは、る文字しばらく隠るゝにて省かるゝにあらざれば、時ありて、かぞふるばかりゝるといふべき例少からずと論じぬ、然るにまたこれを他の一面より見て、かぞふとするも、かぞふるとするも、またゝゝとするも、ゝとするも、更にそのことわりは變ずることなかるべく、またゝゝとすゝとせの活の如きも、そのことわりを害せざる限りは、何れとも變化し得べきものとせば、謂ゆる瑣末の天仁遠波はもとより景樹の説に據れば、これに違ふともそのことわりは更に變せざるべきものなれば、これら天仁遠波のとのひといふもの、故格を顧るの必要果して何處にかあるこれらの天仁遠波は景樹の説に由れば、その根本より成立すべからざるものにはあなざるか、更にその大段の天仁遠波に就て云はんか、景樹はこの大段の天仁遠波はこれに違ふ

ときはことわり忽ち違ふものなりといへりしが景樹は既に歌はことわるものにあらずといひて、ことわりはこれを第二義に斥けたる以上は、この天仁遠波に於て類りにそのことわりの違ふと違はざるを説き、以てかの古學派に當らんとせしは當らざるに似たり、而も景樹の意を誤認すべからず、景樹は開らく、この大段の天仁遠波はこれに違へば義忽ち變ずといへども、而もこれ賢となく愚となく具足したるものにして、痲痺にも露違ふまじきものなり、更にいはゞこれらの天仁遠波は、人の性情の自然に備はりたるものなり、即ち景樹はこの性情の自然に備はりたりといふを根據として、自家の天仁遠波を立せんとしたるものなり、景樹のいはゞ、假字に法則あるは言語に法則あるが故なり、言語に法則あるは性情に法則あるが故なり、性情に法則あるは天地に法則あるが故なり、天地の法則を知らんとならば、已が性情を推すべしと言へるはこれ景樹が意のありし所ならん

以上は景樹が歌論の消極的側面なり、打見たる所景樹が當時の歌論に對し、反對せしことの重なるは右の外には出てざるべし、さて景樹が歌は技藝と混ぜべからずと説きしに就きてはこゝになほ注意すべきとあり、景樹は歌は技藝と混ぜべから

ずといひしにも係らず他の側面より、景樹はこの自説を破り居らすやと見ゆることこれなり、何ぞや

景樹は歌に於て知る、といふことを説きぬ、知るとは、一には歌の歌たる根本義を知るにて、二には古歌のさまを知るこれなり、歌の根本義に就きては、景樹はその最も得意なる古今集正義の總論に於て、歌はよく詠むことの難きにあらざり、知るとの難きなり、是を知る時はよく詠む事も難からじと云へり、また古歌を知るに關しては「古今集伊勢物語など見て考ふべし」「古今集など吟詠して知る人にして知るべきものか」「此境を知らんとならば古今集をよく見るべし」などありてまた「一たびさるさかひ考へ給はゞ即心即佛なるべし」なんでもなき事なり、只しると知らざるとにあるのみ古今集を見給へ聊か會得の道あるべしなど明に古歌を知るの必要を説けり、但景樹は歌は止まんとしてやむの道ならねば等くは、世の中の青人草露のがるべき道にあらずなど言ひて、天才といふは景樹が問題には上らざりき、これ景樹が歌論の根本主義より推せばもとより然るべき所にして、即ち景樹が歌の根本義を知り、また古歌のさまを知るの必要を説きし所を略言すれば、景樹が説は苟も既に

歌を知らば、何人もよくよむ事難からずといふなり、更に言はばよくよむ人のなきはよく知らざればなりといふに歸す、抑もまた景樹が畢生の精力を傾けて古今集を釋せんと志し、はその正義總論の論旨より推せば、それやがてこの必要に應ぜんとせしものと云はざるべからず、さればこの論點は景樹が歌論に於て最も没却せんことは難かるべきものなり、さて景樹はかくてよく歌を知る時は、歌の根本義及び古歌のさまを總ていふよくよむ事難からずと説きしものとせば、これやがて歌は學び得べしと主張すると同じきにはあらざるか

更に他の側面より景樹が歌論のこの矛盾と見ゆる點に近き見んか、歌ずきの稽古ずきと木下幸文が評せし景樹は、歌に於て頻りに修練を説きぬみずからも門人等か桂園一枝を公にせし時、いま十年ばかりの齡を得てよみ試みたらましかば、寛平延喜のふもかけに似たらんもまれくには出てこんをと悔歎せしと云へり、然らばその修練は果して如何にしてか、これを爲すべき熊谷直好が東塙塾の寄宿舎に終日詰め切りて出精せしも、木下幸文が國にその門弟を教へて後再び景樹が塾に入らんと思ひ立ちしも、その志し、所はもとより共にこの修歌の一事にあるべき

が、若し歌は學ぶべからざるものとせば、直好等がわざ／＼景樹に就きての粉々出精果して何事をや、景樹が幸文國に歸りてのち、歌風その意に滿たず、再び入塾してその誤を正したしとの世狀に接して、喜びしもの、若しこゝに景樹が歌論と云の實生活との間更に何等の衝突もなかりしとせば、これ景樹は歌は教へ得べしとするものにあらざるか、若し桃澤夢宅が幾十年邪路に踏み入りしも、また一朝景樹と相見るに由りて歌のさまかはりしと、景樹がみづからいひし所、その歌論と衝突する所なしとせば、これ最も明に歌は教へ得べしといへるにはあらざるか、景樹は歌は心頭の一顧にて即菩提に入りぬべしと云へりしが、夢宅が心頭の一顧は景樹に由りて得たりしものならん

こゝに再び景樹が歌は是をよく知る時はよくよむ事難からずと云論點に歸り見ん、景樹は古人の意を露も見つけ給はば、頓に歌さまかはり侍るべしと云へりしが、そのかはるは果して如何にしてかはるべきものなりや、景樹は既に言ひし如く、古歌を摸倣するを斥け、歌は歌書に由りてよまるものにあらずとさへ言へれば、今そのかはるも全くこの摸倣とは關係なき事とせんに、古歌は果していまよみ出づ

る上に如何なる關係を有し得べきものなりや
さて次にことわりを以て第二義とすとせばことわりは第三義として必ず歌に於て
く、歌はことわりを以て第二義とすとせばことわりは第三義として必ず歌に於て
備はるを要すべきかといふことは是なり、この點に關し景樹は阿といひ邪といふ聲
もまた歌なりといふを許したれば、景樹はまづ理のなき歌はあり得べしといひぬ
然らば理の違へる歌はと見るに景樹の説に由れば、これに二種あるべし、一は理は
違へるも歌の第一義とする所備はれるに由りてなほ聞き做さるゝ場合にして、景
樹はかゝる歌あるべきを許しぬ、二は景樹が常理にはづれたりといふものにして、
景樹はこれを至理と云へり、至理とは何ぞ

以上の二點を明にせんとせば、こゝに景樹が歌論の根本とする所に分け入らざる
を得ず、かの歌はうたふものにあらずといひ、また邪言を斥け、天仁遠波を争はんと
せしも、またもとよりその論の根底は別に深く根ざす所ありき、請ふこれより景樹
が歌論の二大中心なる事、こと及びしらべの何たるやを窺ひ見ん

三

こゝに一事のたしかめ置くべきあり、それは景樹がみづからその歌論を見る甚重か
りしこと、是なり、すなはち其病の床に打臥して命のきはも計り難しと思ふや、彼は
その最も望を屬せし門人にて當時防州にありし熊谷直好に、申置き度事ありとて、
夫のみ心懸りしたりしが、存外死を遁れて、後また病重きや、彼は眞淵の新學びに
就き、その妄を辯じ、或は平生常に門人等が詠草の添削忙はしき中にも、萬葉古今の
抄を物して、その歌論のある所を明にせんとし、若くはその晩年、殘齡のいくばくも
なきを察して、その自説を示すに甚急なりしこと、是なり、すなはち景樹みづからそ
の歌論を説明して、こゝは、景樹がつくりて申には、侍らず、紀氏の、おもはくにてなど云
ひ、また實にこれを以て、凡そ千年に近き、或は七百年來の誤を拂ひ得たりと信ぜし
こと、是なり、すなはち人廢なくなりたれど、歌の道はこゝに留りて、貫之出て、貫之
なくなりにし後は、世々の歌人いよゝ森の木、の葉の如くに多かれと、そが中には
その向ふべき所を氣づきしものなきにはあらねど、一杯の水もとより一車薪の火を
救はず、景樹獨り能くその根本より歌の歌たる大道をたどり得たりと考へしこと
是なり、すなはち景樹はそのみづから大道を指さし脱けば、世は却りて天狗或は伴

天連など争ひ競ると思ひしこと是非なり、されば景樹はまたみづからその歌論を稱してわが一家言なりと云ひぬ、但直好の記する所に據れば景樹の歌論はいたゞ眞淵を斥けしにも係らず、その頃眞淵の古學を倡へし趣と同じ心に思へる人も多かりしと云へど、之は直好その極めて然らざる由を辨じぬ、また見山紀成がその遠山彦に記する所に據れば、紀成は十年あまり伴蒿齋有賀長收等の門に出入せしが、其教みな枝葉なるを歎じて、偶々小澤蘆庵が歌に服する所あり、歌はかゝる物にこそありがたき人なりと思ひて、其門に入らんとせしが、果さず、その後景樹の教へ子となれりしが、紀成は蘆庵の門に入らざりしを感謝して、いかなる神のめぐみなりけむとまで云ひ、景樹が歌論を評しては、千載不傳の說と爲しぬ、抑もまたその景樹が歌論と他の説きし所とは、景樹のいふ所に據れば、單に枝葉の相異にあらずして、全くその根本よりの相異なりき、内山直弓の云はく、しらべといふは師の一家言なりと、師の一家言なる由は、景樹もまた屢々これを門人等が歌草に書きつけぬ、これはもとより景樹が歌論の根本的主張に屬す、されど景樹はその謂ゆる調の本源は、これをまことといふに基けぬ、

れば景樹がみづから見ることに甚重かりしその歌論を根本的より抜き見んには、まづ景樹がいへりしまこと、この果して如何なるものなりしかを定めざるべからず、但こゝにまた一事の願るべきあり、直好の記する所に據れば、直好が始めて景樹の門にその名簿を送りしは、景樹三十一歳の時にして、その京都に出て、口づからの教を受けしは、それより三歳の後なりしが、初のほどは景樹も別に異なる考とは少く、かの古學者の說も、半はこれを信じて、直好等に示し、その全く一家の見解を出すに至りしは、景樹四十より五十のほどなりしと云へり、然らば景樹が歌論は、果して如何なる思索的變遷を有するものなりや、若し直好が言を以て、景樹四十以前の説は古學者の唱へし所と大差なしと解し得べくば、まこととよびしらべの論は全く景樹四十歳以後に思ひ定めしものなりや、これ一考し置かざるべからず、然るに景樹が歌日記享和元年十月二日の條を見れば、景樹のもとに惠信尼といふが訪ひ来て、その尼なる人の嘗てめし使ひし下女の、いふはもしかとは得か、山里にさへ嫁ぎしが、惠信尼の娘むなしくなれしを嘆きて、四方山のはなしをせんとおもひしに、位牌にむかふことぞかなしきと尋ね來しほどの心ばえを、其後よみね

こしける由語るをきいて、景樹は、げにも歌は真心をもとにしてこそは鬼神もあはれとあもふへけれ、ひとへに言葉の上にはあらざりけりと記しぬ、又享和二年五月の條を見れば、田中爲義といふ人の來て真心をそのまゝ打出てんもさすがにて、など言ひしを聞きて、目のまへをよみて示し、といふ歌二首を記しぬ、わが宿の萩の穂末に夕日さしかなしき時をとはれける哉、此夜明けて明日こんといふ君なれど別れがたきは夕なりけり、これらに據れば、景樹は此頃既に歌のまことといふに就ては、盛にこれを主張せし跡見ゆ、但享和元年には景樹三十四歳にして、直好景樹が塾に入りしは此年なるべし

更に木下幸文が小野泉藏といふ人に贈りしといふ書狀に由れば、幸文が景樹に就ての評に、調といふ事を専らやかましく云出て、たるは實に、此人の高才とあり、然してこの書狀を載せられし井上通泰氏の桂園遺聞第二篇に據れば、こは幸文が享和二年、即ち景樹卅五歳の時の消息なり、然れば景樹はこの頃また既に調に就ても、専らやかましく唱ふる所ありしと云はざるべからず

かくて若し調といひ、賦といふも、景樹既に三十四五歳の頃これを主張し居たりし

とせば、直好がこの頃景樹は古學者の説を半ば信じてたりしといふは果して何の據ぞ、この賦といひ調といふも、また既に彼古學が歌論の精粕に過ぎざりしか

景樹はその三十四歳の時、本居宜長の京都に來りて、或日東山の圓山寺に遊べりしを尋ね行き、著し給へる御書どもは、早う見奉てみかげを蒙ること、少からず、いとめでたくなむなど語りぬ、而も賦に關する歌論は上記の如く、此頃景樹の既に説きし所にして、調の事もまた既に倡へしものとせよ、更に景樹三十七歳の時、みづから桃澤夢宅に洩し、所に由れば、去夏、巴來、此道に付餘程存寄も改り候筋も御座候とあるより推せば、その三十四五歳の頃既に倡へし、まことよび調の説は、景樹もみづから其不満足の點多きを認めしか、但その存寄の改りしとは果して如何に改まりじものなりやまことよびしらべの説は、果して變遷といふほどの變遷を有し得べきの餘地ありや

享和三年は、景樹に取りては殊に感慨多かるべき年なりき、その年の春正月、伴蒿蹊が千蔭春海等の散々に景樹が歌を罵り、彼筆のさがに奥書して、世に言ひ騒ぎしを思へば、景樹に對する世上の激昂がこの頃殆どその絶頂に達せしを察すべく、賦

る者あればまたほむる人あり、幸文の如きいよ／＼景樹に服する所ありて、此年の冬より晝夜出會するに至りしが、景樹はまたこの毀譽紛々の間に立ちつゝ、從六位下長門介に任ぜられぬ然るにまたこの年六月ともて生れたる男茂松は、庭の小萩も盛り過ぎて、晴雨やいさひき九月ばかりにみまかりて、景樹は晝夜ひせび悲み、泣きし安達の眞弓再び世には引き難しとまで歎じぬ、況やその兒弱くして六月に生れてより死するまで母は一日も寝ず抱きつめしと云へば、子煩悩なりきと見ゆる景樹が悶々も察すべきに、而もその夏已來景樹が此道に於ける存寄は大に改りしとせよ、まこといふに就ては景樹いよ／＼思ひ當りしふしもありしなるべく、千蔭春海等の反對甚しきに於ては、古學派の説といふに對しても、激昂の情一層を加へしものありしなるべし、
但前に擧げたる幸文の景樹に對する評語に由れば、景樹がその謂ゆる存寄未だ改らざりし以前に於て既にしらべを説き、これ古學派一方の魁たる小澤蘆庵等と景樹が歌論の區別され得べき所の如くなれど、是れやがてまた以て眞淵が論とも區別し得べきものなりしか、幸文の言を爲し、時僅に廿四歳なりしを思へば、嗣と

いふ事專にやかましく言ひ出でたるは實に此人の高才とあるも、これ幸文が廣く古今を見渡しての評とも限らざるべきか、はたその調と誠との關係は景樹如何にこれを説き居たりしや、要するにその存寄が改りしといふも、果して如何に改りしか、其詳細なる點に至りてはわれは未だ十分これを考定し得べき材料を見ること能はずされど、また推し得べき點なきにあらず、即ち一面にはまことに就ての論がいよ／＼切實のものとなり、見天せし年の十二月、景樹が夢宅に贈りし消息の中に、殊更愁傷後は彌虛譽の聲もいとましくとあるを思へ、一面には古學派の歌論に就てまことならずと見ゆる點がいよ／＼不自然のものとなり、景樹が古學派と分離の端全く開けしにはあらざるかと見ゆること是なり、
古學派の不自然なる所とは何ぞ、景樹は袴のそば高く取りて、佐々木眞足の言借用いかにもして古學派の圖を走り出でん／＼とせば、まづ古學派本營のある所に向て、大音聲を揚げざるを得ざりき、千蔭などは先輩なりしと雖も、殆ど同時代なれば、景樹これを侮るの心も一層なりしなるべく、其歌は思ふさま罵られしも、たゞ鼠輩と一喝したるのみにて、これに對し幾度か取らんとせし筆は遂にこれを抑へぬ、然

して景樹は直ちに眞淵が墨を目がけて進みぬさてその眞淵が歌論の中景樹がその性質上の好尚と相容れざりしならんと思はるゝは即ち景樹より不自然と見えしは眞淵が力を極めて古今集の男々しからぬを排する所にあるべし少時より喜みて古今集を讀み耽りまた眞之躬恒集など深く沈潜せる景樹には如何にするも此點に關する眞淵の説には暗かれしと思はれずされどこは景樹初より然りし所なるべければその存寄りが改まりしといふもこゝにあらざして、そは寧ろ眞淵が獨り萬葉の摸倣を説きし所にあるべきか更に言はゞこの摸倣といふに就き景樹のまこと及びいらべの論がこれを全く顧し得べしと見ゆる方に向て其論據やや定りしと思はれしにはあらざるか抑も景樹四十四歳の時鴨川の一月樓にて病を勉めて脱稿したる新學異見はかの三十六歳の夏已來改りし存寄りがいよく發達して、全くその形を成して顯れたる第一の著述とも見らるべきが、鬼に角人に見すべき景樹が歌論のその一篇の主旨はたゞこの摸倣を排するに外ならず、景樹が命危からんとして、廻ひて筆を走らし世に遺さんとしたるも、たゞこれなりしと思はゞ、その存寄りが改まりしといふも、また是なりしと思はざるべからず、然らず

んばわれは景樹が論歌に於てその存寄りが改まりしといふ餘地何所にありやを疑ふ

今や、翻りて再びこゝに景樹が三十六歳の夏以前に於ける歌論の何者なりしかを定め置かんに、景樹はみづから愚老など生若き時専ら古文をたどびて、萬葉ぶりよみ、侍りしに、と云へりき、こゝに生若き時とは何歳頃までのことなりしか、明ならざれど、鬼に角この言に據れば、景樹にもまた古學派信仰の時代ありしは明なりとせよ、中川自休の言に據れば、景樹は桂園一枝中に半句萬葉の古歌のまゝなるが三四首入り居りしを後にて悔い居りしとあれど、三四首にもせよ、また半句にもせよ、古歌のまゝなるが、ありしは以て萬葉の感化が如何に景樹のために大なりしかを察すべく、無意識なりしと否とは問ふべき所にあらざ、景樹はまた三十五歳の頃萬葉會など催し居たりしとせよ、われは直好が四十歳より五十歳までの間に於て景樹が歌論は確定せしとの言を信じ、また景樹がみづから三十六歳の夏已來その存寄りが改まりしとあるを信ず、然して直好のいふ所に依れば、景樹新學異見を草せし頃、なほ景樹が歌論と眞淵のとは同一に見えず人もありしとあるを併せ思へば、少

くとも景樹三十六歳以前の歌論には、たとへ幸文の言に依り、景樹既にやかましく
調を脱さしとするも、別に異なるふしもあらざりしものと考へざるを得ず(八田知
のさかやを評して景樹は彼の古學の弊あることありけんと思ひて、
は解すべからず。人さ
に於ても、既にその性情の傾向より、古歌に對する特別の眼識ありしを思はざるべ
からず、而もその歌論の根本地は、少くとも三十六歳の夏以前に於ては別に見るべ
きほどのものあらざりしとせば、こゝに最も見失ふべからざる一事あり、景樹はこ
の以前に於て既に大に詆られしが、その切支丹など云はれしも、全くその歌論の世
と異なるが爲めにはあらざりしこと是なり

要するに景樹が歌論は三十六歳の夏より、景樹より見て大に改まる所ありて、新學
異見となり、新學異見に於ては、歌はしらぶるものなりとの説未だ明には見せざれ
ど、また真淵の歌論に對しては、景樹この論を唱ふるの必要何所にありや、新學異見
以後の歌論は、別に區別すべきの要なきものとして、以下總じてこれを辨せん

四

こゝにいよ／＼景樹が歌論の根本地に近き見む

景樹はその論の向頭を定めてこれをまこと、爲しぬまこと、は何ぞまづ問ふべ
きは是なり、景樹はこれを説明するに就き誠、誠實、誠情、誠心、一偏の真心、此心、思ふま
ゝ、實情實意的情など云ひ、一見すればその義極めて明なる如くなれど、なほ景樹が
歌論全體の説明より見れば甚だ明なるざる如き所なきにあらずまこと、は何ぞと
問ひ來りて、こゝにまたまづ定むべきは、そのまことの限域如何といふことなり
景樹は同じくは書物をも見ず、實物實景に向ふといふことを説き、また天地の心、天
地の誠、天地の威など云ひしが、かゝれば景樹が謂ゆるまこと、とは單に主觀的の主張
にあらずして、また客觀的側面をも有するものなりや、景樹が歌はこの性情を述べ
るのみと云へるより推せば、この間極めて愚なる如きも、なほこは景樹が謂ゆるま
ことの限域如何を定むべき一疑問たるを失はず、但この點に就てはわれは然らず
と斷じ置かんとす

真淵は何とも言はて有のまゝに述ぶるに、其時その地その情のづから備はると
古の妙なるものなりと言ひしが、真淵が歌論は後に委しくいふべし、景樹はむしろ

有のまゝ、即ち客觀的まゝ、ことを排して、歌は有が儘をいふものに、あらず、思ふまゝ、をいふべしと云へりき、景樹常に月花をみて月花の上のみをいふ輩は共に語り難しと言ひしといふも、また同じ心ならむ例へば垣根の梅に鶯の來啼くを聞き、その鶯のなくを見聞き有のまゝを打出るが歌にあらずして、その實景に就きわが心に思ひ浮ぶ所の感を、偽飾なくよみ出づべしといふが、景樹の歌論の形式的説明なり。故に天地の誠實若くは天地の心といふも、景樹の歌論に於ては、別に重要なるまた獨立なる客觀的意義を有するにあらずして、彼の山は峙ち、水は流るゝ如く、人の性情の自然に嘆聲を發する所を指して、景樹はこれを一の天地の誠實若くは一の天地の心と名けしに過ず、歌は天地の感を達するものなりとあるも、またこの性情が物に感じ時に感じて、その聲に發する所、鳥蟲のよのづから啼くに同じと見しより、また此聲に接しては天地動き、鬼神感ずとの妄想よりたゞ廣く打まかせて言へるにて、その指す所はなほ一の心にありきと謂はざるべからず、要するに景樹が歌論に於ては、性情は主として心外萬物は實なり、心は歌の唯一の境界にして、客觀的天地の真相といふ如きは、兎に角景樹が主眼とせし所にあらず。

然らば景樹は何故實物實景を説きしか、景樹は古今集の序に心に思ふことを見るもの聞く物につけていひ出せるとある、その見るもの聞く物につけてといふを以て、その歌論の條件と爲し、にて歌は性情を以て唯一の境界と爲すと雖も、心外萬物に接せざればまことの感は發せず、されば書を捨て、名利人我の相を離れて、實物實景に對せよといふにて、或は、俗中に處してこそ、歌は、あなれとも云へり、而も見聞き有がまゝを述ぶるが歌にあらずとは、上記の如く景樹の主張せし所に於て、景樹の説に據れば、歌は實物實景に對すべしと雖も、これ有がまゝを述べんが爲めにあらず、思ふがまゝを打出てんが爲めに於て、その歌として打出てし所が、果して有のまゝなるや否は、兎に角主眼にあらざるなり、たゞ有がまゝと思ふまゝとは能く相容れ得べきのみ。

かくて景樹が謂ゆるまことに關する歌論は、その主眼としては客觀的側面を有せずとせん、即ちまことは全く主觀的主張にして、たゞ性情のまことなりとせんにまことの限域はなほ未だ定らず、性情のまことは能く悉く歌の境界たり得べきか、これ次に來るべき疑問なり。

これに就き記憶すべきは、謂ゆるまこととは情の實質上の區別にあらざることはなり、故に如何なる情もみなまことなることを得べきか、凡そ情はこの條件をさへ満たすことを得たらんには、悉く歌と云ふたひ出づることを得べきか、此點に關しても景樹の説明は甚だ分明にして、この疑問を容さざる如くなるも、景樹は古今集に鶯かはづの聲もみな歌なりといふを説明して、このかはづといふは、山河の水底にほがらかなる聲する河鹿のことにして、今田園にすだかかへるの聲、何の聞べきよしあらんやと云へり、われは謂らく、田園にすだかかへるの聲なりと雖も、これまた實に時に感じ物に應じて發するものなるに於ては、景樹がまことの論より何ぞは彼と此とを區別せん、而も景樹これを區別すべきの要ありしとせば、われまたこゝに重ねて問ふべきの要ありまこととは、景樹果して凡て歌の境界爲り得べしとせしか、誠實といひ得べき情の中に於て、その最ともまことなり得べきは、かの性慾に關するものなるべきが、景樹は淫慾に就き説明して云はく、歌は、只實情を述ぶるのみ、淫慾もとより實情の外ならんや、實の實なるものか、と言何ぞ明白なる、この數語のみ讀む時は、われはその間に何の疑義をも挟むことを得ず、されど景樹はなほこれを

説明して、古の郡縣の世は、今の夫婦と云へば、晝夜さし向ひ居る時代とは異り、世の中大方旅住居の有様なりしが、上その風俗聲住として、夫婦となりても、只女の家に通ひて婚を爲し、が故、夫婦の間常に戀の情絶ゆることなく、夜に入て曉に分るゝなど、常の事なりければ、さる中には、おのづから世に思ひ、親に隱るゝふしも、交るゝへ、或は待ち、或は恨み、くさくさの思いかて、なからむといふを見れば、これ單に戀情の性慾的なる側面の説明にあらすして、むしろこれと伴へる他の側面の主張なり、景樹もまたみづから論結して、夜行き曉に別るゝ歌を、みな邪淫と思ひ取れるは、誤なりと言ひしに據れば、景樹も邪淫を以て戀歌の境地とはせざりしにあらすや、但景樹は右の論中、忽ちまた説を爲して、又たはれ亂れたるも、なかはなからむ、古はさるをも、羨み得ず、歌とよめるが故、あらはなりと云へど、そのたはれ亂れたるも、また唯單に邪淫若くは淫慾を以て論ずべきか、以上淫慾に關するは、景樹が木曾福島秋元公英が尋問に答へしといふ文に據る。

請ふ更に、景樹が忍ぶ戀に關する説を聞かむ、景樹の云はく、戀は情のまゝにあれば、或は君上、或は兄弟、いかなる人をか思はざらん、さるは必ず其ふりを其人にも知ら

すべからぬは、命の限忍びはてんこそあはれなれ、實情を推して思ふべし、かゝる戀の歌など苦しき限をいひ出るなり」と、われは問はん、その苦しき限に於てまたそのあわれなる所がこれやがて、歌となり得べき境界にはあらざるか、景樹の意戀情の最も能く歌たり得べきはその情の切なること、更に風月の感のよぶべき所ならねばといふにあるは明なれど、景樹はまた歌の道に於ける理外の幽妙は、仁義の上、に立つと云へり、抑も男女徒に醜骸を抱かんとする單純の淫慾は、なほ理外の幽妙たることを得てまた以て能く仁義の上に立つといひ得へきか、理外幽妙の辨は、景樹が歌に於て鬼神感動の境すなはち景樹が歌論の最も重きを爲す論點と接觸する所なりとせば、景樹が淫慾論は全くその矛盾の所なりや、或は景樹の意能く相矛盾せずしてまこと、この論なほ廣くこれを貫き得へしとせしか

昔は或付都あり常に爲家卿のもとに來りて、歌のこと問ひけるが、爲家卿の云はく、歌は誠をささとし、道理に合ふやうよむべしと、付都心得て其後また尋ね行きし折、一首の歌を出し、先日承りしに就きよみ待りぬ、歌はかやうに候へきかと重ねて問ひしに、その歌

ふじの山同じ姿にみゆるかな

あなたももてもこなたももても

とあるを、爲家卿打見て、道理をささとすべしとて、かやうのことにはあるまじとて笑はれしと云へど、誠を先とし、道理に合ふやうにすべしとの歌論よりせば、右の歌非難はあるまじきに、爲家卿はなほ然りと思はれざりき、景樹がまこと、この論またかかる解釋を要するにはあらざるか、曰くこは別に説あり

五

景樹がその門人高橋正澄が詠草の奥にかきつけしといふを見れば、まのあたり、一喝申入れ侍らば、氷の如く打とけ侍るべしと覺え侍りの語あり、又丸山彌が詠草の奥に俳諧を論じては、芭蕉にても蕪村にても、一棒くはせ侍らばと惜むことに侍りといひぬ、これらの語、景樹たゞ打思ふまゝを、何心なく書き捨てしなるべきが、一喝申入れ侍らばと云ひ、一棒くはせ侍らばと云へる、讀みもて行けば、景樹の面目殊に躍如たる心地す、われは謂らく、こは景樹が眞骨頭のある所にして、凡そ景樹が歌論は一棒一喝を以て滿ちぬ、さてその喝棒は景樹如何にこれを下し、かと思れば苟

も歌論の病所と認めし所に向ては、景樹はまづ滿幅の盛氣殆ど風雨を捲くの勢を以て、一喝雷の如く、一棒下し去りて、然る後更に其真意を明にするが例なりと(深然もとより實情の外ならんや、實の實なるものかといへる如き、これまた一喝紙に聲あるが如きを思へ)すなはち歌はことわるものにあらずといふは、その喝棒のある所にして、歌はしらぶるものなりといふは、その歌論の第一義なりかゝる喝棒の主張は、景樹がその晩年まで愛讀して倦まざりしといふ論語に、孔子がその門弟に對し、好みてその對症の藥石を投せしといふより必ずしも脱化せしにあらざるべく、又こはたゞ門人が一時の質問に對してのみにはあらざりき、若し文法といふ語、景樹が紀氏一家の文法といひしが如き意義に用ふることを得ば、その喝棒の立言は實に是れ景樹が性情に基きたる香川氏一家の文法なりしと謂はざるべからず、かくて景樹が歌論には、一喝の若くは一棒の主張、姑くかく云はん)と根本的主張との連続殊に著しきを見れど、景樹が文法の特質は、またその前者に於て喝破せし所後者に於て忽ち或はこれを覆すが如き所にあり、今その一例を取らば、景樹は信濃の人岡田忠保が、内山直弓より景樹の歌論を聞き思ひ惑ひしふしありとて、更に景

樹に質す所ありしに答へて、真弓が真心は道理をはづれたるものなりと言へるよし、實にさる事に侍りとあるは、これ明に一喝申入れたるにて、景樹は更にこれを説明して、真心は多分道理にはづるゝ者なりといひ、忽ち又一轉語を下して、それやがて真理の又真理なる者なりと云へりき、古今正義總論に、景樹が同じ歌論を説き、大和歌は素より性情を述ぶるの外なく、思慮に涉るべき物ならねば……云ふべき義もなく、聞くべき理ある事なけん、然も義理なき者は、實に義理なきに非ず……義理を棄て天地何物かあらん、義理を離れて天地何か感ぜんとあるは、其文勢や、隠なれど、なほ同じ文法なるべし、更に一例を擧ぐれば、西卿元命が詠草に、猶ほ少しにても訝しき節々は、打返し々々又のつてに問こし玉ふべし、互の稽古に侍るなり、歌に師弟と申す事、近世までさらになき事に侍りきとあることには、歌に師弟なしといふ喝棒的主張後に出て居れば、この喝棒的主張は互の稽古に侍りとあると能く相矛盾せざるを得べきか、この殆ど相矛盾せるが如き思想を連接せしめたる、これ景樹が文法の最も得意なる所とも見るべし。

但右の例は、相連絡せる同一の文中より取りぬ、今これを全く別箇の文中に求むれば

ば、喝棒的主張と根本主張とは明に矛盾し居りて、殊に喝棒的主張と喝棒的主張との間には、その最も甚しきものあるを見る例へば、白木重樹が詠草に、右の所を聞取り、成程と思ひ給へば、今日より人丸貫之なりとあるは、喝棒的主張なるべきが、こは高橋正澄が詠草に、こればかりの事は幸文もうまく意得て侍り、語るに此外なければなり、されど幸文もあのれも得て歌によむ事はもとよりならぬ事に侍りとある根本主張と、文字上にては兎に角相容るべしとも見え、又例へば景樹は一面には平語を置て歌はいづくにありやとまで喝破しながら、一面には調は平語にあらずといひ、若くは歌は平語に違ひて、うるはしく上品に調へ上ぐるを第一とすと喝破せし如き、誰が目にも一見して、文字上はその相矛盾せること明なるべし、されば中川自休が、その大幣の始に、景樹が桂園一枝の出板に就ての感懐を明にし、今十年ばかりの齡を得てよみ試みたらましかば、寛平延喜の、おもかげに似たらんものも、まれくには出こんをと景樹が悔歎せしよと見ゆるは平生いたく眞淵等が摸倣説を斥け、歌は古人のさまにて仕立るものと覺ねたる、古學者流のいひさうな事なりなど折にふれては冷笑したる景樹の持論より推せば、寛永延喜の、おもかげに似た

らんなどは、景樹忘れても口に出すまじき如くなれど、景樹が例の文法に徴せば、これなほ景樹が言と見るを妨げず

かくて景樹が歌論には、喝棒的分子多く、たゞ一わたり打見ては、矛盾せる如き所も鮮からず、或はいふべし、景樹が歌論が、殆ど矛盾を以て、満つとされど、其中に彼此相扶けて、景樹が眞意を知り得べく、即ちその矛盾のたゞ表面上のみなるあり、されどその矛盾は、或は全く盲目的なりと見ゆるもあり、彼の獨逸のハイマはその抒情の歌集の再版を公にせしに當り、凡そ當時の歌人が何事もこれを歌によみ出で、歌集の序には必ず別に歌を付してその次第を述ぶるが例なりしを嘲りて、眞理は、韵律的、衣裝にて世に出るを恐るとて、散文をもてその感懐を序せしが、景樹は歌より理を排せしこと、殆どその極端なりしと見ゆるにも係らず、貫之が古今集奏進の時、四季賀、物名、戀離別、羈旅、哀傷雜、雜體、大歌所といふ目錄の次序をよみ分けて奉りし長歌を、あやしともせざりしのみならず、古今なる貫之の長歌を一向に解せずして、本居など、宜長なりと之をさんくに罵り、玉勝間に書出候事、不届の事に御座候とさへ云へり、景樹はもとより長歌は人丸にて止れりといひ、又長歌の感淺さをさへ説き

しに、實之が目録の長歌は、彼の萬葉集はいづれの世に成りしものぞと問はせ給ひければ、よみて奉りけるなどの歌の類にて、これ重に一時の用辨に供したるに外ならねば、景樹もし理といふとが歌をあらぬさまに陥れ、又陥れんとせしを惡まば、實之が長歌假りにも讃むべきものならんや、これ或は極端の一例なるべきも、これなほ明に景樹が歌論の盲目的矛盾の一例ならん、抑も景樹が斯る盲目的矛盾は何所よりか來れる

僧契沖は古今集の序を註するに當り、鶯蛙のよみし歌現に萬葉集中にありとの俗説を辨じぬ、僅に數言なりと雖も、契沖にはなほ之を辨ずるの必要ありき、景樹が歌論を唱へし時代もまた契沖の時代と比して餘り學術の程度進めりとも見え、且景樹が歌論はもとより嚴密に論理系統を尋ねて組織せしにあらすして、殊に門人が詠草の奥書^{おくがら}の如きは、飛脚の立つといふに大急筆を命じ、若くは病中眼さへおぼろけにして、なぐり書きにかいつけたるもありと見ゆれば、若しこの片言隻語を取りてこれを比較せんには、もとより矛盾も多かるべきなれど、われは既にその矛盾が景樹の特質に歸すべき所あるを許しぬ、即ち景樹が歌論の矛盾若くは矛盾らし

き所の多きは、喝棒的分子より來りしと見ゆれど、その喝棒的分子は又實に外的原因の加はるありて、その歌論の盲目なる部分を成しぬ、外的原因とは何ぞ、當時の歌論及び歌風これなり

六

景樹の歌論に謂ゆるまこととは、單純なる性慾の如きをも引きくるめて謂へるものなりや否に就ては、われ既に上に疑問を掲げぬ、請ふ再びその論地に還り見ん、喝棒的骨頭を具へたる景樹は、當時の歌論及び歌風に對し、委しくは後に論すべし如何にするも其歌論はまことの一邊に立脚せざるを得ざるの必要ありき、一箇の誇大漢子が徒にその巨口を空に開きたる如くに見えし、當時の歌論及び歌風は、何事にもその極端まで押し窮めずしては止むこと能はざりし、景樹をして、またそのまことの論をも極端にせしめざるを得ざりき、すなはちまことの論は、一面には全く景樹が歌論の根本地に屬すと雖も、一面にはまは實に喝棒的主張に屬しぬ、而して喝棒的なるが故に、また激情的なりき、激情的なりしと雖も、景樹が歌論は當時の歌論及び歌風に對して熟思したるものなりき、されど虚飾といふ醜獸を屠らんと

して、眞一文字に駆出たる景樹は、遂に山を見ざりき激情的にしてまた歌人なる景樹は、遂にその論の前後を顧ること能はざりきすなはち景樹はその屠らんとせし醜獸の爲め、却て盲目となれりしものなり

われはこゝに断論せん、景樹が根本的論地にして、また喝棒的主張なるまこと論は實にまた盲目的なりきすなはち景樹が謂るまことの論は一面には仁義以上に立ち得べき^歌春の本體に觸れ得たれど、一面には能く單純なる淫慾を容るゝの餘地を有しぬ、その間に存すべき矛盾は景樹の考ふることを得ざる所なりき、何ぞやその一因は上記せし所なれど、なほ論理上なる他の一因を求むれば、歌が仁義以上に立ち得べきも、それやがてまことよみ發すと見ゆるのみならず、まことのみならず、るもの北あるずば、何のかざりもなきやうなる言の葉の千歳のもとにまで打匂ふべきにあらずと、景樹は信ぜしことは是なり、然らばそのまこと、は何ぞ重ねて問ふべきの時は來りぬ

されど、既に上述する所より、景樹が謂ゆるまことは、全く主觀的主張にして、煙霧の如きもまた之に入ら得べきものとせば、まことの何たるは既に半ば解釋せられしものならんすなはち實情といひ誠情といふ讀みて字の如くなるを妨げず、死して悲しみ、友到りて喜ぶ、これ景樹が謂ゆるまことなりき、冬に當りて寒しといひ夏は泉流るゝ、松の下かけを思ふ、これ景樹の謂ゆるまことなりき、夕ぐれの空に消えゆく雲の姿、もし萱の花の如くに見えなばその思ふ初一念をよみ出て、萱の雲はさきにける哉といふ、これ景樹がまことなりとて教へし所なりき、されど一層深くまた嚴密にまことの義を窮めんとする時は、景樹が歌は我思ふ事をよむなり、若くは歌はこの思を述ぶるの外なしとの言は未だまことの義を盡したるものといふべからず、我思ふ事若くはこの思と稱するもの、景樹が論據より推せば、或は單に感情と稱することを得べく、或ひは感情の感覺と伴なへるものたることを得べく、若くは單に性慾を以て稱すべき場合あるべきも、今その煩しきを避けて單に情の一字を以て之と換へんにまこと、は情自體の名なりや、若くは情の軀様の形式に關すべきものなりや、これを確定する時は、景樹が歌論の根本地に於て、一のまもしるべき結果を生ずべし、われは思へらく、景樹がまことは情のいづれの種類にも關係し得べきものなれば、若し之を情自體の名とせば、情の總稱ならざるべからず、即ち

こゝに歌は性情を述ぶるものなりと云はゞ情の總稱といふ語や、價值を有すべきがまこととは果して情の總稱若くは性情と同一義なりや、景樹は性情の區別には少しも重きを置かず、歌をよむといふを答かめては歌をよむとは唯思ふ事といふと云ふ義なりなど、頻に人に説き、そのいふと云ふに極めて重きを置き、景樹がまこととに關する根本的主張は、全くこゝに存しき、彼の貫之れが古今序に於ける鶯蛙の論を解して、此の道の準繩なりとせし、大旨もこゝにあるべし、即ち景樹が謂はゆるまこととはもとより情自體の名にあらずして、その發動に關しての稱なるべく、今これを歌は性情を述ぶるものなりとの語中に求むれば、まことはその性情といふに存せずして、却てこれを述ぶることの如何に關すべきなり、更に云はゞまこととは思慮景樹の用語に據るを加へざる情の力學的側面に就て形式的に下したるの稱なり

景樹がまことに關する用語中には、既にも引用せし如く、誠情若くは實情の字あれど、嚴密にその意義を尋ぬる時は、まことは右の如く情の發動の形式に就て下したる名なりとせば、恰も風車の東を指し、若くは西に向ふが如く、まことに於てはたゞ

その風車のいづれに動くやと問ふべし、その動ける風車が如何なる有様を爲すかは問ふべからず、これを問ふは既にその所論の根本地を捨て、歩を他の全く別箇の見地に移したるものと謂はざるべからず、而も景樹はこれを問ひぬ、
わが解する所に由れば、情の發動がまことといふ一の條件を満たし、時に情は特別なる或一種の状態を發現することを得べし、その状態の何物なるかを説くは、これまた實に景樹が歌論の得意とする所なりき、すなはち景樹はこの状態が人情の未だ道とすべからざる極めて幽玄の境にして、鬼神の感と共にすべきものなるを主張し、或は飾れる如く巧めるが如き佳境とも稱しぬ、されどこの状態をば單にまことなる語の意義中に入れ、誠ばかり天の下に奪き物なく、うるはしき物なればと云ひ、若くは天地のなかに斯誠より真精しき物なく、斯誠より純美しき物なればと云ふに至りては、これ景樹が歌論の大混雜にあらずや、こは正直などいふ流俗の用語例に誤られしなるべきも、右の場合に於ける情の真精しきまた純美しき状態は、情自體の實質に關すべきものなれば、決して他の場合に於けるまこと、混じ得べきものにあらず、即ちむしろ他の用語を以てこれに換へ、二者の間其區別を

存するを適當とすべしにあらざるや、他の用語なかりしといふと勿れ、本居宣長最も委しくこれを説き、景樹また時にこれを用ひたるものあり。袖くらへに據れば、景樹正戸に上らんとして、東海道由井が里に寐たる翌日朝のほとしは、し雨やどりする所に、鶯の啼きけるに、酔とるゝ女の、いやは、傾きけり。景樹は直に、いとししく心をとまるむまも、かおはれといひし鶯の聲と、歌ひおけたり。景樹は實際的に、歌の境を思ふ時は、この乙女が、いやは、傾きける如き、端的の感の何とも言はれぬ幽玄の趣あるそのおはれを以て、歌の唯一の主眼としたること疑ふべからず。景樹が直稱しく又純美じといへる歌は、はびしるおはれと稱するの適當なるは、若かす、古學派のみや、び若くは雅心と云へるは、更に明瞭なれどやい。語弊なきを得ざらん、彼の秋萩の下葉を眺め曉の鳴のはねがきを數ぶる如き、景樹も明におはれと稱し、天地鬼神の感動もこの境にあつたに、これ景樹が歌論の僅かなる片隅に見ゆる所の、一水茅屋に、いで宿を、さると、この論議を翻したる所には、たゞおはれとありておはれおはれと思はれ、景樹おはれを説かずとは云ひ難きもの、謂ゆる一家言を明にせんとする時は、景樹直にこれを捨てて走りぬれば

おはれは、これに體言を用ひて、物のおはれといふ時は、全く客觀的存在を有する如く、これを用ひ慣れたれば、景樹が根本論地とは別に、重要な關係なきを得べく、彼のみやびと云ひ若くは雅心と云ふは、景樹はその境、この論議をゆして心する排斥する所なれば、而して景樹は、情の真精しく、また純美なき境を説きしにも、係らず、飽せてまことの一點點に立脚して、其實は既に一步を他の見地に投じ居りしにも、係らず、極めて混雜せるまことの論を以て、歌に於ける技工を退けんとしたりき、彼の蝶よ小蝶の童謡を取りて、春の野のうかれ心は果てもなし止まれといひし、蝶はたまりの歌の類は、その一首のよしやあしやは暫く措き、その歌は、載れたる童謡を探り用ひたる所、これまた明に實際上には、景樹がまことの論以外に逸し居りしものなれど、景樹が歌論としての説明は、常にまことの小洞裡に、踰越して、一步も其以外に出ること能はず、歌はをさなかれといふ、まことなれとの義にして、をさなかれと云へば、命令の義ありて、言ひ過したる所あれば、たゞ眞心を述べたるにて足るべしなど説き、或は門人の詠草に、その歌の病を指しかく、申入候へば、さらば、今度は、しかよみてやらんなど、思ひ給ふべからずとまで云ふに至りぬ。

要するに景樹がまことはその根本的主張としては到底混ぜべからざる論點をも、強ひて同一にし、又その根本的主張の存する所強ひて何所にもこれを貫かんとし、たればその論極めて混雜し、又矛盾せり而して景樹のまことの論が盲目的なるに至りし理由は、喝棒的分子多く、又隣の鬼が怖しかりしにあること、既に記する所に於て、又まことのまことなるものにあらずれば、歌は感なきものたることも、その一因なることを辨せり、抑も姪怒の如きもまたまことなるものにて、固より能く歌たることを得べしといふに就ては、景樹が歌論上更にまた他の理由とすべき一大論據ありき、しるべの説はこれなり、まことの論未だ完からず、詞の何物たるや、を明にして、更にまた論ずる所あるべし。

七

まことの何たるやは既に論じたり、そのまことが果して如何ばかりの異説を我歌學史上に出し、かはなほ後に我歌學史の沿革を述ぶる時に於てこれを詳にすべきが、景樹がまことの論は一面は見れば、或何てもなきことの如し、例へばわが思ふことを言はれぬ人は天下になしといひ、または幼き者が雲のゆくを打みやめてすみれの花に似たりと言へるをとらへて、それが即ちまことなりと説きしを見れば、景樹が謂ゆるまことは別に深く説くまでもなく、若しこれを窮めて、その歌論の真意を知らんとせば、却りてその心にもなかりし解釋を生ずべきにはあらざるが、景樹が門弟の中には、しるべに就ては、兎角に惑ふ所ありて、これを景樹に尋ね問ひしも見ゆれど、まことの何たるやに就ては、別に疑ひし者はなかりしならん、景樹か死後熊谷直好と八田知紀とは、彼の古今集正義序に就てその見解を異にする所ありし如くなれど、まことの解釋はその争點中には入らざりき、まこと、誠實、誠情、實感、實情、真心など言へば、誰も能くわかりし事にて、これを歌によみ出る上に於てこそ、門人等いづれも景樹の喝棒を喫せぬはなかりしと見ゆれ、門人等が疑ひしは、まこと、自體の解釋にはあらずりき、但姪怒と實情とに就ての問答の如きもありて、これらはまことの何物たるやに關する如くなれど、これらの疑も、聞きて直ちに了解し得たりしなるべし、且つ景樹はこのまことを解する人世になきを嘆じて、その弟子等に向ひて頻にまことの説明を爲したれど、景樹が嘆ぜし所もまことの定義を知る人の少しとはあらず、まことの何たるやは誰も知る所にて、口には能く言へ

どさてこれを實際に驗する人の少しといふにありしなるべし
されど若し、まこととは果して右の如き分り切つたるものとせば、まづ第一に想像し
得べきは、景樹が謂ゆるまこととは實に平凡にして、一顧するほどの値もなきことな
り、景樹もその分りきつたる事を解するほどの人世になしと言へりし如くなれど、
そは歌の實際に關する事にて、理論の上には與らざるべし、若し景樹が歌論の穿鑿
を以て徒に鴻鶴既に天に翻りて、なほ澤べにうろつく獵夫の如くに笑ふ人あらば、
われはまづ疑ふ、景樹がまこととは果してその様なつまらぬものなりやと
こゝに注意すべきは、景樹が歌論の重きを爲し、まこと自體の解釋にあらずし
て、その應用論に關する點にはあらざるかといふこと是なり、更に言はば、まこと自
體の解釋には、景樹何等の異りし見解をも有せずして、たゞその歌とよみ出る上に
關して當時の弊風を破るに足るものありしにはあらざるか、この問題の解釋は、も
とより我歌學史を一わたり論ぜし後に定むべきなれど、後にこの問題を解かんに
はまづ景樹が謂ふまこととは果して誰にも分りきつたることなりや否を定め置く
べきは論なし、殊に景樹がまことに就き説きし所は、決して一端にあらず、且つその

まことと説くの極端なる、我歌よむに便りになる書と申もの無之候、只誠を立る書
を見るがよく候、儒佛神いづれ成とも、誠だに立候へばなども言へり、はたその關
べとの關係より言はば、景樹が歌論に於て、まことは調のよりに立つ所、調べを論ず
るに於ても、まことの意義は反覆定め置かざるべからず、しらべは我に備はるもの
なりや、はた外より來るものなりやの問の如きに至りては、これはた、まことの何た
るやに就ての質問にあらざるも、その關する所は、景樹が謂ゆるまことの根本地に
あり、請ふ景樹が謂ゆるしらべの論を解釋するに先ち、わがまことに就て言ひ試み
し所を茲に繰り返し置かん
わが解する所に由れば、景樹が謂ゆるまことは、ひしる主觀的主張なりとするを以
て適當とすべく、彼の自然主義とは混ぜべからず、更に精しくその意義を尋ぬる時
は、景樹がまことに就て主張せし所は、強て區別せは分ちて二様となすことを得べ
し、即ち一は情を形式的に見たるものと謂ふべく、一は情が或條件を満たし、時に
てその情の有様如何を説きしものこれなり、更に言はば、景樹がまことの論は、一は
情の形式に關し、一はその實質に關せしものなり

右の中いづれが最も重きを爲し、やと見れば、勿論その形式的なる方にて、景樹みづからの見解にてはその謂ゆるまこととはまた決して二側面の主張にはあらずりき、その實質的主張の側面に於て、巧める如く飾れる如く、若くはまことより美麗じきものなしと云ひ若くは純精純美といひしも、さて景樹の意まことは何故これよりうるはじき物なきかと問ひ來れば、巧み飾らんの心なく、その發動の本源に於て、既に形式的にもまことと稱し得べければなりき

されば言ふことを得べし、景樹がまことの論はこれを強て二面に區別し得べきにも係らず、その形式的側面はむしろ景樹が歌論の全部を壓するの觀ありき、殊にこの側面の觀察に就ては、歌の淵源に關するの論連絡する所ありき、即ちその意を約言すれば、歌は神人化生して性情備はると共に出て來りたるものにて、また人はことわざ繁きが中に立ちまぢるが故、ものづから喜憂なきを得ずして、その淵源を尋ねれば、歌は決して技工でも何でもなく、たゞ心に感情溢れしより起りしものなりと云ふにありき、されば熊谷直好の如きは、歌と詞とはその本來より云はゞ、もと同一の發達に屬すべきにあらず、歌は聲にありて、詞に與らず、詞はもと俗用を達する

の具なりしと云へり、但歌の起原は言語に先ち蠻人は未だその言語を有せざるに、既に鳥の如くに歌ひしや、景樹が論斷は臆斷に出でしが、多かれど彼のジャンジャックがセン、マルテンの森林中に太古社會の様を冥像して、その自然主義の想火を以て、民約なる團體の大妄想を熱せしめし如く、景樹が歌論に於ては、歌は詞に先つとまで、景樹みづから論ぜしと見ゆる所はあらず、而も大和歌の起源は水土に隨ふ秀靈の性論より出でしものにて、開闢の始めより千早振神もよみ給ひしとは、景樹が深く信ぜし所なりと見ゆ

景樹がこの歌の淵源論は、更に一步進めぬ、即ち歌は始めもなしといふは、即ち其淵源に關するものなれど、景樹は又歌は終りもなしといへりき、且又歌はやまんとして止み得べきの道ならねば、讀まんとして讀み得べきものにもあらずといふ如きは、その淵源論を以て既に發達せる後の歌にも擬せんとしたるものなり、されば歌書といふは、凡て昔には無きことにて、歌は歌書なき時代の人却りて皆上手なりしといひ、若しくは西行貫之などの名歌と世にいふものも、大方若年の時の歌なりと云へる、皆歌の淵源に關する思想先入を爲して、歌は今もかゝるものたること許す

べしとするも歌の歴史的發達は全く所問の外にありき彼の萬葉古今に關する爭論の如きも景樹はむしろ同一の説明を以て之を掩はんとせしにはあらざるか

兎に角景樹がまことの形式的側面は歌の淵源論と連絡する所ありて其歌論の大半を掩ひぬ而して景樹がそのまことの論中に苟も粉飾なしといふ限に於ては如何なる情動をも皆これを取り入れて彼れの姪戀豈實情の外ならんやと喝破したるは全くこの形式的側面より立論したるに外ならず故にこの側面の觀察よりは、姪戀が實情たることもとより怪しむべきにあらざりき

實質的側面の觀察に就て景樹が得意なりしと見ゆるは何等の技工を須むざる歌が飾れる如く巧める如しといふ所を説く所にあり純精純美とまことを形容せるその純精といひしも同じ即ちこれ景樹が古今集を飽まで掲げて真淵などに反對せんとしたる立場の一とも見らるべく景樹はその形式的側面より極端なるまことの論を唱へしにも拘らず景樹はまた右の論點より凡そまことに飾れる如く巧なる如き所あるを許しぬ而して巧める如く飾れる如きを説きしにも係らずなほ

技工といふは理論上に於ても景樹が大禁物なりき且景樹が未だ三十二歳ばかりの時伴蒿蹊に得意の歌を見せしになほ巧がちなりと云はれて我に於ては少しも巧なく思ふまゝを云ひ散らせるなれど彼翁などの頼によみ得ること難きによりていふなればこはせんすべなしと云へるも右の論點と接觸する所あるべしされど景樹が歌論技工といふ事と苟も相觸れんとする時は彼は直ちにその第一點論なる形式的側面に向て走りぬこれ景樹がまことの論に於て注意すべき所ならんさてこのまことの論上に立てる景樹のまらべの説が果して如何なる興味を有すべきかは次に論ずべき所なり

八

まらべといふは景樹の歌論に於ける最後の蝶堂なり景樹の曰はく富士(山なり)は語るべく寫すべく此まらべは語るに口なく寫すに筆なければ推量の沙汰にも及び難しとこれ景樹がそのまらべの論を以て極めて幽玄の境に置かんとしたる所にして景樹は彼の貫之が土佐日記に船厭水中天の詩句を譯して厭すといふべきをそふと延べ言ひたるは入聲を平聲にかへて即ち平調に謠ひしものなる由を辯

じさて景樹は更に説を爲して、然か平調に去らべなせるは水上にて謠ふが爲めに
して、それまた女の謠ふによしあらん事など、あまり幽微の論に落めれば、説き、殘せ
りなど云へり若し景樹が去らべの論は果してさる神秘に屬するものとせば、われ
は既に景樹が歌論には矛盾らしきと用語の無頓着なるとの多きに苦みれば、こ
ゝに愈々筆を捨て、景樹歌論のつまらなきに失望せざるを得ず、されどこれし
らべの何たるやは終に定むべからずとの意にはあらざるべく、景樹はみづから之
を説明せんとして、其一生を擲てり、そも景樹門弟等の間に答へし所は極めて懇切
なりきと見ゆれどその謂ゆるしらべとは果して何ぞ、われは之を知らんとして、ま
たまづその疑義の多きに苦しむ

景樹の説に據れば、調といふは言語の道にある稱にて、萬途に通ずる言にあらざる、言
語の道と云へば、素より歌のみに限らず散文の上もまた然るべきが、景樹は實際そ
のしらべの論を以て、文の上にも及ぼし、例へば土佐日記創見の如きに於て、景樹が
説きし所は、その歌論上の解釋と少しも異なる所あるを見ず、さて調は斯くて文と云
はず、歌と云はず、凡て言語の道にある稱なりとせんに、調は言語即ち詞の上に存す

べきものなりや、はた詞の外に存し得べきものなりや

景樹の云はく、しらべは誠情の聲なりと、聲とは何ぞ、聲は單に聲としては聞くべき
の文義あることなし、その文義あるは聲集りて詞となりてなり、されば調は聲に關
すべきものなりとせば、そは全く聲と聲との形式的關係に止まるべく、文義と相交
渉すべきにあらず、されど若し調は聲にあらずして、詞に關すべきものとなせば、調は
文義と相交渉するを得べし、抑も景樹の一家言に據れば、歌はしらぶる者にして
ことわるものにあらず、而してことわり、の事に就きては、既に前に一言し置きしが
しらべは果してことわり、の外に立ち得べきものなりや、景樹の云はく、しらべなし
に、ことわるは、且那なきに槍をよつて行く如しと、若し調と理との關係は單に主従
の如く見ることを得ば、或は調は理より離して説くことを得べきも、詞は果して理よ
り取り離さんも、猶ほ能くその説明を爲し得べきか、これ景樹がしらべの論を解釋
せんとするに當り、最もまづ明にし置くを要すべきならん、但文義は即ちことわり
に外ならざるべし

今景樹が論旨の最も手近き所より、廻り見んに、景樹が論中には、語調、音調、聲調、など

の用語屢々見ゆる所なるが、こはいづれも理と相關することなかるべし、例へばやまと歌、主人も、客も、他人もいひあへりとあらんに、主人を前に出すと客を後にするとは、其語調異なるべきも、其意義は更に變ずることなかるべければなり、然るに若し調はことわりと更に相交渉すべき者にあらずとせば、しらは、單に聲調といふと同意義に落つべきが、景樹が、しらは、果して單に聲調を以て稱し得べきや、景樹が正面の解釋に據れば、おなじ阿といひ、耶といふも、喜びの聲は喜び悲みの聲はかなしみと、他の耳にも分るゝをしばらく調といふにて、感應は専らこの音調にありて、ことわりにあらざることを悟りて後、鶯蛙の聲も歌なりといふを自得すべしとなり、こゝに喜びの聲は喜び悲みの聲は悲むとは、果して何の義なりや、こは景樹のしらべの論中殊に注意すべきものなるべければ、後に論ずべきが、阿といひ耶といふは、景樹の説に従ひ、これ未だ何等聞くべき文義即ち、ことわりもなきものとせば、こゝに調ゆるしらべは、全くことわりの外に立てるものなるべく、ことわりを離れて説明し得べき者ならざるべからず、こは鶯蛙の聲にもまたその調を求めんと欲せば、殊に其然るべきを見る更らに景樹が旨と人にも示し、といふに従へば、

調は天地に根ざして古今を貫き、四海に渡りて異類を統ぶる者にて、言語は世々に移り年々に流れ、且貴賤と隔たり、都鄙と違ひて、定則なきものなるに、後、人詞に就きて、調をいふは、本末をとりたがへたるものなり、と云へり、言語の世々に移り、年々に流るゝは、例へば、其初は、かもといひしを、後には、かなと言ひ慣らし、若くは馬の鼻むけといへりしを、中頃より、只鼻むけといふの類なるべきが、詞に就きて、調をいふが、本末を違へたるものならば、詞は世々に變遷すれど、調はこれと伴ふべきにあらず、たゞ調に由りて詞は變遷すといふべきか

景樹の説に由れば、古今集序に、やまと歌はと打出て、そのとまりの言の葉とぞなれりける、とあるは、ことわりは更に聞えぬとにて、言の葉となるものにざりける、などなくては、やまと歌といふものは、といふ意のとちめかなはざる事なるに、千歳此文をいぶかる人なく、めてたふとみ、さる所に打あはぬ事あるを得聞知らざるは、調とゝのひたるが爲めにして、景樹は之を以て、單に貫之に於ける除外例と爲さず、古人の文皆然りと評し、土佐日記創見にも、調にまかせて、ことわりを顧みざるは、文の常なりと云へりき、又景樹は在原行平の歌に、こきちらす瀧の白糸ひるひ置きて世の

うさとき涙にぞかる」とあるも、涙にぞかるべきといふを只「かる」と云へるにて、これは右と同一に論じ得べきものなりと爲し、かくも調をいたはりて理を顧みざるは古の常なりと断ぜり、更に言はゞ、景樹が右の論點よりすれば、調は能く理より離れて立ち得べきものなり、但理の違へるものも調に由りて違はざる如くに聞き做さるゝや否はまばらく別とせば、景樹が謂ゆる調は兎に角理の外に立ち得べきものならざるべからず

かゝれば調はまた聲に於てこれを求むべく、詞とは相交渉すべきにあらず、詞は文義即ことわりを専らとすればなり、即ち景樹が誰國たが里にても、鳥を追へばホウと云ひ、犬を逐へばシイと云ふは、これ萬世不易のしらべなりと言へりしは、そのホウ若くはシイといふに於て、素より何等のことわりをも想定せざりしなるべく、彼の阿といひ耶といふ聲が聞くべき文義なしと雖も、その感應は専ら聲のしらべにありといふ、その聲のしらべは全く正面より解し得べきならん、熊谷直好のいひし所を見れば、此點更に明なるが如し、其説に云はく、詞は偏に俗用を達するのみ、人も鳥蟲と同じく獨することならしめば、詞はなきことなり、鳥蟲も人の如く事業あら

しむる時は、かならず詞出でべきなり、其詞は感外のものにしてやむを得ずいひ出るものなり、なご感ずる時は聲あるのみ、歌は天地の間情あるもの、感の聲、其聲にそれ、色音あるを、しらべ、調といふと、右直好の説に據れば、しらべが聲に存じて、詞の上に興らざるべきは明にして、八田知紀も、大和歌の義理を待たず、贈節を待たずして、直に聲の響感爲すといふ事は、早く師説にて明なりとも云へれば、景樹が兎に角そのしらべの説を以て、全く理外の境に立せんとして、また之を聲の上に求めたるは疑ふべからず、されど若し景樹がしらべを以て單に聲の上に求むべきものなりとせば、その謂ゆるしらべは聲調若くは語調といふと同義に歸すべきにはあらざるか、若し聲調といひ語調といふは最も技工を容れ得べきものなりとせば、景樹がしらべの論の根據とせるまことはこれを脱くことの必要いづくにありや

眞之が土佐日記に、棹穿波底月、船脈水中天といふ詩句の中、波底月とあるを波の上の月とし、水中天とあるを海のうちの空とかへたるを、景樹は賛して、かく波の上の月海のうちの空とうたひてことは、今夜のしらべにかなひ、却て詩情もうかぶべけ

れと云へりしが、今夜のしらべとは何の義ぞ、これを聲調若くは音調としては更に解すべからず、これら景樹が一向無頓着にてその歌論上最も謹むべき用語を敢極端の意義にまで推し當て、言ひしなるべきが、景樹が謂ゆるしらべはかゝる用ひざまなるもの他にもありと見ゆれば、景樹はこれを以てもとより怪とせざりしなるべく、即ち景樹が謂ゆるしらべは通常聲調若くは音調と云へる外に、何等かの主張別に存せしにはあらざるか

此點に就き最も顧みるべきは、彼の喜びの聲は喜び、悲みの聲は悲しむといふことなり、こは景樹がしらべの論の最も正面なる主張にして、景樹は之を様々に言ひ顯せり、即ち調のととのふとは、月は月らしく、花は花らしく、よむ事に候、その花の中にも、山の花は山の花らしく、川の花は川の花らしく、庭の花は庭の花らしく、猶ほ開落あり、遅速あり、それも皆それらしく申なりなど云ひ、或はゆらくしたるが調のととのへるに非ず、せはしき事はせはしく、強きものには強きが、調の整へるといふなり、俗にも祝辭は勇みていひ、吊詞は志をれていふに非ずや、是れ天地自然の事に於て教を待たねことなりなど云へり、今一の例歌を取らば、八田知紀が布袋和尚の書

養に

いさやその袋のうちはしらねども

こゝろにいれぬものやなからむ

とよみしを、景樹評して、頼政の歌に

いさやその袋のかずは知らねども

玉江のあしの見えぬ葉ぞなき

とあるは、螢のさよく飛びかふさまのなつかしきを見て、いさやそのとかよわくやさばみて打出たる、いとよくふさへる調にして、又女などに打向ひて、いさやその心のうちはなどいはんには、調よくかなへど、布袋和尚には似合はしからずと云へる由見ゆ

こゝに疑ふべきは、調は若し、ことわりと相聞せず、又たゞ聲の上に求むべきものなりとせば、螢にいさやそのと云へば、何故調ふさはしく、布袋和尚に然か言へば、何故調かなはざるか、いさやそのといふをば詞と見ればこそ、やさばみたるかよわき文義もあるべけれ、若し之を單なる聲なりとせば、果して螢には能く適して、布袋和尚

此は然らざるほどの特調ありや、若しことわりを顧みざるが古の常ならば、何故布袋和尚といふことわりを離れてしらべなすこと能はざるか、苟も布袋和尚なる一事相を顧みるを要すべしとせば、ことわりもまた入り來らざるを得ざるにあらずや、景樹の云はく調の上にことわりあるを知らず……語調もなまりたるはことわりに違へるの自然なりと但こは少しくことわりの他の方面に屬すれど、なほ委しく景樹が調の説を究めんとせば、ことわりの論は到底復活し來らざるを得ざるべし、ことわりが單に謂ゆる形式的なるものゝみに限るべからずして、景樹もこれを二様の場合に等しく用ひしことは既に記し置きたる所にして、その二様の場合の何たるかも其所に出し置きぬ。

九

景樹がしらべの論を究めんとせば、まづそのしらべとことわりとの間に暗黒面ありて、うかとは進み難く、その疑はしきよしは已に掲げしが、今こゝに重ねて景樹が調に就きみづから云ひし所の兎に角西と東となるが如きものゝ重なるを擧ぐれば左の如し

(イ) 調をいたわりて、ことわりを顧みざるは古の常なり(土佐日記創見、海のほとりにとまれる人も遠くなりぬ云々の條)

(ア) 調の上にことわりあるを知らず……語調もなまりたるは、ことわりに違へるの自然なり(土佐日記創見、和泉の國までたひらかにと願たつ云々の條)

(ろ) 調とのふとは月は月らしく花は花らしくよむことに候……それ差ひ候へは何ほどことわりは正しく聞え候ても歌にてはなく候なり(宮坂久寛詠草 草真壽)

(イ) 此文の類ひ事がらは正しといへども猶その調はたはれたり又ことざまたはれたるに却て調は正しきもの多し(土佐日記創見、二十五日守のたちよりよびに文もてきたりの條)

既にも言へりし如く、(イ)は景樹が古今集序の初に、言の葉とぞなれりけるとあるに就ての解と同じ心にて、これ景樹が持論の一なるべく、調さへかなへばことわりはたぢろぎても感ありて千載にわたるに候などあるも同じかりぬべし、(ア)はまた景樹が一時の言とも見ええず、然るに(イ)と(ア)とを比較する時は極めて矛盾の意義あり

何ぞや、景樹は(イ)に於てはことわりの顧みるに足らざるを極言し、(ア)に於てはことわりの顧みるべきを極言すればなり。然るに(イ)に於ては、(ア)に於ては、(イ)は景樹が最も得意なりし論辯にて、或は杜鵑は杜鵑らしく、鶯は鶯らしく、富士はふじらしく、築山は築山らしく、人は人らしく、犬は犬らしくとも云ひ、或は抽象的にせはしきはせはしく、強きものには強きが調のと、のへるといふなりなどありて、調に就ての間には、景樹大方この意を明にせんとしたりき、即ち(イ)と(イ)は調のと、のへると否とを判じ得べき一の標準の如くに説きしが(イ)に於ては、事がらは正しきもなほその調のたはれ、又こととまたはれたるに却て調は正しきもの多しとあるは何ぞや、杜鵑は杜鵑らしく聞ゆる所に凡そ調は存すべしとせば、事がらの正しきには調もまた正しきを要すべきにあらざや、たとひ滑稽なりとて、調は調なり、調は凡て調らしきを要すとせば、らしからぬ所に存する滑稽即ち俳諧はいづこに調の存在を容すべき、更に云は(イ)と(イ)とは極めて矛盾すべきなり、(イ)と(イ)とは要するに(イ)と(イ)とは景樹の調がことわりと交渉する所に於て矛盾し、(イ)と(イ)とは調の本體に於て矛盾せり、景樹の説きし所果していづれをか取り、いづれをか捨つ

いづれも捨て難くして、たゞ景樹の論には既に述べたる如く一喝的主張多しとせよ、われはまづ(イ)に於て事がらの正しきに調のたはれたるを容し、また事がらのたはれたるに調の正しきを許したるは、これ景樹の歌論に於てはその謂ゆるまこととが全く主観的主張にして、その對境の如何には更に關係する所なきの一證と爲さざるべからず、即ち事がらの果してたはれたりや正しきやは、その主眼として免に角問ふべきにあらずしてたゞこれに對する感情の如何を問ふべく、調もまたこの情が能く(イ)と(イ)の所に存すべきなり、更に(イ)に於ては滑稽の何たるに關せず、調が能く調たるは情のたはれたりや正しきや如何に存すべく、事がらの如何には關係する所なかるべきなり、即ち事がらはたはれたるも、これに對する情は正しきを得べく、正しき情には正しき調これと伴ふべくして、調の正しきは事がらのたはれたるに對することを得べきなり。

かくれば(イ)に於ても謂ゆる(イ)と(イ)の説明を發見すると得べく(イ)と(イ)とは矛盾するとなきなり、さてまた(イ)と(イ)とを細察する時は、(イ)は調の論の正面より極言し

(イ)はその裏面より極言せしを見る、極言するが故に景樹の説明は常に矛盾の形を取れりと雖も、既に景樹の本意より云はゞ理は違へるも、苟も調さへかなへばその違へる理も違はざる如く聞ゆれば、調はもとにて理は未なり、即ち調とイのふ時はことわりは自然に備はるにて、而も翻りて裏面より觀れば、調はことわりを離るゝを得ず、例へば花を折るといふべきを花に折るといへば、しらべも忽ち亂るべしとの心なりと假り定めんか、(S)とイとは矛盾する所なかるべきなり、然る時は(S)とイ(る)イよりはこゝにたゞ二箇の重なる主張を見出すとを得べし、即ち調は凡そらじきといふ所に存し、また調はことわりをして能く聞えしむるものなること是なり、されば今またこゝに究めざるべからざる二箇の題目あり、らじきとは果して如何なることなりやといふことこれ其一にして、調と理とは離るべからずとせば、調と理とは果して二名一體なりや否といふことこれ其二なり、而してこの二箇の題目はまた合せて問ふとを得べし、云はく、らじきとはとわりの別名にはあらざるかと、これらを明にせんとせば、またこゝに一二の記憶すべきとあり、まづ景樹の口を極めて、ことわりを斥けしは、これいふまでもなく千蔭春海などの鬼もすれば、ことわ

りを口に筆に唱へて、こはことわり聞えず、こはことわり違へりなどいひしは恒のことにて、また景樹の歌は天仁遠波もとのはずなど罵られしに對し、殆ど謂ゆる賣り言葉に買ひ言葉とも見得べきふしなきにあらず、故に一面には歌の根本よりことわりを斥けんとしたる如き語勢ありて、一面には全くこれに反し、義理を棄て天地何物かあらん、義理を離れて天地如何にか感ぜんなど、ことわりを見ること甚だ重きものあるも自然のことならん、或はいふことを得べし、景樹がことわりに對せしはまた表裏二面の主張ありきと、裏面の主張とはもとより其頃の歌に關する俗見に反對せし、わが謂ゆる喝棒的主張にて、景樹が眞意は重に其表面の主張に於て窺ひ得べきなり

されど景樹はもとよりみづから表裏二面の區別を爲して立言せしに非ず、また調と理とが果して異名一體のものなりやなどいふ如きは、景樹のさまで考もせざりし所なるべく、またその必要もなかりしなるべし、故に景樹が歌論の解釋として、かゝる點をもほじくらすとするは全くの徒勞ならんとも見ゆれど、既に前に引ける如く、景樹義理を棄て、天地何物かあらんといひ、また義何ぞ性に遠からん、理また

感を塞ぐべきものならんや、是また人智の量れる義理は眞義ならず、至理ならんか
 らに、凡て神人の性に倅り、實は天地感ずるに至らざるものなりといひ、或は道理を
 はづすが眞心なりといふに、あらず、眞心は多分道理にはづるものなりと云ふな
 り、それやがて眞の又眞なるものなりなどいひしを見れば、その説明の何となく神
 秘ある如き所、景樹は最も特意なる如き語氣ありて、まこと、いらべ、ご、ご、ご、の三者
 が相関係する所、景樹決して考へざりしとは見るべからず

然るに今こゝに率然として、景樹に向ひ、ことわりとは一面より見たるし、らべの名
 なりやと問はゞ、景樹は忽ちその然らざるを答ふべきなり、何ぞや、景樹は調第一理
 義は第二など稱し、また全く一時の隨筆なるべけれど、調と理との關係を、旦那と槍
 持とに譬へしを證とすることを得ば、理はその調に對する關係如何に係らず、鬼に
 角し、らべとは別なるべければなり、されどそれ果して別物なりや、まづ景樹がその
 門人を戒め、昔年の先哲ます、理窟には入り、天地幽玄の大道を知らずなどいひ
 て、その斥けし理は果して如何なるものなりやと問はんに、例へば左の歌に於て
 秋かぜの尾上の松にことゝへば

人に答へずさを鹿のこゑ
 秋風が尾上の松に言問ひしにもとより人は答ふべきにあらず、ざるを人は答へず
 といふはことわりかなはずなど、いたづらに、調ゆる理窟をたどらんとするを、景樹
 は嫌へるにて、また例へば

たてば立ちぬればまたるふく風と

浪とはあもふどちにあらん

とあるに、浪のたちるはもとより風と親しからんとてするわざにあらねば、浪と風
 とがあもふどちなりなどいふは、全く小兒のたは言にて、論理も何もなきとなれど、
 なほ歌たるの感動あるは、調あるが爲にして、即ち景樹が歌は、をさなかれど古哲申
 され候も理窟をいふなど申す事なり、小兒などの申事は前後打揃はず、まめくし
 き義理なきのたとへに候といへるは能く右のたてばたつの歌に當り得べきか、さ
 てこゝにそのまめくしき義理とは何ぞと問ふべし、蓋景樹が理窟といひ、またま
 めくしき義理などいひしは、推理といふに同じかるべく、彼の景樹が大段の手仁
 波と稱せしもの、即ち花に折る花を折るのに、をの如きは、景樹もこゝにことわり

存するを認めしも、景樹はこれらのことわりは寧ろそのなかるべからざるを主張したりき、而も景樹は是等のことわりは小兒の時より練習して露違はずといひ、これを以て推理とは同一視せざりき、即ち景樹はことわりといふを二様に解し、推理といふ名の下に包括し得べきはこれを斥けぬ、さて義理は第二などいひしその義理は二者いづれに屬せしやは極めて明かならざれど、こは必らずこれと限りしにあらざるべし、但爾ゆる推理と稱し得べきものは到底悉く斥け得べきにあらず、たてば立つの歌も證とはすべけれど、なほ更に一の證據を土佐日記中より取らんに

まことに名にきくところはねならば

飛ぶが如くに都へもがな

とある所の名はまことに羽ねならぬは知れしことなるに飛ぶが如くに都へもがなと結びたる恰も天に登る階子あらば、われはそれに乗りたしといふに異らずして、推理は誤れりとも、即ことわりはなしとも、首はといふべけれど、名にきく處が果して實際羽根なりや否やを問はず、たゞはねならばとある前提より、飛ぶが如くに

と断案せる、推理はなしといふべからず、更に云はゞ右の歌に於て一面より云はゞ推理はなきも、他の一面より觀れば、推理は存せるなり、景樹の歌にかへるには日はまだ高し、菅原や伏見の梅のさかり見てこんとあるも、同じことにて、こゝに推理なければ、何の心とも聞え難かるべきなり、而も景樹はこれを没了せんとせしにはあらざるか

景樹には一の特別なる思想ありき、即ち上記せし如く、凡そ調かなへばことわりは自然に聞ゆべしといふこと、是なり、而してその自然に聞ゆべきは、景樹の意見に據れば、ことわりの違へるも、調にまかせて違はざる如くに聞ゆることを得べく、且誰もこれを怪まざるべきなり、さらばことわりはなくも可なるべきやといふに、景樹は言断して理なくして調あるは理のなき歌にて、少しも歌といふ名は耻づることなしとまで云へり、殊に景樹は阿といひ耶といふも、歌の外ならずといへるより推せば、ことわりのなき歌といふものあるべきは、景樹の真面目に信ぜし所ならんかくて、若しことわりのなき歌もあり得べきものなりとせば、調と理との關係は極めて簡單なるを得べく、即ち調は明に理外のものにして、理とは何の交渉する所も

なきを得べきなり調の何物たるを説かんに理との關係を明にするの必要は更にあるまじきなり抑も景樹がむねと人にも示しといふに彼の調は四海にわたりて異類をすぶる物なりとあるは全く理を外にしての論なるべく熊谷直好の如きは既に記せし如く調を以て全く言語の外に置かんとし且これを以て景樹の教ふる如くにも唱へ見山紀成は蝦夷に至りてよろづ島人をとりあつかひ調は四海にわたりて異類をすぶる物なりと古今正義にはれたるさとしあやぐもしり侍りぬといへりしがこれいづれも調を理外より見たるものにて景樹の論より推せば歌の最も純粹なる理想はむしろ理なき歌といふに歸すべきならん而して此點景樹のしらべの論に於て最も記憶すべき所なるべし

されば今景樹より見てことわりある歌に於ても右の論點は貫かるべきものなることまづ想像し得べきが景樹の云はく理なきば理のある歌にて最上のことなりとわれは問はん調は已にことわりの外なりとせば何故調を専らとすべき歌に於て理あるが最上のことなりや熊谷直好の説きしに據れば人は聲をあやどりて用ひなれたる習あればその永くなるに付きて俗談に用ひならしたる調のやとはれ

て出てくるなりとあれど調の出てくるは更にいはくことわりの出てくるにてまた直好の説の如く調は人生れて事業の中にあるより止むを得ず歌にもいひ出るものなりとせば理のある歌は最上にも何にてもなかるべきものなり景樹の見地よりせばことわりは止むを得ず歌に伴へるといふを以て最も適當とすべきにあらず

されど既にやむを得ずことわりを借るべき以上はまたこれをかへりみるを要すべきか云はく然らず景樹の説に據れば理は調にまかせて聞ゆべければ理を問ふの要はいづこにもあることなきなり而も理はたとひ違ひしも調にまかせて聞ゆべきものなりとせばその裏面に能く調のととのへる歌はそのことわりもまた最も能く聞ゆべきにはあらざるか例へば八田知紀は或人の歌に朝な／＼霞に消ゆと見し山の雪はけふこそ残らざりけると有しを景樹がこは二三の句つぶ／＼とことわりたる更に歌ならずとて朝な／＼霞に消えし山の端のと取直したる由を記すれど霞に消えし山の端のとせるも同じくことわりたるなるべく若し霞に消えし山の端のと直したるが調のととのへるなりとせばこゝに初春の山のこと

む、最も能く聞えたりとすべきにはあらざるか、また

隣家鶯花

花もみもうらやましさを植こめし

隣のやどのうくひすのこゑ

とあるを景樹が直して

咲きにほふ花ばかりだにあるものを

隣のやどのうくひすのこゑ

とせしが、調能くとのへりとせば、隣家鶯の心もまた最も能く聞えたりとすべきにはあらざるか、即ち隣家の鶯を能く隣家の鶯らしく、ことわりたる所に調は存するにあらざるか、更にいはゞ、すべて景樹が調の説明に、らしきといふを唱へしそのらしきは畢竟ことわりと同義に落つべきにはあらざるか

桂園派の歌論を論じ併せて淺瀨の波第二篇を評す

淺瀨の波は這度池袋清風大人があらたに撰ばれし歌集にして、主として大人門下

の歌を集め、又大人師友の歌および大人の自詠をも添へられたり、歌は五百七十餘首ありて上下二巻に分かれ、編輯の順序は通常歌集の體裁に由りて四季の部戀の部雜の部に分ち、羈賀旅吊の如きは昔雜の部に入れられたり、されどこゝに之を評せんには全くこの順序に由る必要なしと思へば、余はその中より適宜に抜きいでていさゝか卑見をいはんとす、そは大人の教を請ふべき所多ければ也

序評

前言せし如く本書の撰者は池袋大人なり、されば大人はいかなる歌をばよしとしてひねと撰ばれしかは讀者の最もまづ聞かんと欲する所なるべし、まづつかなきわざながら余もこゝに大人の歌學上所見を窺はざるべからず、且歌學上所見とそ人の歌自體とはもとより別物なれども、なほ歌學上の所見はその人の歌自體に關係する所、尠からざればかたがた余はあらかじめ大人の歌論を窺ひ置くの必要あるなり、而して予の後に開陳する所を以て知らるゝ如く大人の歌論は要するに香川景樹の所説として知らるゝ所の者の外に出でざるなり

(一) 歌とは何ぞや

但余はこゝには歌のむねとよみ出づべき境は如何なるものなりやはた大人のこれに對する高見いかにといふを知らんと欲するもの也さて淺瀬の波第二篇出版の廣告のすり物を見るに曰く

(前略)近世一派の國文學者語學家等の如き露骨乾燥の死句にもあらず誠に高雅にして而も平易に天然にして而も優美なり再三靜に之を風詠すれば餘情言外に溢れ宛然身は實境に在るが如く清閑の幽趣を發し心神をして雲外に逍遙せしむるの妙ありこれ皆歌に生命ありて活動するの致す所にして實に天眞より得たる絶妙の調といふべし然るにその天眞より得るには果してその源泉ありや否やこれを考究するは蓋歌學必要の問題也

清風大人嘗て曰く世人動もすれば和歌を學ぶには必先づ天爾波を知らざるべからずといふ普通和歌の先生も亦先づ語格を唱ふべからずと唱ふ此徑路は破頭第一天眞の道に向ひて一步を誤れるもの也と又曰く(中略)是の如きは初學固有の天眞を害する甚大にして其毒を他日に胎すこと尙に淺からず矣と大人のこの論實に古今歌人の意表に出たる活眼といふべし今その教授法を見るに敏

活態篤三才間の實景實情を指して學者固有の天眞を發揮せしむ云々とありこは重に詠歌の工夫に關しての言なるべけれど右の文を讀みもてゆくに第一余が最も心地よく覺えたるは大人が古今の歌人および歌學者をにらまへたる卓見を持せらるゝこと是なり次にわが爲にむびたゞしく聞えたるは實境實景實情又は天眞の道若くは固有の天眞などあること是なりこゝに於て余はほゞ大人のいたく歌學上の眞實若くは誠實主義に熱心し居らるゝを認め得たり即ち大人は實眞若くは誠實余は以下單に誠といふべしといふを以て歌のよみ出づべき唯一の境と爲し凡そこの誠をよみ出るを以て歌の究竟の目的とせらるゝにはあらざるなきか若し然りとせば余はこゝに知らざるべからずそもそも誠とは何ぞ誠とは果して歌の究竟の目的とすべき境なりや

然るに余はいまだ大人がその歌學上所見をば組織的にいはれしものを見ること能はず故に余は止むなく大人の嘗て公にせられし八代集批評をば重なる参考として曰はんに大人のいはゆる誠は二様の場合に於て曰はるべきものゝ如し(一)大人のいはゆる實情これなり實情とは何ぞと見るに大人いはく初秋までは大方の

人にて物悲しきことなく、酷暑に堪へかね、やうやう秋を待ち得て涼風の吹くを快とするは常の心なり、さればこそ古今集の秋の初も涼しく面白き歌のみなれ、これ盡く實情より出てたればなりと也、然れば冬にもなりて雪はだれに降りしく頃となれば西又は北の風など打吹くにつけても寒しと云ふはこれ又實情なりと曰はるべく、更に又親ひなくして悲み、友を相見て喜ぶも實情といふべきに似たり、然るに大人の意はこの實情といふは甲の感ずる所は乙も丙もしか感ずらん如く、同應性あること即ち普遍的のものたるを要すとせらるゝものなりや、前例に就て見るに秋風云々は快感に属すべきが快感は個人的なるを常とす、そも全く個人的なる感情は大人はこれを實情とは曰はれざらんとするものなりや、余が打見たる所にては前例中常の心云云とあるはたゞ大凡に曰はれたるものにて、嚴格に普遍的と否とを問はれしにはあらず、試に大人の意を曰はゞかの鶯の花に啼きたる、蛙の水に聲する、いづれも皆實情といふべく、此鶯若しくは蛙の花若しくは水に感聲を發すらん如く、物にふれ事に應じては人々れのづから心に動く所なきこと能はず、其天地の成しのままなる又其心のありのまゝなる所を指して大人は實情と曰は

るゝものにて、更に曰はゞ實情とは單にいつはりかざらぬ心といふに歸すべし、(三)大人のいはゆる實景これなり、實景とはいふまでもなく、天地人にわたりたるくさぐさの現象なるべし、すなはち海潮の湧き出てたる、三日月の山のはにほの匂ひたる、みな實景に属すべく、かのますら雄が鬚津彦真弓を引き鳴らしたる又然るべきなり、要するに實情とは彼の如く實景とは此の如く、この實景と實情とはこれやがて天地の間の眞實なるもの也といふより大人は之を誠と稱せらるゝものゝ如し、故に大人より見れば秋立ちし初より只管秋を悲しきものに言ひなすは誠にあらず、やうやう秋を待ち得て樂しきを覺ゆるは人の心のいつはりかざらぬ所なればなり、而も例へば父母妻兄弟親友などの身まかりしに逢へる者が秋のきたるにつけて頻にこれを悲しきものにするは誠ならずといふべからず、かやうの時には悲しきが人心のいつはりかざらぬ所なればなり、又秋の月さやかに照りたらん夜など山邊の紅葉などのぞみ見て色が濃し又は薄しなどいふは誠にあらず、實景はしかく色の濃淡を識別するを許さざれば也

然るに大人はそよぐ法師が雲林院にての櫻ちるの歌をいたく賛して千古の實景

なほ眼前に見る心地すとてさて曰はれしことあり、眞景を寫す今と雖も難きにあらず、たゞ天眞を述ぶるのみと申されたり、されば眞景を寫すといふも詮する所實情を述ぶるに過ぎざれば、實景は即ち實情なり、故に誠といふも全くは實情に外ならず、實情を外にしては誠なく、實情は即ち誠にて誠は即ち實情なりと曰はるべし、而も大人は飽まで實景といふを説き給ふ如くなれば、大人の意は實景は實情なりとするにも係らず、歌は一方には實景を寫さんとするものなりとし、歌の目的としては飽まで實景を寫すといふ一事を眼中にし給ふもの、如し、故に大人の説かるゝ歌はなほ實情れよび實景の二なりといひて然るべき歟、但景樹が一方には實景々々といひしにも開せず、一方には歌といふを概言する時はかならず歌は性情を述ぶるの道なりといひ、或は歌はひたへに眞心を述ぶるものなりといひ、或は歌は天地の威を達するもの也などいひ、類なるやも知るべからず、然るに要するに大人のいはゆる誠は右の如きものにて畢竟實情と實景との外には出でざるべし、さて又大人の高見に由ればこの誠といふは歌の目的とすべき唯一の境にして、苟もこの誠を離るゝ時は歌は作物となり、すなはち歌とはいふべからずと

し給ふものとせんか、余が考ふる所を以てすればこは全く誤なり、大人が歌に對しての破頭第一の誤なり、請ふ之を論ぜん
まづ實景に就て曰はん、大人のいはゆる實情とは情の發動をば形式的に(余はかくいふ)見たるものにて、その實質(余はかくいふ)の如何には更に關せざるものなり、更に曰はゞその發動にして形式的條件さへ具へたらんにはその實質の如何に關せず、情は皆これを實情と稱し得べきなり、從ひて昔歌の目的としてよみ出づべき境に屬すべし、然るに歌は果して其よみ出づべき情の實質如何を顧みざるべきものなりやと見るに、余は大人の言に由るも其然らざるを知る也、大人いはく七夕の如き卑俗愚昧の想像は今後永く廢滅に歸して可なりと也、こゝに卑俗愚昧の想像と曰はるゝはかゝる男女の情は實情にあらずとせらるゝものなりや、試に一方より見るに前にいひたるいつはりかざらぬといふ點より見ればこは實情の實情とこそはいふべけれ、實情にあらずとは如何にするも考ふること能はざるべし、但こは歌學者又は歌人が打まかせて俗情又は俗意などいふに屬するを得べし、然るに又一方より見ればかゝる俗情をばいたく歌より排斥するものと曰はざるべか

らずすなはち大人はかゝる俗情は絶対的に歌によみ出づべからずと曰はるゝもの也すなはち歌は其よみ出づべき情の實質をも顧みるべしといはるゝもの也、もふに大人の眞意は全く此に在るべし、然らば大人が打まかせて誠を説かるゝは既に誤れり、前言せし如く單に誠といふ點より見れば右のいはゆる俗情を排斥すべき理由更になければなり、因りて爰に歌はそのよみ出づべき情の實質をも顧みるべきものなりとせんに、凡そ歌にむねとよみ出づべきは如何なる情の種類なりやを知らざるべからず、然るに俗情と汎稱さるゝものゝ中右男女の情即ち色情は大人の高見よりすれば其歌より排斥さるべきは勿論なるがその他の俗情は如何なるべきか、大人のかれこれ曰はるゝ所に由りて考ふれば大人は疑もなく俗情といふは排斥さるゝ所なるべし、今爰に其普通に俗情といふを解釋せんに、こは二類に分ち得べし、すなはち一は性慾に關するものにて、こは更に二種に別るべし、甲は色慾に關するものにして例へば七夕に於ける男女の情の如し、乙は食慾に關するものにして例へば花より團子といはん如き所に存すべし、但以上は重に快感に關係すべきもの也、さて又一は功利の觀念に伴へるものにて例へば歌を作らんより

田を作れといはんが如き所に存すべきもの也、此外又けふは風が吹く、往來に人が通るなどいはんが如き所に存する快とも曰はず不快とも曰はず又悲しとも嬉しとも曰はざる極めて普通なる感想の或有様も又此俗情の中に屬すべし、茲に問はん苟も野情といふ大風呂敷の裡につゝまるべき感覺感情を除けば諸他の情は皆歌のよみ出づべき境に屬すべきか、この事に關しては余は爰に景樹の説を引き來るの無用ならざるを信ず、大人の八代集批評を見るに主として景樹の説に由り、又總じて景樹の説は大かた大人の捧持さるゝ如くに見ゆれば也、さて景樹がその門人の詠草に與書したるものを見るに歌はみやびを本とせる事論なければ、うるはしき本體なりとあり、其うるはしきといひしは詞のいひまはし續けさまに關するものなると明なれど、其みやびを本とすとあるは同じく歌の上のみに就て曰ひしものなりや、或は歌の本たる心に立かへりて曰ひしものなりや、景樹は更に曰く、そのうるはしきは又外より求むるものならず、たゞ(中畧)もふ一ふしをすらく、と述べ出すのみ(中畧)さるはやがて誠實をみかくに侍れば光出てたる光は又たゞ歌の上のみならず何らの上か照らさざらん、さて後ぞ近くは父遠くは君の聖言にも

をさく、遠からずや侍らん又別に曰く誠は萬物の基本に侍ればなどか歌のみの益を爲して止り侍るべきと也之に由りて考ふれば歌の目的とすべき境は他まで一の誠にて畢竟この誠をうたひ出でんが爲に歌の工夫といふは費さるべきものにて凡そ歌に就てうるはじといふは固より詞の上に屬しみやびといふも詮ずる所は歌が人情の誠をしらべなさんとする所に存すべきものにて景樹は又別に曰く今の世に歌よみて取あつかふを見るに月花に由れる假初のなさはいふも更に悲の過ぎり喜のあまりをいふにも大方は古き例に由り雅びたる詞になづみその誠の心ばせを失へるなすからずと也こゝに假初の情とあるは風雅の情又はみやび心といふに同じかるべく其悲の過ぎり喜のあまりといふはこれはた景樹はみやび心と思へりしものなりや悲は悲喜は喜にして決してみやび心とは同一なるものにあらず而かもかれもこれも人心のひとへの誠に外ならずとやうに景樹は思へりしなるべき歟若し然りしとせば歌はみやびを本とすといふも到底歌はみやび心を本とすといふ意にはあらず歌のよみ出づべき心はた誠と稱すべしとするものゝ如しかくして歌は喜身に過ぎし時は唯その喜の限をばのへ

悲心にある時は唯その悲のあまりを打出づるものなればその情誠の發するに應じては何物か感動せざらん男女の中をやはらげたけき武士の心を慰めさては天地鬼神を動すといふもたゞこの一の誠をうたひ出たれば也歌にかの花をもてあそぶとて便なきにまどひ或は月を思ふとて闇にたどれる心をよみ出づるといふも其心のをさなき所はそれやがて人の真心にして即ち一の誠のみ又高砂住吉の松を見てその非情の松も其老ひたるを見てはわが昔の友になぞらへられて同じ齡のほどにやとふと思ひなざるゝ心をうたひ出るといふも其心のわりなきやうなる所はそれやがて人情の誠なりとやうに景樹は思へりしものゝ如し故に歌はをさなかれといふも景樹より見れば其をさなきやうなるが人の性情未だ道とすべからざる幽玄の境にして而も人情の誠なるが故に歌はをさなかるべしとやうに論断すべきものなり更に曰はゞ景樹は單に其のをさなきといふ所よりはむしろ其のをさなきが即ち人情の誠なりといふ所に着眼したるものゝ如しこの點より見れば景樹はいはゆる俗情を除けばその他の諸情は歌に於ては唯その形式的條件即ち誠をのみ顧るべしといふもの也歌は悲しき時は單にその悲をばのへ嬉

しき時は單にその嬉みを打出てたるものとするもの也余は大人の高見はまたこゝに在りはせざるかと疑ふ然るに景樹は更にあはれといふに就ていへりし所あり曰く(前略)さる物の哀(闇)にたどり又は便なきにまどひて月花を忍び或は萩の下葉をながめ又は曉の鳴の羽ねかく數を聞きたらん如き折の哀を知るらんことは人とあるかぎり高きも賤しきも昔も今も露たがふまじきなさけにして彼あめつちをいため鬼神を泣かするわざもたゞ此境にあれば也わづかにこの情を失ふ時は衆そひき親はなるゝに至る(中略)事の淺きに似たるをもてあろそかに見ること勿れと也かゝれば景樹は又あはれといふを以て歌が歌としてよみ出づべき唯一の境といひしもの也故に景樹は一方に於ては歌は情誠の發する所何物か感せざらんと言ひ一方にはあはれこそは歌のよみ出づべき唯一の境なりといふもの也然れば誠とあはれとの關係はいかに或はこは名のみ異にしてその實は指す所全く同じきものか但景樹は右あはれを説きたる文中古今集正義序文の所參考に於て更に誠を曰はざれどもわづかにこの情を失ふ時は衆そひき親はなるるに至るといへればあはれといふも全く人心の誠なりと思へりしこと明なり景樹の語法

を假りて曰はばあはれといふもそれやがて誠に外ならずとやいふべからん若し然りとせば誠を離れてはあはれなきこと明なれども誠なるものは必ずあはれなるものとせしものなりやあはれと誠とは畢竟同一のものなれば歌に於てはたゞ一の誠を説くべしと思へりしものなりや若し景樹の意果して此に在りしとせば余は大に非難せざるを得ずそはあはれはその詞の用ゐ方より見るも單に悲歎の方に就て曰はるべきものにはあらで喜樂の方にも曰はるべきは人の知る所なり例へば日の御神天の岩戸より出てましゝ時もろくの神たちあはれあなちもしろと歌ひたまひしといふに由るもあはれは嬉しみ樂しき方に就ても曰はるべき疑ふべからず且このあはれは單に悲歎の方にのみ限りたるものにはあらで或はむしろ悲歎又は愁傷などいふ如き極めてさし迫りたる方に就ては曰はれざる如し既に前に一言せし貫之が列記したるものに就て景樹があはれとして曰ひたる例を見るも其月花に對する感情といひざれば石に對する感情といひ一は樂しきが如く愁はしき如き境に在るものにして一は全く悲愁又は苦痛の境とは隔りいづれも悲歎又は愁傷などの情とは同一にいふべきにあらずかの曉の鳴の羽音に對

する感情といふも決してさし迫りたる苦痛のものにあらず、要するにあはれとは深く事に或は物に思ひ入りたる瞬間に於て始めて見るべきほどの感情の有様なり、但、あはれは喜又は悲などの感情と相並ぶべき一の獨立の感情としては曰はれ居らざるが如く、或はあはれを知るといふ時はあはれとは全く吾人以外に客觀的存在を有する如くにも見ゆれど、客觀的存在を有せざるは勿論なるべく、且悲しき方にも樂しき方にもいふことを得べきものとせばこゝに之を實質的に獨立の價値を有すべきものとし、之を一種の情として見ることを適當なるが如し、景樹も露たがはざる情又はわづかにこのなさを離るゝ時はと曰へり、若し然ることを得べきものとせばこゝは今日情として數へ居らるゝその情のいづれにか屬すべきものならん、さはあれこのあはれは既に悲しき方にも嬉しき方にもいふことを得べしとせばこの點よりいふも單なる悲はあはれにあらず、單なる喜はあはれにあらず、然るに單なる悲又は喜のみを直抒したる歌が直抒したるからに誠を述べたりとは曰はるべきも如何にして又あはれをも述べたるものなりといふ得へきぞ、前言ひし如くとく單なる悲喜の情はあはれにあらず、然らば景樹の意は歌のよみ出づべき境

は形式的に見れば誠と稱すべく、實質的に見ればあはれと稱すべしといふに在りて、其誠を説きしことの獨いたく盛なりしは詠歌の工夫上殊に之をいふの必要ありしがためか、然れども豆腐屋の歌あるより見れば余は景樹の意彼に在りしにはあらざるかを疑ふ、而かもあはれを説きし所に於てあるそかに看るなかれとまていひたれば景樹の意はあはれと誠と共に之を説くに在りとせんか、歌の目的とすべき境は俗情を除きての實情なりといふべからず、然れば歌の目的とすべき境は何ぞ景樹より曰はゞあはれ是なるべし、今日の語を以て曰はゞ謂ゆる美情これなり、(大人は歌に高雅の感情さへあらばなど曰はれ、又歌の主眼たるべき雅興など曰はれたるものあれど、かゝる用語をなされたる論文中たちまち又歌は人情の誠を吐くもの也など曰はるゝより見れば余は大人のいはゆる雅興の嚴格なる意義に就ては終にまどへり、或は景樹の論法と全く同じきものにはあらざるなきかを疑ふ、若し大人の意雅興を以て歌のよみ出づべき唯一の境とし給ふものならんには余はこゝに問はざるべからず、單なる悲若しくは喜はこれ雅興と稱するを得べきものなりや、歌は人情の誠を吐くものなりといふ論點よりすれば單なる悲若しくは

は喜はもとより歌のよみ出づべき唯一の境に屬すべきか、さてこは又雅興を以て稱し得べきものなりや、若し然らずとせば歌の主眼たる雅興と曰はれしは曰はれたりとも覺えず、而てこの美情は決して天然に對してのみいふべきにあらず、又美情は悲しき方にも喜しき方にもあるべきもの也、而も單なる悲又は喜は美情にあらず、故に誠とのみいひては歌の目的とすべき境を指示し得たるものにはあらず、隨ひて單に誠のみを説くは誤れり、或はいふことを得べし、誠は歌の目的たる境に對して何を指示するものにあらずと、單なる悲若しくは喜は勿論人情の誠なりといふを得べく、俗情も亦誠たるに妨なければ也、而も歌は誠を排斥するものにあらず、要するに歌は美情をうたひ出づべきものなり、故に誠を述べたるものなりとてそこに美情といふものなければ固よりこれを歌とはいふべからず、故に打まかせて歌は性情を述べものなりといひ、又は歌はひとへの真心を述べものなりといふは非なり、故に又單に歌は嗟嘆の聲なりとはいふべからず、單に阿といひ耶といふは美情と何の關係もなきことを得べければ也、もとより歌は悲喜の感情を直抒すること少しとせず、而も歌は單にこれらの感情を直抒することを目的とする

ものにあらず、故に又歌は人の批評なりといふは固より誤にて、又歌の述ふべき境を以て行爲なりとするも非なり、歌は決して行爲にうたひ出づるを目的とするものにあらず、又歌に厭世觀多しとて答ひべからず、若し歌は厭世觀に關することありとせばそは厭世觀に伴へる美情をうたひ出づるもの也、余はかのあはれといふも全くこの美情を以て論じ得べしと信ず

以上に於て余は景樹が諸種の文書にちりばひて言ひ置きし所、或はねぼろげなるより或はその考の未だ精しからざりし所あるより、景樹の所説を排し、隨ひてその所説の承繼者の一人なりと見ゆる池袋大人の歌論を難ぜんとせり、こゝに余は更に一言を附せん、若し景樹の誠を説きしは専ら詠歌の工夫に就ての立論なりしとせば余は更に非難すべきを見ず、然れども若し大人の誠實主義全くこゝに存せずとならば余は飽まで大人の教を請はざるを得ず、余は大人が餘りに誠實主義に熱心し給ふより大人の門下或は誠をのみ歌の目的とすべき唯一の境なりと信ずる人出てんことを恐る

たゞし右は専ら大人のいはゆる實情に就て論ぜり、さて次に實景に移りて曰はん

に歌は決して實景を表示せんを目的とするものにあらず、歌は實景に關すること
も目的として其よみ出づる所は例へば山川花鳥の位置形體色彩運動變化などの
真相にあらずその實景に對して浮ひ得たる美情なり、余はこの事、和歌に於て最も
著しきを認む、若し然らずして歌は實景を美情を外にして表示せんを目的とする
ものとせば、凡そ和歌には果して能くその目的を達し得たるものありや、この點よ
り論ぜんには、歌は皆からさへづり也、例へばそうく法師が雲林院にての櫻ちるの
歌にして、單に實景を表示せんを目的とし、又表示したるものとせば、かの歌何の取
るべき所ぞ、讀者のため、今左にその全歌を出さん。

さくらちる花のところは春ながら

雪ぞふりつゝ消えがてにする

右花のところとあるをば、假りに景樹のことごとしくいふに従ひて、雲林院の花の
名高きその花の所はどの意義に解せんも、この歌更に特別なりし雲林院の實景を
表示し得たりとも覺えず、花の名所は古今一の雲林院に限らざるにあらずや、試に
この歌のことば書きを掩ひてこれを讀まば、芳野山にもせよ、その他いづこにもせ

は皆適當し得べし、雲林院といふ特別の花の名所の實景は更に浮ひ來らず、そこが
すなはち詞がきの功用ある所なりなどいふことなかれ、題名は更に歌自體の價値
に關係すべき者にあらず、更に又右の歌を誦し見るに、雲林院にては當時果して雪
がふりて消ぬがたくせしか、この問は極めて愚なる如きも、若し雪などはさら／＼
降らざりしものとせば、こは全く審美的想像にあらずや、若し又雲林院の實景を表
示せん唯一の目的を以て、比喻に由りてかく極言したるものとせんか、雪がふりて
など、偽言を爲したれども却りて偽言を以て雲林院の真相を表示せん爲なりしと
せんか、余は更にその目的の達し居らざるを見る、そは雪のふる實景と花のちる實
景とは決して同一のものにあらず、季候と四圍の包繞物との異なるより、雪に對する
と花に對するとは吾人の感覺も又、仲念も同からず、然るに花の實景を表示せん
とて雪を説かんは極めて愚なり、若し單に實景をば遺憾なく表示せんが目的ならん
には、右の歌は拙の拙なるものぞ、然れども若し右の歌にして取るべきの價値ある
ものとせば、そは其うたひ出でたる美情のあはれにをかしき邊にある也、雪ぞふり
つゝ消ぬがてにするといふは、當時専ら旨と行はれし風流ともいふべきものにて

貫之が亭子院の歌合に櫻ちる木の下風はさむからて空にしられぬ雪ぞふりける
などいひしと同じほどの心ばえにて、又躬恒が立とまり見てをわたらんもみぢ葉
は雨とふるとも水はまさらじなどいひしと同じくこは一時の風流に屬すべし、か
の歌は全くむねとこの風流を打出てたるものにて實景などいふは次の次なり、余
は景樹などが實景々々といひたるその實景も全く美情を基として天地の真相の
中より自由に何の理由もなく抽象したる心裡の幻相たるを認む、けだし美情を離
れて實景を説かんとするは極めて妄なり、凡そ歌によりみ出てたる謂ゆる實景を指
してこれを天地の真相なりなど曰はんはいよゝゝ妄なり、そも歌は情を主とすと
いふ景樹の根本の論據よりすれば歌の目的としては實景は説くべからざる筈な
り、然るに景樹は惠慶法師が河原院にての歌に

八重もぐらしげれる宿のさびしさに

人こそ見えぬ秋はきにけり

とあるを難じて曰く、この歌八重もぐらしげれる宿といへるは中々一わたりの古
宅めきてさばかり大とれたらん彼院のさまとも聞しられぬ心地す云々と也、察す

るにこの歌あれたる宿に秋來る心をばをかしくよみおろしたる點に於ては景樹
も許す所ありと覺しきにも係らず、何故かく單に河原院のさまにあらざといふ一
點を以てこれを難ぜんとするか、こは景樹はその情を主とする自家根本の論地を
忘れたるものといふべし、若し實景を離れたる實情は虚妄なりとし、實情を説かん
爲に實景をいふものなりとせば余はこゝに別に實景を取出て、難するの要なし
と雖、右景樹の言に由れば此の如くは解すべからず、前言せし如く景樹は一面に於
ては専ら情を説きしにも係らず、一面に於ては實景を極言し、而もこれ偶ま口走り
し一叫の言にはあらで平生やかましく説きし所にて、殆ど情の自家根本論地をも
奪はんとするは、余は正しく其誤見たるを疑はず、その理由は既に前に言ひたり、然
るに池袋大人は更にこの誤見を明白にして曰く、只人は思もかけね彼院の實景よ
り思ひ入りてこの歌を評せられしは古人も思ひ得ぬことにて香川翁の卓見いみ
じかりけり、此頃早く歌の趣向に力を入れて題詠などにはその實を忘るゝやうに
なりけん、この歌名歌は名歌なるべきも歌の上より曰はばあはれにをかしく少
し論ずべき所なし、千歳に遣りて吟賞せらるゝも宜なり、其果して然るや否は余

のこゝに問ふ所にあらずされど河原院にてあれたるやどに秋來るといふ事を人々と共によみ侍りけるとあるからはその院の實景しらべの上に顯れて動かぬ筈なり、景樹翁の説の如く八重むぐらなど唯一通りの古宅と見え、かの古今集の春歌にいひし如く櫻ちる花のところとあるかの雲林院の景と比すべきにあらず云々と也、されど余は思へらくこれ大に然らず、大人はこゝに二の誤謬に陥れり、第一に若し大人の説の如くこの歌たゞ一わたりの古宅のさまに適當して河原院のには然る可らずとせば、こゝに題名を變じて試にあれたる宿に秋來りける頃よみ侍りけるとありしものとせばこの歌は何の點よりも更に難はずと云ふもの也、若し然る時は題名の變ずるに由りてこの歌自體の價值も變じ得べきこととなるべし、然れどもこゝは想像すべからず、若しこゝは想像し得ずとせば單に實景を表示し得たると否とに由りてこの歌の價值如何は更に變ぜざるべきにあらずや、この最も見易く又最も笑ふべき事をも打忘れて強ひてかくまで實景を説く理由はいづこに在りや余は全くこれを知るに苦む、第二に大人の説に従ひ若し歌の上よりはこの歌少しの難ずべき所なしとせば更に實景を問ふの理由は決してあるべか

らず、前言せし如く實景といふも畢竟歌人の心裡の幻相にして美情を離れては解すべからざるにあらずや、然るに大人の意若し右の歌に於て大人の謂ゆる雅興若くは高雅の感情はあはれにもをかしくも十分に顯れ居れりとするにも係らず、更に實景を問はんとするものならんにはこれ美情を離れて専ら實景を説かんとするもの也、これ妄にあらずや、要するに歌は天地の模倣にあらず、又その真相にもあらず、

以上の理由に依り余は、まこと主義眞淵以來歌學上の輿論なりと見ゆるには根本より反對せんと欲するもの也、余が見る所を以てすれば、まこと主義大誤見の由りて基く所は古來凡そ秀歌といはるゝが皆まことを離れずと見ゆるに在るべし、而もこゝは事實なり(或意義に於ては)然れども前言せし如く歌は單にまことをのみよみ出でたるものにあらず、歌は天地鬼神をも感ぜしむといふ歌の功德の説明を誤りて歌に於て單にまことを説かんとするはこれ古歌を見るの明なきものぞ、秀歌を一誦すれば念佛三度を減ずるに値すといふはこれ決して單に歌はまことなるものたるが爲にはあらず、そも池袋大人の歌論を按ずるに景樹の所見を除けば余

は別に大人の歌論ともいふべきものあるを認むる能はず然れども景樹豈に歌論を盡したるものならんや淺瀬の波廣告文にいふ大人が詠歌の工夫に關する古今獨歩の大卓見といふも余は全く景樹の所論を再説するに過ぎざるを憾む

(二) 歌の要件

歌の根本の要件たることゝの事に關しては既に前に言ひたり故にこゝにいふべきは姿と調との二なり但歌は聲を以て論ずべく形を以ていふべからず然るに姿は形に屬すれば歌學上の用語としてはいたく不適當なるに似たり然れども古來の慣用語なるを以て今はこれに従ふべし然るに又この姿といふは歌學上の慣用語なるにも關せず古人のこれを用ひしは必しも皆一定の嚴格なる意義に於てせしにあらず例へば萬葉姿若くは古今姿といふ時はたゞ打まかせていふさまと同意義にして心調をも含めてこれを曰ひ又のどかにさやかなるを姿を得たりとすなどいふ時は全くその意義を心調にのみ限れる如く又景樹の如きは調はすなはち姿なりとも曰へり尤も眞淵以前には歌學上専ら姿若くはさまといひて調なる詞はこれを慣用せざりしものなりと雖例へば貫之が古今集の序にそのさまは得

たれどもといひしこの狹義のさまは決して調と同一意義なるものにあらず而てこのさまは後世姿の字を以て換言する所にしてこの意義に於ける姿は歌の價値を評するに當りて歌學上一般にいふ所のものとす余がこゝに歌の要件として曰はんと欲する姿はこの意義に於ひての姿なりさて油袋大人は古今集は姿を専らとせる集にはあらず景樹の説きし調こそつとめ物せられしなれと曰はれたるより推せば大人も明に姿と調とを區別するもの也然れども余は思へらく姿に於ては歌の全體よりまづ聲のつゞけがら如何を問ふべきものにてすなはち聲の緩急強弱大小長短のつゞき如何と顧み例へば上の強きは下も強く弱きは弱くふとみ細みなくよみ下すべしなどいふは是れなり詞の斟酌如何をいふは畢竟この聲のつゞけがらを問ふに過ぎざるべし次に姿に於ては心のいひながし如何を問ふもの也例へば心といひのこし又は其多岐にわたらざるを欲する如き是なり但こゝに心といふは心自體の如何には更に關せざるべきものにてすなはち心は羈旅の情を曰はんとするものなるも相聞の情を曰はんとするものなるも全く問ふべき所にあらずたゞ姿に於てはその心のいひながし方如何と顧みるべきもの也故

に姿は心と區別すべし又歌はその聲のつゞけがらに於ては更に非難すべき所なきも心のいひながし方の如何に由りて姿くだけたりと曰はるゝ場合あり故に姿は單に聲のつゞけがら如何にのみ關する者あらずさて調とは通常は相つゞきたる聲と聲との其とのふりたるひびきをいふもの也すなはち調に於てはそのひびきの緩急強弱大小長短若くは小ぐらあきらさやかのかかを問はんとするもの也然れども姿の場合の聲のつゞけがらに於てはこれらの性質如何には更に關するものにあらずたゞこれらの性質ある聲のつゞけがら如何に歌全體の上より觀たるものにてすなはち如何なる異りたる調の歌も姿は同一なることを得べきなり又心のいひながしに關しては如何に調の異りたる歌にても心のいひながし方は同一なることを得べきなり故に調は姿と區別すべし

しらべ調は一の詞の上にも存することを得べく又詞のつゞけがらの上にも存することを得べし而も詞のつゞけがら自體は調にあらず故に調を説かんと欲せばまづ詞を論ぜざるべからずとも古人が兎角詞を制限せんとせしもその理由を究むれば畢竟はこれが爲ならざるを得ざるべし然るに池袋大人はこの點に關して

は極めて寛大の主義を取らるゝが如しすなはち淺瀬の波第二編に就て見るに例へば桑の林、薔薇、椋の木、柿の梢、おもたかの花、小松、菜もろこし、さや豆、木の芽、軒の山柿、鳩、椋鳥、ひえ鳥とまる鳥、白露、狼、菜積車、水車、南の窓、神のみ園、乳房、神の光、骨をつらぬく、兄のさむさなど一般には用ひ慣れざる又は全く新なる詞も著しく見ゆ察する所大人の意はつめたき又はあまりにの如き論ある詞も苟も調を爲し得ん限は自由に取用ゐるべしといふにあるべき歟余は大に賛せざるを得ず一派の歌學者が類に詞を制限せんとするも前言せし如くその理由は専ら調を顧みるに歸せざるを得ざれば也さて又歌に病といひ來れるものありその中にて岸樹、風燭、浪船、落花、亂思、欄糸、渚鳴といふは詞に關すべきものと見得べしと思へど、こは單にいたづらなる制限なりや或は學術的根據を有すべきかこは深く考定を要すべし單に例の制限なりとて排斥せんは理由なきことなるべしこの點に關しては余は更に池袋大人の高見を窺ひ得ざるを憾とすさて又調の根本義に關して大人が實意の調若くは實地の調と曰はるゝはこれ果して曰はるべきものなりやこは言長ければ今は言はざるべし

すがた、歌に句切といふことあり、こは重に姿に關係すべきものなり、さてこの句切に關しては一派の説あり、歌は五句中かならずいづれの所にてか切る、所なかるべからず、且其切るゝはかならず、一所に於てすべく、二所或は三所に於て切るゝは悪しく、戒は全く切るゝ所なきは庶幾すべからざる姿なりと説くあり、然れども余は更にその理由を知ること能はず、但二所以上にて切るれば池袋大人の謂ゆるむづかしき姿となるべき歎、されどむづかしき姿は必しも悪しき姿にはあらず、例へば古今集の近江ぶりに見ゆる、近江より朝たちくればうねの野にたづぞ鳴くなるあけぬこの夜はとある、又近くは八田知紀の歌にやさたちの土佐のとほ山けさ見れば初雪ふれり土佐のとほ山とある決して難すべきの姿とはいふべからざるのみならず、余は却りて其の愛すべきを覺ゆ、さて淺瀬の波を見るにむづかしき姿は成るべく捨てられたりと見ゆ、試に此集の模範的姿とするものを曰はゞ左の如きものなるべし

けりの結なるもの 範 永

とふ人もなき山さとのあきの夜は

つきのひかりも淋しかりけり
なりけりの結なるもの 知 紀

うち見てもずゝしき物はしき島の

大和あふきのすがたなりけり

けるかなの結なるもの おなじく

さくら散る春の山べにまといひして

しばしむかしをわすれける哉

なりにけるかなの結なるもの 直 好

せりつみしあさ澤みづはなつ草の

しげみが下になりにけるかな

これに加ふるに集中の歌は五六の人々のを除けば關心さへ相近きが多ければ姿殊の外五百羅漢めきていづれをいづれと分き難きほどなるはこの集遺憾の限なるべし、されど二所切れの歌もまれくには見ゆめれば二所以上にて切れたる歌をばあながち排斥せらるゝにあらざるべきは余が信ぜんと欲する所なり、さて又

句切に關しては更に進みたる一派の説ありすなほち歌はかならず第二句に於て切るべしといふ説これなりこの説の重なる根據は沿革的の理由に基き古歌は皆然りしものなるに實之の證これを知らず破格の毒を流しきといふに在る如きも古歌の秀逸なるものといへども決して悉くは此の如きものにあらずたとひ此の如きものなりしとするも何故歌の姿は此の如くならざるべからざるかの理由更にあることなし或は第三句切の姿とすれば今様調に流るゝといふ説もあらんか然れともそは何故今様調に流るれば歌の價値を損ずべきか余はその理由を知ること能はず淺瀨の波に就て見るに池袋大人は更にこの説には依られざる如し余はこれを賛せざるを得ず

最後に附けて曰はん今日歌を批評せんに題に合はずとて歌自轉を難する習慣あれどこはいみじき愚論なりこの説の如くせば若し歌のみ後世に残りて題は失せたる場合あらんには後世その歌の價値は終に判ずべからずといふか笑ふべきの限なり歌は決してその世の偏狭なる人々にのみ見すべきものにあらず秀歌は後世に於て秀歌となるべきものと知らずやけだし題は歌自轉の價値と

は更に關係する所なかるべきもの也余は淺瀨の波集中の歌が能くろの題と適合せりや否を研究するの愚を學ぶこと能はず

各評

淺瀨の波第二篇の中に於て殊に立すぐれて見ゆるきはの人々を問はれなば余は喜びてまづ清風大人をはじめ佐藤惟章三輪長行湯淺吉郎井上通泰大西祝の諸氏を挙げざるを得ずさてわが批評は此よりのぎつぎにこれら諸氏の歌の上より他の人々のにも及ぼさんと
余は集中にて共に立すぐれて見えずながらそのよみ口ほとほと伯仲の取組ならんと思はるゝ二家を得たり一は前記の佐藤氏にて一は三輪氏これなり例へば左の歌を見よ

春夕

惟章

花さそふ松のあらしも身にしみて

はるのゆふべも淋しかりけり

同年(明治十九年)の夏あめりかに物學びにまかりける時船中

にてよめる 長行

月をだに見てましものをあやにくに

やみのころしも船出してけり

余は兩氏とも句を隔てゝは同字を脚とすべからずなどいふ禁制には更に拘られざるを見る(但花さそふの方はわざとも文字は然か置かれたるものなりや否を詳にせず更に左の歌を見よ)

三とせ四年すぐれどなほ悲しかりけ

れば

惟章

さるものは日々けうとしと聞つれど

としへてもなほ悲しかりけり

冬夜

長行

年わかき我もをりをりねざめけり

あまりにながき冬の夜なれば

余は兩氏ともふと心に思ひ得たるふしをば或は非難あるまじさかをも顧みられ

ず、大膽にふつと打出る所よくもよくも似たるを見る、更に左の歌を見よ

雲雀

惟章

いかなれば藪のとこをよそに見て

そらに雲雀のなきくらすらん

春駒

長行

花かげにけふもいなく聲すなり

駒のころもうかれはてけん

余は右の歌にてほゞ兩氏の想像の程度を察し得たると同時にその程度のほとほと相近きと思はざるを得ず、更に左の歌を見よ

戀のうたの中に

惟章

終夜われにはものをあもはせて

いかなるゆめを君は見るらん

折にふれて

長行

ひるのまは物にまぎれてねば玉の

よるのみちもふ君がうへかな

こゝに至りて余は兩氏が全く同一のよみ口なるを思はざること能はず然れども
狡猾なる讀者は或は右に擧げたる歌どもを數三誦し見たらんにはほゞ猜し得た
るべきがなほ左の歌を比較し見よ

暗夜千鳥

惟章

いと崎のまつ葉ごしに月あちて

くらき入江にちどりなくなり

山雪

長行

千鳥なく山さわみづはうつりけり

ゆふ日かやく峯のしらゆき

余は調姿の點に於て二氏や、優劣あるを認む更に又左の歌を見よ

あるとしの冬阿蘇にて

章惟

この夕あそなたかねぞくもりける

かた野の原にゆきやふるらん

月欲出

長行

いつのまに雨は晴れけんあし引の

やまのあなたに月ぞほのめく

二氏の差異や、著しからんとす更に又左の歌を見よ

旅にありける頃

惟章

たらちねの親のみもとに文やらん

うきことのみぞ夢に見えける

旅のうちの中

長行

なか／＼に我にまさりてふる里の

親はわれをやちもひますらん

余は姿調の點に於て佐藤氏のかた儘にまされるを認むさて又余はこゝに兩氏の
一大異點を見いてたりすなほち三輪氏には歌句をひざ／＼とよみ出て自らは更
に知らざるが如き所ありて佐藤氏は却りて之に反せる如き所あること是なり如
何なる事由のありしかは知らねども試に集中の歌數を算するも三輪氏のは廿三

首におよべど佐藤氏のは僅に十四首に過ず、而も佐藤氏のは割合に宜しき歌多く三輪氏のは割合に少し、中には全く焼き捨てられんことを望みたき程なるもありその一二を擧ぐれば

外國のふみのはやしのはなざかり

まどふばかりに咲みだれつゝ

とつ國の文のはやしに分け入りて

あもはぬ花のさかりをぞ見し

右の如きすさびはあらずもがなと思へり、姿などは別に取いて、難すべきを見ざれど何となく歌が平々凡々にして恰かも石輪の水に泡立ちたらんが如く、夕つかた田畠の同士打の戦列にはね出てたらん蛙の如く、いくばく多くよみ出てたりとも何の見るべき風情あらんや、余は三輪氏が立すぐれたる歌才を有せらるゝにも係らず何故かゝる歌をむざ／＼よみ出て、更に顧みられざるか怪しむ、然るに佐藤氏を見れば杜鵑血に啼くといふらん如き意氣込を以て曉の空にいたく聲を惜まるゝさあり、讀者もし疑はゞ試に兩氏の歌を一々對比し見よ、これ正しく二

氏特異の點なり、この事若し事實なりとせば余は佐藤氏の方一段と見識の立まさられたらんを信ぜざること能はず、若し又佐藤氏の歌數少きは井上通泰氏の如く主義のためならて全くものいさの爲なりとせば恐くは讀者の軍配はいよいよ佐藤氏に傾かん、然れども余はまた誰が目にもとまりぬべきはの歌各一首を兩氏の歌中より得たり、こは全集中に於ても讀者のまづ心ひかるゝ所のものならん、この歌

明治二十年十月をさな子をさきたてゝ

惟章

おもかけはゆめに現に見えながら

我みどり子はいづちいにけん

折にふれたる

長行

ほとゝぎす初音待まのつれ／＼に

卯の花がきをゆひかへにけり

余は右の歌にて略ぼ兩氏の伎倆のほどを認め得たり、たとひ歌自躰はさほどの價

値なしとせんも兩氏の伎倆のちのづから隠れざる所あり、兩氏の眞價値を知らんには右の歌に過ぐるはなし、讀者之れを再誦せよ、況や右のうたは惟ふにいづれもよしとして讀者のめづらしみ曰はるゝ所のものならんをや、余は終に信ず二氏は決して優劣あるものにあらず、然れども歌自牒に就て曰はゞ讀者の多く心ひかれんにも係らず余はなほ服せず、ちもかけはの歌は勢ありて、調つよくとのふりて、委いとめだたし、されど心あまりに打つけなり、露骨といひては極めて不適常なれど歌の丈高くとほじろきといふ點に於ては終に缺けたり、余はこの歌は八田知紀が晩年にみずからはよしと思はずなりしといふかの吉野山霞のれくは知らねども、もの歌のたぐひにやと思へり、次に時鳥の歌はあまりにいほゆる風流に過ぎ、わざと衣かつぎたらん如く聞ゆるは極めてこの歌のうらみなるべし、余は風流も眞淵の

たちはなのかほれる宿の夕ぐれに

ひと聲啼きてゆくほととぎす

といひけん位にてとゞまりたらましかばと思へり、故に余は二氏の右の歌は取ら

ず、二氏の歌の中にて却りてすぐれたりとと思はるゝは左のふたつなり

雲間子規

惟章

あまぐものかゝれる峯の松ばらを

山原とゞぎすなきわたるなり

山家時雨

長行

もみぢ葉もいまはのこらぬ山里の

かきね淋しくふるしぐれかな

余は右のふたつを以ていまは二氏の秀歌と定む、雨雲のゝ歌は雨雲のかゝるといふ所心をかしく何事もなき所に却りて趣あり、又松原をといひたるわたり頗る力ありて、四五のつゞきも宜しく聞ゆ、峯といひ山とかさねられたれど更に讀者の心にさはるべしとも覺えず、次にもみぢ葉の歌はいまはのこらぬと細りたるわたり趣ありて、ちのづから山里の寂しかるべき地を爲し、かきねとあるも何となくあかしく、淋しくとあるも固より突然ならず、さびしくふるしぐれとつゞきたる所いとめてたし、さて凡てを曰はゞ總じて佐藤氏の歌は心も調も其得意なるはちのづから

雨雲の、歌の如きものならんとし、三輪氏はもみぢ葉の歌の如きものならんとするもの也、すなはち其のつから傾向する所一は心は飽までなほく専ら委調を以てまさらんとするが如く、一は委調は飽まで飽にやさしく専ら心を以てまさらんとするもの、如し故にいよく、佐藤氏つとめられなば委調秀てたる歌出づべく三輪氏はげまれなば心極めてをかきし歌出づべしと思ひしに、惜むべきは三輪氏の天折なりけり

余は更に二氏に於て想像といふもの、やゝ足らざる所あるを認む、この點に於て二氏よりも立まさりたらんと思はるゝは余が見る所を以てすれば湯淺氏は正しくその一人なり、此より余は同氏の歌に移らんとす

凡そ歌に想像の大關係あるは論なかるべし、そも審美的想像の程度は直にその人の歌才の程度なり、然れども歌に想像の向きは單にその想像がいはゆる想像らしき形を取りて現はるゝがためのみにあらず、想像ゆたかなる時は觀念の伴合人の思はざる所に成りて、その歌得もいはれずあはれにもをかきしふしあれば也、さて前言せし如く余が見る所にては湯淺氏は想像の點に於て前二氏よりもゆたかな

り、ざるからに何ともなき事をばたゝやすくとつゞけたるのみなれど、例へば朝つく日「船悉ひも」とつてにも「故郷にかへりてきけば」故郷にかへりて見れば「の歌などの如き皆それ」にめてたし、更に又

大空をこぎゆく船にあらねども月日のほかに志る人もなしとあるを見れば湯淺氏は前二氏とは全く異りたるよみくちなること知らる、されど朝つく日などの歌は景樹などの日記物の中などにむねと見ゆる心ざまにて、歌がらも別に取り出で、いふべきほどのものとは覺えず、大空をの歌はあもしろきはあもしろきなれどたゞあもしろしといふに止まるべし、但池袋大人はかゝるふしは得もよみ果てらるまじき歎、こは一には湯淺氏の長所とも見らるべし、されど余は同氏の歌の中にては左の四首を取らんとす

竹間鷺

さく花も葉こしに見ゆるくれ竹の

はやしのなかにうぐひすのなく

米國にてある海邊にもものして

歌論及批評 桂園派の歌論を論じ併せて淺瀬の波第二篇を評す

ふる里は浪のうへにもあらなくに

海をし見ればこひしかりけり

明治十八年の秋米國にももの學びにまかりける時船中にて

よめる歌

ふじのねの浪間に見えずなりしより

さらにさびしきわが船路かな

秋夕

山のはに日はいりはてゝ雲の色の

かはるもさびしあきの夕ぐれ

咲花もは心いとおかし、梅の花など一もと竹むらの中に打にほいてほの見えたるに、奥を深めて鶯の啼きたる心さまあはれにもよみ出でられたり、姿は景樹のふたゝびはこえじと思ふ陸奥の岩手の關に鶯の啼くとあるに同じく、調はいたく劣りたらんと思はる、且葉こしに見ゆるとあるは別に難とは見えざる如くにもあれど、又何となく物足らぬ心地して他にいひやうはあらぬにかと思はるゝはいかたふ

る里はの歌は心いひしらずをか、ふじのねのはおなじく心よろしく思はる、さらにはといはれたる大に力ありて、わが船路のわがもいきたり但浪まに見えずとあるはいかゞあるべき、こはあつから第五句に船路といはんか地をなして極めて大切の調なるべけれど浪まに見えずといふ意義をおもふに(但徒に文學上の難を求めんとにはあらず)こは入麿のまゝ浪の千重にかゝりぬ、大和島ねはとやゝおなじほどの心なるべきも、右の歌にては浪まに見えずが打つけに出でたればやゝ前後の心ちぬぬこゝ地す後にいべきが八咫の知紀の海路といふ題にて見るが、うち浪路へだて、いどあるは深くたくめるふしはなくて大らかなる所却りて難なきを覺ゆ、されど余は徒らに大らかなれといふ者にあらず、大らかなるも細やかなるも歌全體の姿より見ていふべきは論なきことなれど、余が考ふる所にては右の歌にては單にふじのねの見えずなりしよりとあらば心のびらかにて四五の句の大らかなるとまばらくこゝには大らかなりと曰はんつゞきて却りて心をかしかるべき所なり、後に船路とあれば浪なる詞は欠くべからざる如くにもあれど、一首をづらぬきたる心より曰はゞ浪まは全く蛇足を添へたるものといふべし、然るにも

係らずこれを添へざるを得ざりしは單に見えずとのみにては第二句七聲とならざるよりと曰はざるべからず若し然りとせばこゝには單に姿調を全くせんため
の詞を置くべきにあらずや尤もさる注文通の詞はなきためにもあるべきが浪ま
にとありてはこゝに一首をつらぬく心の外に更らに新なる心添はりぬすなはち
浪まには例へば浪まに月が浮ぶといへば實際浪のまき伏すひま／＼に月の浮び
て見ゆるにてわざと巧めるふしも見えざれど浪まに見えずと消極的にいひては
浪のたちたる所には山の隠れて見えざるは勿論なれど其ふしたるひま／＼にさ
へ見えざなりしといふ意こもりてたゞ海のあなたに富士も見えずなりしとの義
には聞えず随ひていささか一首の姿をそこのふの嫌あり湯淺氏は或はかゝる巧
める意義に曰はれたるにはあらざるべきやも知らずと雖浪まにのま文字は見え
ずといふ消極的の詞とつゞきては如何にするも余はまかく淡薄には心得ること
能はずさて又山のはにの歌はこれも心をかき雲のいろのかはるもさびしなどい
ひ下せるあたり湯淺氏最得意の所なるべし

こゝに凡てをいはゞ同氏の歌は姿調よりも心を以てまさりたるもの也さてその
心に就きて更に考察せんに余は思へらく景樹は須磨に遊びて腹むなしくなりし
折中にもどろかされしとてへつた腹のきぬかれけり牛のこゑなど戯れ又をりに
ふれたるといふ題にてなか／＼にわが曲まばらになりしより世の味はかみしめ
にけり思ふなよあすはさだめて明日ならんきのふは昨日けふは今日などいひし
如く彼が才情の溢るゝばかりなりしより折にふれはてされ歌に近きものも見ゆ
めれど湯淺氏はやゝもすればあどけたる方に走らんとする傾あり例へば氏の歌
に朝つく日匂ひをめたるふじの根はうす紫に見えわたるかななどあるは極めて
あはれなる風情あれどさて再三打誦じ見ればうすむらさきといひあろせしあた
りいづこやらあどけたる傾あり又船系ひもの歌も同じ又前に擧げし山のはにの
歌も一には心の餘りに巧なるよりにもあるべけれど雲の色のかはるもとある
あたりいさゝかあどけたりさればさびしとつゞきたれど歌の上さほどさびしと
も聞えず或は却りてあもしろといふ感なきにもあらず余はこゝにあどけたる心
は審美的にあらずなど言はんとするものにはあらざれど東帯して鑑みの席にあ
りながらやゝあどけたる様の見えたらんは餘りほめたものにあらずこはいたく

歌の品を下すことあり、これ湯淺氏の心すべきもの、一ならん、次に同氏の歌は巧なるに失せんとする弊あり、例へば山のはの、歌の如きはその適例なり、おなじ秋の夕の心をよみ出でたれど八田知紀が、おほひえの峯に夕ゐるまら雲のさびしき秋になりけるかなといひたるに比較して思へ、湯淺氏は巧なるとは知紀のよりは遙にまさりたれど却りてあはれさはいたく劣りたり、こは雲の色のかはるもさびしといはれしあたり餘りつばらに又明に物を言ひすごしたるためのみにあらず、その心の巧なるに失したれば也、余はこの事同氏の長歌に於て殊に著しきを認む、これ正しく同氏の短所の一に教へらるべきものなるべし、次に又同氏は古人の歌の心を取りて我歌とするを喜ばるゝもの、如しすなはち氏の歌に
ふる里は波の上にもあらずに海をし見れば戀しかりけりとあるは古今集の戀歌に

大空は戀しき人のかたみかは物ももふごとにながめらるらん心の心にてたゞ空を海に代へ、相聞の情を思郷の情と引直したるまでのみ又氏の歌に
ふじのねの波まに見えずなりしよりさらにさびしきわが船路かなとあるは知

紀の

みるがうちに浪路へだて、山のはのほそくなりゆくわが心かなといひし歌の心なり、又淺瀬の波第二編には見えざれど替て公にせられし氏の歌に

われのみやねられぬ船ともひしを波にいざよふ夏の夜の月とあるは熊谷直好の歌に

われのみや夜はねられぬといて見れば空ゆく月もひとりすみけりとあると同じ心なり、又同じにはあらねども氏の歌に

大海の浪をばたてずわが船の帆にのみ風を吹かせてしがなとあるは後拾遺集に

ひめが香をさくらの花ににほはせて柳が枝にさかせてしがなとあるを思ひ浮ばれしものなるべし、但この事は他の人の歌にもまれ、くには見えざるにあらず、例へば佐藤惟章氏の歌に

またしきはあまたあれども身の上のうきをかたらん友なかりけりとあるは知紀の歌に

秋をいふ人はあれどもこのころの夕をかたる友なかりけりとある心さまにて
又井上通泰氏の歌に

まがへつる月はかくれて庭のうへにまことの霜の色を見るかなとあるはあな
じ知紀の歌に

よそへても見つる櫻の花の上にまことの雪のかかりけるかなとある心を離れ
たるものにあらず且あなじ人の歌に

あけりともまことの霜は見えぬかな月をいたく白菊の花とあるを思ひ浮ば
れしものなるべしされどこの一事は殊に湯淺氏に特有なるもの也ども古歌の心
を取るは昔より上手の見ゆるといひし所にて我力をほこりがに古人の墨を磨せ
んとする極めて大膽のわざなり景樹も貫之の歌に

月をさへあかずと思ひてねぬものをほとぎすさへ啼きわたるかなとあるを
さやかなる月ゆゑたにもねられぬを山ほとぎすさへ啼く夜なりけりと引直
して我歌とせり貫之は又萬葉集の歌の心を取りて我秀歌とせるもの少からずか
のひすぶ手のしづくににこるの歌も人麿の歌の心を取りし事は人の知る所にし

て又入の咎めざる所なり余もこれを以て湯淺氏を災せんとするものにはあらず
却りて氏の大膽のほどを喜ばんとするもの也然れども竊益せず強益せよとは古
歌の心を取るに關しての動き難き元則なるべし例へば前に擧げたる如く景樹が
貫之の歌を改めたるは實に堂々たるものなり又貫之が人麿の歌に

月かへて君をば見んとおもへかも日もかへずして戀のしげさよとあるを改め
て

月かへて君をば見んといひしかど日だにへだてず戀しきものとして我歌と
したるも同じすなはち右貫之の月をさへの歌と景樹のさやかなるの歌と比較し
又貫之の月かへての歌と人麿のと比較し見ればそれぞれに異りて宜しき姿調あ
りて各別箇の歌たるの價值十分なり更に曰はさやかなるの歌は景樹の歌にし
て貫之のとは見るべからず月かへて君をば見んといひしかどの歌は貫之の歌に
して人麿のとは見るべからず歌がらよりいふもいづれ劣れりとは見えす更にむ
すぶ手のしづくににこるの歌を思へ貫之の手なみいみじきもの也されど赤人の
歌に

春の野にすみれつみにとこし我ぞ野をなつかしみ一夜ねにけるとあるに對して貫之が

春の野に若菜つみにとこしものをちりかふ花に路はまどひぬとよめりしはや
竊盜の嫌なき能はず又貫之の志賀の山ごまに女の多く逢へりけるによみてつ
かはしけるといふ辭がきにて

あづさ弓春の山べをこねくれば路もさりあへず花を散りけるとあるに對し景
樹がさて行くほどにやことなき女はら一むれ逢へりあのがじ、小褌とりもあへ
ず振袖ひすびながら岩根ふみさけしどろにも亂れくるものか

風こしの坂の行あひに散かゝる一むらもみぢ色のこきかな物にも似ずさりあ
へがたし、傍に問へばこは筑紫なる國のかみのみむすめ吾孀の御館にくだり給ふ
なりといふ

などいひしは景樹が全く貫之に酔へりしものにて又貫之の歌に

あやめ草根ながら取ればさわ水のふかき心はしりぬべらなりとあるに景樹が
あやめ草かりにのみくる人なれば池のこゝろや淺しと思はんとよみたるは心

や、異になりたれど竊盜をかねたりと謂はざるべからず尤も景慕深き時はその
人の歌にかははりて我歌の成ることあらんはあつからなる傾にて且數多よみ
出る歌中なれば興にふれ折にふれてはいくさまの歌も出来べきは勿論にて
答むべきならず只唯かゝる歌をばむねとよむに至ればこそ斯道は衰へゆくなれ
されど景樹の右の歌の如きは一時興にふれてのわざにて景樹は決してかゝる歌
をむねとせしにあらず景樹は飽まで獨創的なり貫之に至りてはや疑なきにも
あらず但貫之も歌の能事こゝにははれりとはせざりしこと明なりさて湯淺氏は
この點景樹貫之いづれなりやと言はゞ余はひしる貫之の方なるを思はざるを得
ず余は淺瀬の波第貳編に載りし歌のみにては氏を酷評せざるべけれど、こは實に
氏特有の傾と見ゆればこゝに反復せざるべからず若し折角大膽に古歌の心を取
りたらんもその姿調にして思ふやうならざる事あらんには猿真似といはれんも
止むべからず或は餘りに物を代へ詞を變へなば見苦しき竊盜となるべしされば
若し我歌の終に古歌に及ばざるを知られなば氏は直にこれを燒き捨てんの勇氣
なかるべからず

要するに右の如く湯淺氏は第一に「おどげんとする傾あり次にいたく巧むの弊あり次に又古歌の心を取る大膽ありこの最後の點に關して余が殊に著しく覺えたるは氏は貫之と同じ單にこの點より見て其古歌の心を取りたるは氏の歌の中にもすぐれたりと思はるゝものゝ中に在ること是なりさて此より井上通泰氏の歌に移らんに氏も景樹よびその高弟などにはいたく傾倒せらるゝものから前に擧げたるまがひつるの如き歌もあり又例へば景樹が「寄琴戀といふ歌あるにかいはりて琴といふ技にまぐるとてよまれたる歌まであるやうなり又本編には見えざれど氏の歌に

山かげのひとともみぢいつの世の光まちてかてらんとすらんとあるは古今集に

おく山のいはがきもみぢ散りぬべして日ひかり見るときなくてとある燒直しのみこは知紀が

ひと雨をまちてとあもひし初わらびくやくしく人に折られける哉とまやれたるに對して高崎正風氏が

立とまるわが足もとの松茸をくやくしく人にとられつるかなと猿真似し若しくは古今集の歌に

山かくす春の霞ぞうらめしさいづれみやこのさかひなるらんとあるに對して小出榮氏が

大和路のひら山とほくかすみけりいづれ芳野のあたりなるらんとさかしらしたる類にて現時専らの風流とも見ゆめれどこれすなはち歌人の種ぎれとなりしを證するものぞ余は何故に井上氏がかゝる風流して打喜ばるゝかを怪むされど暫く本編に出されたる歌に就て言はゞかゝる類の歌は氏の歌の秀逸なるものゝ中に屬せずまがひつるの歌は知紀の比して姿調更に遜れる色なきも余はいさゝかも秀歌とは思はず心いたくいじくけたればなり或はむしろ死したれば也又あまりに巧みたる所あらはなれば也知紀の歌も余は勿論よしと思はず又湯淺氏の「おどげんとする傾に對しは井上氏はむしろ正反對の方に在るべし試みに曰はゞ井上氏の歌は柔術といふものゝ身構えたらん如きさまありとも見らるべき歟さるからに或は却りて苦しげに見ゆるものなきにもあらずされば又景樹の抑へ

難くして常にあふれたる如き歌想の自由自在はありとも覺えず而もこの自由自在なき所に氏の長所はあるべし、そも多作せざるは氏の主義と聞けどこの主義は景樹には如何にするも守り能はざりし所ならん、又こゝは湯淺氏にも同じく然るべき歟、余は思へらく、不多作主義は井上氏が歌想の自由自在なきより臆病にも立籠りたる一の城壁にして、これ恰も氏は長歌に打出るほどの歌想なきより景樹の大才にしてなほ且長歌には心うとかりきなどいはるゝが如し、不多作主義は主義としては既に一文の値もなきもの也、景樹がわか歌の世に散亂するを恐れしは既に臆病の極みにして、知紀が早く家集を出すこと憚りし如きも到底乙女心の遠慮に過ず、次に又湯淺氏のいたく巧むの弊に對しては井上氏はまづなしとはいふべからず、まがひつるの如き歌もあれば也、されど大方には然らざるかたならん、次に又湯淺氏は姿關に於てなほ不満多けれど余は井上氏はこの點に心せらるゝの殊に深きを思はざること能はず、さて井上氏の歌

椿

椿咲くさとの竹むらひまをあらみ

あちたるはなの數も見えけり

折にふれて

ありたちてむかふ野川の氷の上に

ぬけいて、咲くおもだかの花

利根川にちかづきぬらし行かたの

まつばらごしに白帆見えたり

妻の一七日に墓に詣て、

折にあひてうらやましきは女郎花

かれても残るすがたなりけり

つばき咲くは山里の家居などのわたりのをかしき心ざまいみじくもよみ出られたり、たちたる花の數もは古今集のおつる紅葉の數を見よとかなどの心もちひなれど更にをかし、姿調なども申す旨あらず、この歌は湯淺氏の咲く花も葉ごしに見ゆるの花と比較し見れば大に興あるべし、ありたちての歌はぬけいて、咲けるなどあるあたり心いとめづらかなり、若しこの歌景樹が成年のむ月七日に七草摘む

右の歌を見よ人の更に思ひよよばぬ所をば能くもよみ出でられしものかな、古人の一時興にうかれてうめき出でたる歌の心をも右に引き左に移して恰も蟻ども、の相争ひて力をかぎり一塊ばかりの物を運びたらん如くにして打喜べる人々とは決して同日に論すべきにあらず、大西氏は特創的なる所はあらはなり、この他暮春の歌に風ふけば袖にもすそに花ちりてくるも春はちもしろき哉といはれたるなど何となきことなれど心は凡にあらざれどかく四季折々の歌にまで世界観とかいふものめきたるがほろ／＼見ゆるより或は氏の歌には別に歌らしき心といふはなく氏にはたゞ詞をこれかれ撰ひ用ひるの手なみありて哲學の先生としての七ひづかしき世界観をばそのまゝ歌句の上に打ち出るものなりと曰はん歟、余は全たくその反對なるを信ず、氏の歌に現はれたる心は全く歌の歌たるべき心にして且つ特創的のもの也、されどその委調に至りては未だ思ふやうならぬところありと言はざるべからず、右に擧げたる三首の歌はその心より曰はゞ非凡なりと見ゆるにも係はらず、又右世の中の歌は委調よりするも捨つべからざるは勿論なるにも係らず、余は心調委共に完き歌としては却りて左の一首を取らん

とす

精神一到何事不成といふことを

一すぢに思ひいる矢のやさきには

かたしと見ゆるものなかりけり

されど又一方より曰はゞこの歌は歌として極めて平々凡々たるものなり、そは心がさほどにもなき故ならん、そも心のめづらかなるを取らんとすれば委調これと合はず、こゝに於て余は大西氏の歌に就ては心の非凡なるにも關せず、この事は氏の長歌と湯淺氏のとを比較すればいよ／＼明ならん、委調の點に於てこゝろ劣りせらるゝを信ぜんとす

さて以上いひたる四氏はいづれも今日歌人として既に家を成し居る老年の人々に對しては後進と見ゆる所なり、この人々に對しては池袋大人は兎にも角にも先聲たるべきは勿論なるべく、又實に本編の撰者なり、されば大人の歌には一段とぬけていてたるもあらんことは讀者のまづ喜びて期する所ならん、余は是より門下三千の高弟ありとの榮譽あるこの大人の歌に移らんとす、但大人は嘗て委調の優美

なるを以て香川流と心得ること勿れといはれたる人なり、されば大人の歌を評せんには余は殊にその心に注意すべきの必要あり、且又前言せし如く大人のまこと主義なることは讀者と共に肥臚すべき所なり

こゝに一の喜ぶべきは大人の歌は數多出されたれば讀者は明に大人の歌才のほどをば限なく知り得るの愉快あるべし、因りて余もまづ試にこれを推測せんとすこは讀者として當然の注意なるべければ也、さて大人の歌

あさがほの花のかげみしやり水の

こぼる冬にもなりにけるかな

かぎりなきおほ海原にいでにけり

わがふる里はいづこなるらん

都にておもひやるだにさびしきを

ひなのやまへの秋のゆくれ

風ふけばさかりの花もちるものを

君を千代ともおもひけるかな

これらにて見よ大人が審美的想像の程度は隠るべくもあらず、遠慮なくいはゞ大人の想像は極めて乏しきもの也、朝顔と氷と、又は海と故郷と、又は都と鄙と、又は散る花と人の死ともひ合されし心さま何たる凡々ぞや、平淡が最長所たる知紀の歌集中極めて不出来なるものを求むるもかくばかりおもしろからぬは一首もあらざるべし、平淡とは決して想像の凡々たる謂にあらず、但大人は平淡といひて自ら打喜ばるゝやも知らざれどこれらの歌は明に大人の想像の乏しきを示すものにて、又大人には特削の才なきを證するもの也、平淡などいはふべき限にあらず、酷評すれば總じて大人の歌の心多くは死したりと見ゆるは、或は老人がうるさきまてくりかへしくいふ愚痴とかいふものに類する所あるは、大人の想像に於て一大缺處あればなり、されば又その結果としてはいづこにも同じばかりの心さまをよみ出んとする傾なきを得ず、例へば雪中梅の題にて

ゆきをのみ拂ふとおもひしあさ風に梅のにほひのまじりけるかなとあるに、落花入簾の題下を見れば

にほひのみかよふと思ひしたまだれのをすのうちまてちる櫻かなとありこれ

らは題は異にて物もかはれど何ばかりの區別し得べき心さまかあらん、こはたゞ
題をかへ物を改めたるまでのみ、えるが上にもえりて出されしと思はる、晴の歌
中に而も百首とは出されざりし歌中にかくも相似たるが見ゆるはこれまた大人
の想像がいたく乏しきを證するものにあらずや、さてかくの如く想像の乏しきを
なほ明にせんため試に大人の歌中にて心の艶なりとも見らるべきものに就てい
はば例へば

もみぢばのかげを流るゝ谷川は綿の帯のこゝちこそすれとあるを見よ、これ恰
も昔時の日本書といふものに例へば水の流るゝ河べの様を畫かんには春水如藍
といふことあるに由り水流とすべき處に唯只藍色の繪具を塗りつけたらんが如
く、古人が秋の河流に紅葉のうつりし様をば綿の帯に見立てし所あるをば引のば
たり想像の殊に平凡なるを見る、美情もほとく涸れたる如くにて更にあふれて
は見えず、これをかの有名なる公任の歌に比して天地の隔あるは勿論古今集の
神なびのみひろの山を秋ゆけば綿たちさるこゝちこそすれとあるに較べ、又は

知紀の

もみぢばの綿をひたすたつた河かみのめすらん帯かとぞみるとあるに合せ見
よ、姿調は暫く言はず心は生と死との相異あり、これ大人は想像の乏しくして特創
の才なきより只唯長流似帯といふこととよび紅葉似錦といふことをば思ひ合せ
て、或はむしろ古人が紅葉のうつる河流を綿の帯に見たてたりしをば飽まで基に
て唯只この河流綿帯といふことをいはんとて五句卅一字をつらねたるまでなる
に、右二歌に於ては紅葉似綿といふことをば我物としてこれを自由自在に使用し
すなはち大人は既存の觀念の外には何をも思ひ得ざるに右二歌に於てはあふる
るばかり各自己の思ひ得たることの爲にこれを使用したれば也、歌と畫と併せ
はんは或は非難あるべきも大人の歌には様々に依りて胡蘆を畫くの笑なきを得ず、
これ大人は想像の點に於て一大缺損あればなり、されば狸といふ題なれば大人は
腹鼓といふことの外には何をも併せ思ふことを得ず、又蝸牛といふ題なれば道の
光などいふ外には何等の觀念の伴ふなきは殆ど空に推し測からるゝ所なり、さて
又大人の歌にては有心とも曰はるべき方なるに就きていはば例へば

世の中の塵にけがれぬやま寺の苔のむしろにちる櫻哉などあるを思へ、殊にありふれたるくちつき特創の才なきは極めてあらは也、次に又巧みなる方なるに就きていはゞ例へば

さくら花しらみわたれる山のはにほ夜をのこすありあけの月とあるに見よ、花よりあくる春の曙又は花よりしらむ有明の月などは古人のうるさきまでよみふるしたる所にあらずや、この歌古人のよみふるしたることの外に何をいひ得たりや次に又奇稔の方なるに就きていはゞ例へば

をさな子がうつやつぶての音きゝて池の氷のあつさをぞしるとあるに見よ、家の隠居などが辻番火桶とかいふものに猫の如く背をまるくして抱きつきなほさむしさむしといひながら窓又は障子のすさま又はやぶれなど探りつゝ、ゆくりなく幼童どもが元氣よく窓前の河水の凍れるが上に瓦礫など投げ走らしたるに、ふと耳はかたむけながらなほ頭は擧げ得ざるが如き所あるはこの歌の心なり、武藏野集にをさな子が一二三四とつくりの數へてまちし春はきにけりなどの方却りて心の凍り居らざるだけめでたがるべし、又大人の歌に

霜かれしむくの梢にむく鳥のむれぬる冬になりにけるかなとあるに見よ、こは只唯むくつけき詞をつらねられたるのみ、いかなる鬼をばひしがんと思ひたれしにやあらん、この歌などは狸の木のぼりとかいふものよりも拙き心地す、試にこの歌より徒に人おどろかしなる假面をはぎ去れば何ばかりのめでたき心か残らん、直好が夜もすがら松のぼだ火をたきあかしわらぐつ打ん冬はきにけりといひ、又は知紀がおもはざる見ざる聞かざるいはざるもかゝはらざるにまさらざるらむなどあるに合せ見て想像のありなしを思へ

更に又一方より見れば大人は多作せらるゝ方なるべし、試に淺瀬の波に出されし歌類に就きていはゞ湯淺氏は十四首井上氏および大西氏は各十首のみなるに大人は歌は六十四首におよべり、然るにかく多きにも係らず心よしとおもはるゝ歌人は至りて少し、これ大人の歌才のほどを定むるに於て見失ふべからざる一事實なり、凡歌數多き歌人には特創の才あふるゝばかりなるよりおのづから多きと又は極めて平凡の方なるに恰も多言の人の如く唯徒に歌數多きとの二あり、余が見る所にては大人の歌には特創の所見ること能はざれば大人は此後なる方に屬すべ

きものと云はざるべからず
要するに大人の歌才に就きていはゞ余は遺憾ながら以上の如く大人は想像極めて乏しく更に特創の才なきものと認むされば大人の歌は一面には元氣なく一面には小さやかに巧みたる所多きは止むことを得ざる所ならん然るに大人の歌には心に關して更に又其誤りたる主義より來る一の難すべき傾あり例へば大人の歌に

はちす葉も水もかれたるふる池に木々のち葉のたまりけるかなとあるに見よ、水なき冬の蓮池に木の葉の散り埋みたる形骸のみをよみ出でたるまでにてあはれなるよしも殆どなきはこれ大人が全くまこと主義に誤られたる結果といはざるべからずかくて歌は唯謂ゆるまことをのみよみ出るものと思はるゝより、一面には大人の先天的想像が極めて不十分なるより大人の歌は平凡なるが上にも更に平凡ならんとする傾あり、こは大人の熟考を乞はざるを得ざる所なり、且又大人の歌を見れば親義が忍草の序にうちひそみてのみ居給ひしかばなくはしき海べ山べにて摘み得給ひしは一葉だにあるべきならずとある如く、家に打ひそみて

居給ひし折の歌のみ多きやうなれば大人の想像は又これが爲め大にその發達を妨げられしにはあらざるか

然れども大人がこの道に心を入れ給ふの深き年來の勤勉はその歌を見れば遙に思ひやらるゝ心地すすなほち大人が歌の姿をいたはるゝは實に老練の手なみといはざるべからず、大人は心を先とせらるゝにも係らず、又心は難すべきものあるにも係らず、大人の歌はその姿に於ては更に難すべくもあらず、されど心に大缺損あるより調は思ふやうならぬが多きは止むを得ざる所なるべし、さて左には心のやゝ元氣ありと見ゆる限をぬき出て、評せんとす

梅林鶯

山さとの梅のはやしのをちここに

鳴こそかはせうくひすのこゑ

月前柳

おぼろ夜の月にうかれてかも河の

やなぎのかげを行かへりつゝ

明治二十三年八月立秋の日鎌倉の由井ヶ濱にて

あまがやの旅ねの床にひよくなり

あきをよせくる由井のうら浪

鎌倉にて

賤が家の園のもろこし穂にいて、

あきかぜすゞしかま倉のさと

折にふれて

しほあみし人はかへりてあき風の

吹おとさびしかまくらのさと

山さとのは大人の歌の中にては殊にすぐれたりと思はる、かゝる歌は殊に調を以てまさるべきものにて別に異なるふしも見えねど何となくめてたし、されどもこれを直好が朝鶯に

くれ竹のふしみの里を朝ゆけばをちこちになく鶯のこゑとあるに比し見るに心委調共に一段と劣りざまなるは遺憾のこと也、おぼる夜のは夢に物いふ如くい

はんとして全くは云ひ得ざりし所あるが如き心地す、且月にうかれてのあたり凡てのいひざま今様調にて何となくなまめきたり、なまめきたるは大人のゑひ心地やよろしかりしにもやありけん、されどこれを知紀の

よく風も霞となりてかも河の柳が枝にかゝりけるかなとあるに併せ見れば巧拙は固よりいふべきならねど歌がらもいたく劣れり、あまがやのは秋をよせくるなどこの歌の詮なるべし、これを知紀の

西のうみのあまのいそやに來て見れば垣根よりこそ秋はたちけれとあるに比するに、知紀の歌にては秋は立けれとある能くきこゑたれど大人のにては秋をよせくるとある何となく心おちつかぬやうなり、更にこれを貫之の河風のすゞしくもあるか打よする浪とともにや秋はたつらんとあるに比すれば彼は更にいはず、その調はくらべいふさへ既に不倫なるを覺ゆ賤が家のはもろこし穂にいて、など新しきことを言はれたれど別にめづべきほどの心ざまも見えず、沙あみしはよろしき方なるべし、さてこゝに總言すれば右五首は殊にまこと主義、當然の適用として見ず聞かぬことは絶えていはじと思ひ構へられし所ありて、それが爲め一

面には幾分か歌に元氣を興へたれど一面には又大人の想像はこれがため不動の
 かなじばりを甘んぜし所も見ゆ但秋をよせくるなどはやゝその束縛をもがき解
 かんとしたるやうなれど終に意にまかせざりしはこれ大人にはその天分に於て
 既に運動の大自然を失ひ居らるゝより思へば止むを得ざる所ならん遺憾ながら
 余は大人の歌才は以上既に論じたる諸氏の下にあるものと認むその歌自体に就
 きていふも余はたゞその数の多きに驚きたるのみ以上諸氏の歌に比して其歌屑
 の多きは余が極めて遺憾とする所なり
 右の如く池袋大人の歌はその数多く又極めて平凡なり然るに淺瀬の波の詠者中
 には大人の正當の承繼者ならんと思はるゝ人あり磯貝由太郎氏は是なり氏の歌
 は池袋氏と同じく多く出されたれども余は一も感服するものを見ること能はず
 いづくまで平凡なるよみくちにかあらんさて又財部實秋氏は知紀翁の門に及ば
 れし人と聞けど余は別にこれぞと思ふ歌を見出すこと能はずその他の数多き詠
 者はいづれも脩業に餘念なき人々と見え且いだされたる歌數も至りて少ければ
 余は十分に評すること能はず但雲間の星のほのかにも特創とかいふものゝ光見

えぬは何故にかあらん余は全編中よしとあもへるもの四首を擧げて茲に讀者に
 紹介するに止らんとす

夜梅

大ぞらの月はおぼろに見えながら

伊丹義衛

小雨ふる夜にむめが香ぞする

あなじく

藤尾春江子

笛のねもとほくきこえて春の夜の

おぼろ月夜にむめが香ぞする

米國より母のもとに文つかはしけ
るをり
下村孝太郎

たらちねの母につかへん願より

外にねがひのなき身なりけり

米國の物學びに遣しける我子のうへを

朝夕神に祈りて

下村房子

あまりにも我ねぎことのしげれば

神のみまへもはづかしきかな

結論

余はこゝに總言せん但三輪佐藤湯淺井上大西氏は暫く別として論ず本編には平凡なる歌のみ多く集められたり平淡なるは見えず奇抜なるも見えずその姿より評せんか其批難すべきものなき代りにはいづれも昆布の行列なり蛙の背くらべなりその心調より評せんか大祭禮の日に都大路を横に折れて男女數多並居る裏長屋に入りたるが如し只唯かしがましき聲は一なり心も一なり然れどもこれその罪は詠者にあらずしてむしろ撰者にはあらざるか池袋大人は深く他の非難を恐れてつとめて奇抜の方なる歌をば捨て飽まで平淡なるを表準とせられしよりその結果平凡の歌のみよしとしてむねと撰ばれ自ら知られざるにあらざるか且又大人がまこと主義を盲信せらるゝの結果は平々凡々にして美情も多くは見えずる歌をばむねとえり出されしにはあらざるか本編中の歌があまりにそろひも揃ひて平々凡々なるより考察すれば余は然りと断定せざるを得ず

紀事及小説

つんぼ庵日記

はしがき

數本の栗の大木は日かげ遮りて、此頃やうやく形ばかりは出来しと目につきし實の、日毎にむつかしく、とげ／＼しくなりゆくが、深く繁りに繁りたる葉の間より見え、梢は遙にわが二階の屋根よりも高し、栗の間々には梅、桃、柿または柘榴などまじり、夏も深くなりければ、縁が中に獨り赤かりし柘榴の花も大方見えず、いづれも葉のみ生ひ繁りぬ、椗の年ふりたるは岡の上より、また高く頑固なる枝を擴げて、かなたの森にまで續きぬ、されば山中ならねど、わか家はその心地のみす
二三軒隔てし家のも、とより屋根も見えねど、そこなる竹叢は殊にきわだちて青々したるが折ふし風にゆられて上の方のみ見ゆ、それよりやゝ隔てし森の梢に、一枝の枯れしあり、今まではそれとも心とめてありしが、或日のことなりき、椗近く夏の日照りて、暑さ堪え難く、少しなまけ心の出でて、ふとかなたを見出せば、かの枯れの

し枝に、やゝ大きく、うすとぼけたるやうなる、やゝ丸き物後向になりて、をかききと限なし

何ならんと眼を凝せば、この怪物は鼻なりき、兩の翼少し廣げて頭をそが中につき入れ、日出てし空にまだ有明の月のきを晚れたるを見る如く、いかにも間拔けたるさまして、何やらん身動きす、一聲試に驚かしやらば如何なる狼狽して遁げんとするにかと、われは獨り打笑されつゝ、暫し見てありしが一時間ばかりがほど経て、ふとまたこれを望めば、既に姿はあらざりき

晝は鳥に弄ばるゝといふ鳥なれど、今一度かの姿見たしと、をり／＼かの枯枝眺めけれど、見ぬず、日はぢり／＼と照り盛り、栗の木の間にも日かげちらつくほどにあやしきかな、鳥の聲すも、とより前に見しと同じきや、あらずやは知らねど、例のまのぬけしやうなる聲の、晝は殊更まぬけたるが、折ふしわが家近く名のりて、夕ぐれの星のかげ涼しき頃にまで及びぬ
そのあくる日、われはまたかの枯枝に彼が姿見んことを願ひけれど見えず、それよりは恒の如く日くれて、例の聲す

今とりしめもなき日記書きつけんと志し、／＼につきまづ思ひ浮ぶは、かの鼻のさまなり、そもわれはつんぼなれば、わが家はつんぼ庵と名つけぬ、うるさげなる世に騒ぎはもとよりわれに聞くの耳なし、否、なきにはわらねど、つんぼなれば仕方なきなり、さらばかの鼻の聲はと問ふ人もあらん、答へて云はく、われつんぼなれど適意の聲は能く聞ゆることあり、彼の鼻の聲の如きもそれならん、されどわが最も嬉しかりしは、物皆さかしげなる白日中に於て、如何に思ふもまのぬけたる彼が枯枝上の姿なり、われはこの姿のうらやましく、こゝにこの日記かきつく

六月三日

この日、われ茫然として小草の上を踏み、田の畔を涉りて、小川の流るゝ所に出てぬ、岸に小舟あり、その一端は竹の斫りしばかりなる棹立ちて、繩舟より結ばれ、他の一端は物もなく、たゞ岸近くつさぬ、そこに七八歳ばかりなるおとなしげなる少女あり、兩手つかまりて魚の泳ぐを面白げにのぞき居るさまなりしが、いかにかしげむ、舟は一揺動ゆられて、靜に岸より離れんとす

向の岸の竹むらには、殊に數竿の若竹の延び出てたるがなよ／＼として、朝日涼し

く、底透きたる水は一すぢの細き波動さぬ、少女は急ぎ兩手離さんとするに、舟はそ
のまゝ廣くなりぬ、少女はいよゝゝ其手離しかねけん、膝に驚きし如く聲を擧げて
泣きぬ

われも此時俄に狼狽せし如く、そこに走り行きぬ、されど小女が半身は、あはれ既に
水になれりき

七月二十日

われは惑ひぬ、われ世にはうとくして、何の聞ゆる所もなければ、みづからつんぼな
らんと思へど、時ありてまた聞ゆることあり、聞ゆればわれつんぼにはあらじかと
も思へど、凡そうるさきは耳なり、何事もうるさきはこゝより入りぬ、彼のジャン、ジ
ヤックもむしろつんぼなりしならんには、われ人類不幸の標本たらんとまでは覺
悟せてもありしならんにと思へど、誰も耳あれば、いかて世のうるさきを逃れん、骨
肉はその窮を訴へ、親戚はわが愚を罵り、朋友またわれを嘲り、われも呆れてみづか
ら罵れば、その厭ふべき聲はまたわが耳に歸り來りぬ、臆病なるわれは日夜萬雷の
騒ぐが如きを覺えて、終に聞えずなりぬ、ほむる人はもとよりあるまじけれど、大口

に毀らゝも今は苦しきを知らず、聞えねばなり、これと思ふ時はわれ恒にわがつん
ぼならんを信ず

口はわれ物いふ時は、人また語り、おもしろからぬはまたこゝより起れば、二年餘り
が間、われ人と雜處しけれど、絶えて物いふことなかりき、さればわれ言語といふも
の忘れしやと、其後そこを出て、まづわが友と語り見けるに、わが舌はまだあり、世
の中罵らんは能はずしもあらず、たゞいかゞはしきは耳なり、されどわれはまたそ
の能く聞ぬんことを願はず

けふは土用太郎なり、われはこの日を以て懺にわがつんぼたるを定む

七月二十三日

此夏はいづこへも出でず、庭はいと狭けれど、花の上には限なき涼しさあり、うるは
しく高きさまも覺え知らんとて、近き所の植木屋より、あさがほ買ひ來りぬ、これよ
り妨なくば毎朝ゆきて買はんと思ふに、就きまづ書いて見たくなりしは、これをよ
しと思ふわが心のあらしなり、さて花見つゝ、筆を走らすれば、左のやうなるもの
となりぬ